
葉崎Guardian

nakoso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葉崎Guardian

【Nコード】

N3722C

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

「少しでいいから……話を、聞いて」女の言葉から、物語は開始する。

プロローグ：01「街角奇行」

プシッ。

プルタブを立てた時の、炭酸が溢れる音が好き。左手を腰に当て、開けたばかりの缶を一気に呷る。ひんやり冷たい液体が喉を流れ、ぱちぱちと爆ぜる炭酸の名残が連れる爽快感。

そして、げっぶ。

通りすがりのオバさんが露骨に嫌そうな顔をしたが、知ったこっちゃない。

空っぽになったアルミ缶を手で潰し、ゴミ箱に放り込む。たった今出て来たばかりの銭湯を見上げ、出入り口として迫り出した瓦屋根の掲げる時計を確認。

ただいま、午前7時37分。

「よし」

自らを奮い立たせて、足元に下ろしていたショルダーバッグを肩に掛けた。

黒と紫のボーダーシャツと、デニムハーフパンツに革のサンダル。すっかり夏を感じさせる晴天の下、差す陽射しにラフな服装で対抗する彼の向かった先は、銭湯から歩いて10分ほどの場所にある古びたコインランドリーだった。文字がかすれてかろうじて『コインランドリー』と読めない事もない、看板の構えるドアをスライドさせる。

バンッ！

「わっ!?!」

突然の大きな音に彼は、マヌケにも声を出して驚いた。

見れば、列を成す乾燥機にスーツの男がへばり付いていた。茶色く染めた短髪を立て、細面にサングラス。派手な柄のシャツをだらしなく着る胸元には、太い金のネックレスが覗いた。

見るからに、そっという人だった。

……わー。

正直なところ、今すぐにも逃げ出したかった。

「っだ、だっだっ」

男の口がパクパクと開く。えらくもった言と、異常なまでに見開いた双眸は瞬きもしない。

「だっだだっ誰だ！」

よくよく見ると、尋常でない量の汗をかいているのがわかった。額に浮いた汗の粒が顎先にまで伝っている。首に至っては、水をぶちまけられたかのように濡れている。恐怖と焦燥と疑心と……他、マイナスなもの諸々が、男の体を取り巻いている。

「えっと……」

逃げようか逃げまいかというところで引け腰になりながら、どう答えたものかと逡巡する。1秒の間を置いて男が再び悲鳴じみて問う。

「誰なんだよ！」

男が誰かから追われているのは明白だった。

「は……初めまして。松原幸輔まつはら こうすけといいます……」

気迫に負けて自己紹介。乾燥機にへばり付いて鬼気迫る形相の男と、入り口で逃げ腰になりながら名乗る少年。傍から見れば、さぞかし愉快に映るのだろうか。

「……えー、じゅ、18歳のフリーターです」

「……………」

「……コンビニでバイトして……」

「そんなの聞いてねえよ！」

「ごもつとも。」

「どうしてここに来た!？」

「あの……洗濯物を取りに……」

「こんな朝早くにか!？」

「……バイトが深夜だからです……」

「うそつけえ!」

狭い部屋で叫ばれるのは鼓膜によろしくない。

「じ、じゃじゃじゃあ！　じゃあそのバッグは何だ！？」

ツバを飛ばし、なおも叫ぶ男。

「洗顔用具です……」

シオルダーバッグのベルトを握り締め答える。手の平がうつすら

汗ばんでいた。あ

「さっきまで銭湯に行つて……」

「うそつけえ！」

こつも頭ごなしに否定されると泣きたくなつて来る。

「うそかんじかじゃないつてば……」

「中味見せる！」

「え？」

「中味見せるおお！！」

男の金切り声というのがここまで聞くに堪えないものだと初めて知った。

「な、中身なんて見て、どつどうするん……」

「つべこべ言うな！　見せろつってんだ！」

何なんだよ……　仕方なく、背負ったバッグに手をかけて。

「待て！」

「何ですかあ……」

あれやれこれ待てと言われ、さすがに立腹を覚え始めたが、すぐにその表情が強張った。スーツの内ポケットから震える手で取り出したのはナイフ。両手でしっかり握り、震える切っ先を幸輔に向けたところで、顎で促す。

「見せろ……見せろおお！」

凶器と狂気を目の前に出され、幸輔はすっかり竦み上がった。ここまで狂つてる相手なんて、今までに対峙する機会がない　あるわけもない。

「見せろよ！　モタモタすんな！」

カクカクと何度も頷いて、慌ててシオルダーバッグを外す。口の

ジッパーを開いて引っ繰り返して、立ち上がり、シャンプーボトルが、音を

途端。

「うわあああああおおおえええええええ！」

奇声を発した男が飛びかかる。

「わあああああああああ！
負けじと幸輔も悲鳴を上げる。

男がナイフを振り回し、幸輔がバッグを放り投げる。バッグから零れたバスタオルが宙で舞い、開いた。洗顔液のボトルを男が蹴っ飛ばす。逃げ惑った幸輔の足がシャンプーボトルを踏み付ける。蓋が飛び白濁液が噴出。突進する男の顔にボクサーパンツが張り付いた。ボトルに足を取られ、幸輔のバランスが崩れ。男が振り回すナイフ。奇声。悲鳴。後ろに倒れる幸輔の眼前でがむしやなナイフが閃く。奇声、悲鳴。奇声悲鳴奇声悲鳴奇声悲鳴

「ああああああああああああああああああ！！」

地面に後頭部をしたたか打ち付け悶える幸輔を残して、外に飛び出した男は走り去って行った。

プロローグ：02「アソーにお願い」

ガタタン！ ガタタン！ ガタタン！

電車が線路を滑走する音と同調した地響きが体に心地良い。骨を直接的に震動する感覚。皮膚、肉をまといながらも、やはり人体は硬質な物体なのだと体感する瞬間。

時間にして10秒足らず。列車の音と震動が彼方へ過ぎ去ってから、麻生浩介あそう こうすけは人の気配にまぶたを開いた。果たして、見知った女が覗き込んでいた。

「こんなところで寝転がってたら轢かれるよ？」

腰を折って覗き込むせいで長い髪が顔に垂れ下がり、微風に毛先がそよぐ。

「車なんか滅多に通らねえんだよ」

アスファルトのと真ん中で大の字になったまま、麻生は面倒臭そうに答えた。

「わっかんないよー？ 道歩いてただけで暴走車に轢かれる人だっているんだから」

「そりやお気の毒。運が悪いんだ」

ふわふわと雲の泳ぐ空を背に、女は小さくため息をついた。

「運なんて自分じゃわかんないでしょ」

「今日の蟹座の運勢は一位だって言ってた」

麻生の唇がアクビで開く。

「占い、好きだよね」

呆れる女に口の中を存分にさらして、はたと思い出した。

「あれ？ ヒロ、仕事は？」

「まだ時間あるのよ。それまでヒマだからアソーに遊んでもらおうと思って」

秋野尋絵あきの ひろえは、麻生の事を『アソー』と発音して呼ぶ。『アソウ』と呼ぶよりも呼びやすいのだと言う。

「遊んでもらおうったって、そんなヒマじゃねえよ」

「見るからにヒマじゃねえか」

尋絵は地声が低い。

「……ま、傍から見ればな」

「どっからどう見ろっつーんだ？」

おまけに口調が荒かったりもする。

「少しでいいからさ」

刺々しい物言いはしかしすぐに緩んで、まるで哀願するかのよう
に搾んだ。

「ほんと、少しでいいんだよ。少しでいいから……話を、聞いて」
突然となりへたり込んだ彼女に、麻生は狼狽した。

「おい……？」

上体を飛び起こし、うつむいた尋絵の顔を覗き込んで 一層
驚く。

彼女は泣いていた。

「え、泣いてんの？ 泣いてんの？ な、泣くなよ、まるで俺が泣
かしたみたいに見られっからさ」

しゃくり上げ始めたその肩を撫でたり揺らしたり、何とか宥めよ
うとしたのだが、泣き止んでくれそうにない。

パンツ、パンツ！

頭上に目をやると、ベランダに干した布団を叩くオバちゃん（5
02号室、夫婦暮らし）と目が合った。

ニヤリ 意味深に口元を歪めるオバちゃん

いい予感はしなかった。

「わかったっ。ヒロっ、ヒロっ！ 部屋行こ。俺の部屋で話そっ！
」

というわけで。

それから7分後、麻生と尋絵はソファで肩を並べる事となった。

「あのー……ごめん」

彼女が落ち着くまで所在無くテレビのリモコンをいじっていた麻生は、大して頭に入ってもいないテレビ番組を見つめたまま応える。
「大した事ねえよ」

気まずそうに髪をいじる尋絵を見ると、前に会った時よりも痩せた印象を覚えた。元来より細身である尋絵は同姓からよく羨ましがられていた。どんなに食べたところで体重の変動が少ない。平たく言えば、太らない体質の持ち主。よって、世の女性が持つダイエットの悩みとは疎遠

「ちゃんと食ってんの？」

「んー？」

「頬がこけてる」

言って麻生は自分の頬を、ムンクの叫びのように両手で挟んでみせた。

「それに情緒不安定。 ヒロに限ってそんな事ないだろうと思うけど、クスリに手え出したりしてねえよな」

努めて優しく言ったつもりでも、吐いたそれは厳しかった。

「何言ってるの」

即答。

「私がクスリをやるわけじゃない。アソー、私を見くびりすぎじゃない？　いくらなんでもクスリは手え出さねーよ。そこまで落ちぶれちゃいねーよ。それとも何？　信じらんない？　私が信じらんない？　私がクスリやってるって？　あははー。へそで茶を沸かしてやるーか」

なおかつ隙間なくまくし立てられた。

「……へそで……何？」

「へそで茶を沸かす。ちゃんちゃらおかしいって事。こんな事説明させんな日本人」

「まったく申し訳がございません」

かしこまって頭を下げる　と、尋絵は吹き出した。

「あはははー！」

弾けたように笑う。泣いたり起こったり笑ったり、感情のギアチエンジがせわしない女だ。

「やっぱアソーといると楽しいわー」

「ばんばん背中叩くな」

「私の男になんない？」

「結構です」

「女いたっけ？」

「いねーよ」

「じゃ、私になっただげる」

「いりません」

「えー？」

「どうしてキレ気味なんだよ」

「あははっ」

ソファに転がったクッション（中サイズ）を抱えた尋絵の表情が、おもむろに暗くなる。

「アソーに、お願いがあるんだけど」

唐突に思い詰めた顔をされれば、麻生に限らず誰だって戸惑うはずだ。

「私の友達が悩んでるんだ。力を借りたいの」
今までにない真剣な眼差しで射抜かれれば、誰だって。

それで、か。

秋野尋絵は今年で23を迎える。麻生とひよんな事で知り合ったのが去年の事。明朗快活な性格で、場を明るくする魅力を持っている。繊細という言葉の枠外に常に立つ彼女は、しかし友人が関係する時だけは例外だった。ひと度友人に悩みを打ち明けられれば本人と同等に 否、同等以上に共有してしまう質だった。友人を大切にし、大切にするあまり精神的に、無自覚のまま負担がかかる。体重など毛の先程も気にかける事のない尋絵がやせる理由 本人の問題ではなく、友人の問題。

「力を借りたいって言われてもさ、貸せるだけの力があるかどうか」

「アソーしか頼める人がいないんだよ」

切実に訴える尋絵の期待に応えたいのも山々だが。

麻生は弄んでいたリモコンをテレビに向け、画面を消した。
期待に応えたいのも山々だったが。

「……話、聞こう」

「力貸してくれるの!？」

「聞くだけだつての!」

ぱあっと明るくなった尋絵の表情で慌てて強調した。

プロローグ：03「桜田トーク」

桜田梨香 さくらだ りか

尋絵の仕事で知り合った友人で、21歳。明るく元気なコだという。

「……ずいぶんとまた、つかみにくい人間像だな」

尋絵と梨香が知り合ったのは半年前。仕事場に新しく入って来た梨香に尋絵が声をかけ、2人はすぐさま意気投合し、その日のうちに居酒屋を4件ハシゴした。

「……すげー打ち解け具合い……ってか酒豪……」

3件目の居酒屋で通算7本目の日本酒ヒンを空にしたところで、腹部は満腹感に満ち、血中アルコール度数も高くなって、酔いにお互いが気持ち良くなっていた。アルコールが饒舌にしていたせいもあるだろうが、梨香はポツリポツリと、恋人の話を口にし始めた。

「7本も!？」

梨香が恋人と出会ったのは高校3年生の頃だった。わんぱくな盛りだった彼女は日ごと夜遊びに徹底し、まだ付き合っていなかった恋人は、その時の遊び仲間の1人だった。男3人、女3人。同じ顔ぶれで夜の街を遊び歩く空気を存分に堪能していた。当時の事を、梨香はこう述懐する　5日間オールなんて、あの頃は若かったわ。

「寝ろよ成長期」

時を同じくして、梨香の住む街では暴行事件が多発していた。不定期で報道される凄惨なニュース。被害者の共通項は、全員高校3年生。学校はバラバラ。路地裏や人気のない公衆便所に連れ込み、事に及ぶという。

犯人に至る有力な証言もつかめず、警察は苛立ちだけを募らせていた。

被害者である女子高生たちから得られた情報は、犯人は背後から忍び寄ると薬品を染み込ませた布で口元を押さえ、気を失った彼女らを蹂躪するという手口のみ。最中に意識を取り戻した数人は、口

の中に布のようなものを突っ込まれていたせいで助けも呼べず、目隠しをされていたせいで相手の顔や姿を見る事もかなわなかった。

「ひでーもんだ」

そして事件は起こった。

いつも通り夜遊びに興じていた梨香が1人、帰路に着いていたところを、その背後に忍び寄る影が……

「んで、レイプされそうになったところを彼氏が助けたってんだろ？」

「……どーおして最後まで話させてくんないかな」

心底落胆し、侮蔑を込めて麻生を目で責める。

「長えんだよ」

「これから面白いつてのに」

「本題を話せ」

「えー？ 結論だけー？」

正直ムカついた。

「ところで、アソー。梨香の彼氏が今何をしてるか知ってる？」

「知るか」

「ヤクザ」

至極簡単に、尋絵は言い放った。

空咳ひとつ、麻生は立ち上がる。

「今の話、俺は聞かなかったって事で」

「ひどっ！？」

尻を掻きながらキッチンに向かった麻生に何をするかと思いきや

ろくに狙いも定めずに尋絵は跳んだ。

ソファの背もたれを軽々と越えた彼女の手が、もかくように麻生のスウェットパンツを引っつかむ。重力に従い落下する体とともに、ずばっと足元に落ちるパンツ。足をもつれさせた麻生は顔面から突っ伏した。

「っつ。」

「ひどいじゃない、アソー！？」

「どっちがだ！」

がばつと振り返る麻生の鼻は赤く、目には涙。

「もつと穏便に引き止められねえのかおまえは!？」

「彼女を助けてあげてよ！」

「これが頼む態度か！」

「それはそれ！ これはこれ！」

「それもこれもあるか！」

ぴん、ぽん。

床に這いつくばって言い競う2人をドアチャイムが失笑する。

「放せ」

「嫌」

確固たる決意の瞳で尋絵。

「あつ」

スウェットパンツからするりと抜けてみせた麻生は、何やら叱咤する彼女を無視してドアに向かった。

がちやつ。

麻生の目の高さで、やわらかい栗毛が頭頂で揺れる。顎を少しだけ引いて、視線を下に 松原幸輔がいた。

「おはよう、こーちゃん！ 今日朝から大変だったんだよ。コインランドリーでいつも通り洗濯してたんだけど、そしたら……」

……」

よく回る彼の唇は、突然に止まった。幸輔の視線が麻生の下半身で止まり、麻生越しに何かを見付けたらしく絶句。幸輔が目を見開くほどのものがあつたかと振り向いた先で

上体を起こしシャツの中でブラの位置を直す、恥じらい顔の尋絵。
「……なに、その意味不明な行動」

麻生が冷ややかに呟いたのと、幸輔が我に返ったのはほぼ同時だった。

「ごめん！ 邪魔したね！」

「まあ待てよブラザー」

元気澆刺ときびすを返し全速力で走り去ろうとしたその首根っこをつかむ。

「だって、まだ途中でしょ？」

しれっと言うその頭を、麻生は容赦なく叩いた。

プロローグ：04「6月23日、火曜日の夜」

「カギだな」

声に出して言わずとも、一見すれば即座にわかるような事を麻生は言った。目の高さまで摘み上げたそれをテーブルに放る。からからと、金属製のそいつは転がった。プラスチックの柄から伸びる、特有のギザギザを幸輔に向けて止まる。

「以上」

「……始めっから、見ただけでどうこうなるとは考えてなかったけど、こうもあっさり言われるとやる気も失くすね」

げんなりとぼやく幸輔の脇から、尋絵が手を伸ばす。

「この『015』って何だろ？」

プラスチックの柄部分にはめ込まれたプレートを差すと。

「コインロッカーの番号だろ」

「またもや麻生の淡々とした物言い。」

「こーちゃん……」

テレビを付け、ブラウン管を眺め始めた彼は幸輔の呼びかけに目だけを向けた。

「これが何のカギなのか気にならねーの？」

「コインロッカーのカギだろ？」

「どこのかって気にならねーの？」

「どっかのだろ」

「何かあるのか気にならねーの？」

「何かだろ」

「うわあ、ラチあかね~~~~」

幸輔、テーブルに伏す。

「いきなりやって来たと思えばそれ見せて、これなんだと思うっ？
って聞かれてもわかるわけがねーだろ」

「アソーの意見に一票」

ぴんつと真っ直ぐ尋絵の手が上がった。

「人間って、真っ直ぐ手を上げると自然に背筋も伸びるよね」

「そんなの聞いてねーし」

麻生からきつぱりと言われたが、幸輔にとっては慣れた事だった。というよりも、そんな事を気にするような性格ではなかった。

「いつも通りバイトの後、ランドリーに行ったんだよ」

退屈そうに、麻生がテレビに目を移し尋絵がテーブルに頬杖をついた事などまったく意に介さず、幸輔は身振り手振りを加えて経緯を話した。1人で勝手に切羽詰ったヤクザがまるで窮鼠に見えた事、敵意も戦意も皆無な幸輔にナイフで切りかかった事、猫を噛み損ねた窮鼠は氣勢を発したまま脱兎と化した事。後頭部を打った幸輔が意識を失った事。

「うわっ、こりゃひどい」

幸輔の頭に触れ大きなコブを確認した尋絵は、痛そ〜と唇を歪めた。

意識を取り戻した後、乾燥機に詰めた洗濯物に紛れて、カギはあった。

「ヤクザ、ね」

麻生の呟きは2人には聞こえていなかった。尋絵がコブを叩き、幸輔が悲鳴を上げている。

尋絵の友人、梨香の恋人はヤクザ。

幸輔の見付けたカギにも、ヤクザ。

嫌な符合だった。よくもまあ、2人そろって関わりたくない話を持ち込んで来たものだ。

「あのヤクザ、きつと命狙われてたんだよ。このカギを持って逃げて、いよいよ追い詰められたんだ。最後の悪足掻きでランドリーに飛び込んで、乾燥機に放り込んだっ」

ずいっと身を乗り出して熱弁した幸輔の顔を、麻生は平手ではたいた。

「いてっ」

「想像力たくましさすぎ」

「もしかして」

テーブルのカギを注視したまま、尋絵がポツリ呟いた。

「その人、梨香のカレシ……」

「まさか」

語尾まで聞く事なく一笑に付す麻生。頭ごなしに否定されるなど当然気分の良いものであるはずもなく。

「どうして言い切れるのよ」

「どうしてそう思うんだ？」

尋絵が睨もうとも、麻生には効かなかった。

「梨香のカレシ、突然連絡できなくなっちゃったのよ。身分が身分だけに心配にもなるでしょ。もしコースケの会ったヤクザがそうなら、連絡できない理由も見えて来ない？」

「見えて来ない。見えて来たくもない」

「梨香を巻き込みたくない状況にいるのよ。その理由が、このカギ

……」

「なわけねーだろ」

尋絵の空想を真っ向から拒絶する。

「2人そろって都合良く想像膨らませやがって」

あまつさえ吐き棄てる。

「秘密文書のカギかもしれないじゃん！」

「コインロッカーに入れるかよ」

幸輔の額に2発目の平手打ち。

「大変！」

ばんっ！ 突然テーブルを叩いた尋絵に2人の視線が集中する。

彼女は青褪めた表情で一層声を荒げた。

「梨香が狙われちゃう！」

「……………考えすぎだ」

ほとほと呆れ果てるくらいしか、麻生にはできなかった。

そしてその夜

6月23日、火曜日の夜。
外は蒸し暑く、クーラーをかけたまま寝た夜。

桜田梨香は襲われた。

第1話：「友人とノロケと奇遇」

大東病院の3階、廊下を歩いて最も奥、南向きの日当たり良好な個室に桜田梨香はいた。

尋絵からは曖昧極まったイメージしか聞いていなかった麻生だったが、まさか翌日に本人と対面するなど思いも寄らない。赤銅に染めた髪は短く、尋絵と同じ長身スリム型。瞳が大きく頬もふっくらしているせいで、21歳の割りに童顔に見えた。無類のマンガ好きだという彼女の性格を、簡易棚に積まれた十冊ほどの単行本が如実に物語っていた。

「昨日買ったんだけど、刺されちゃったじゃない？読む時間なかったんだよねー」

6月24日、水曜日。麻生と尋絵が病室を訪れた時、マンガを読みふけていた梨香は声をかけられるまで2人に気付かないほどだった。積まれたマンガは一度に購入したというのだから、彼女のマンガ好きは筋金入り。

「あ、アソーくん？尋絵から話は聞いてるよ」

頬にえくぼを作って笑う女だった。

「初めまして」

「傷、大丈夫なの？」

麻生の挨拶などどうでもいいとばかりに、尋絵は彼女の容態を憂えた。

「そんなに深く刺されはしなかったみたい。すぐに退院できるって

ほら、こんな感じ」

と、浴衣の前を開いたものだから2人は仰天した。

「見んな！」

ごっ。尋絵の拳が麻生の頬にクリティカル。

「オープンすぎるのよ、梨香は」

「別に見せるくらい、いいじゃない」

まるで親が子をたしなめるような会話だ。床に崩れた麻生が不満顔の頬をさすりさすり立ち上がった時には、すでに浴衣は閉じていた。

「……見た？」

殺意すら込められた尋絵の睨み。

「見る前に殴つといてそりやねーだろ」
見た。

白い肌の腹部には包帯が巻かれていた。深く刺されはしなかったという話だが、痛々しい事には変わらない。数瞬前の視界を思い返しての、麻生、胸中の一言。

ごつつあんです。

下着を着けていない胸は尋絵より大きかった。

「前から刺されたって事は、犯人は見たの？」

ベッド脇のイスに尋絵は腰を下ろした。イスは1脚しか見当たらず、麻生は壁に寄りかかる事にする。

「ん」

気まずそうに頭を掻く仕草から察するに、見ていないらしい。

「どうして？ 前から刺されたんじゃないの？」

身を乗り出し食らい付く尋絵とは対照的に、麻生は冷静に病室内を眺めていた。

「刺されたのは前からだよ。けど、それは後ろから肩を叩かれて」

病棟の角に位置しているため、部屋の窓は2つある。南側と東側と、シンダー錠の付いたスライド式。

「どうして逃げないのよ」

「だって、まさか刺されるなんて思わないじゃない」

ベッドに隣接する簡易棚。ベッドと向き合う壁には衣類があり、その上にはスイッチの切られたテレビが置かれている。

「現に刺されたじゃない」

「予知とかできないんですけど」

部屋の広さは、もう1人入ってもまだ余裕があるくらい。広くは

ないが狭くもない。冷暖房完備。

「で？ 振り向いた時に顔を見てないってのはどういう事よ」

「逆光だったんだもの」

壁から背を離れた麻生は、ベッドの足元を回って南の窓に近付いた。3階から望む外界は快晴の下、建造物が軒を連ねていた。

「逆光？」

「電柱の蛍光灯あるでしょ？ あれの逆光で見えなかったの」

窓には落下防止のバーが固定されていた。窓自体は大きいのが、このバーをよじ登らない限りは落ちる事などまずないだろう。

「梨香さあ、前もそういう事あったんでしょ？ 少しは警戒心つての持ちなよ」

窓から広場が見下ろせた。入院患者のための憩いの場。女看護師が老人の車椅子を押し、ベンチでは右足にギブスをはめた男がタバコをふかす。

「だよー」

麻生が振り向いた時、梨香は苦笑していた。けどさ、と唇が小さく動く。

「私の身に何か起こったとしても、また助けに来てくれるって、どこかで期待しちゃってるんだよ」

思わず見惚れてしまふ、それはそれは綺麗な笑顔だった。

「……………」

尋絵のため息が控えめに揺れる。言にくい事を発言する直前の、彼女特有の癖だ。

「……………」でも、連絡付かないんじゃないでしょうもないじゃない」

現実的でどうしようもなく当然で、何の薬にもならない一言。

「うん、わかってる」

致命的なところを衝かれてもなお健気に笑う梨香を見て、麻生は何とも表現しようのない思いに胸を締め付けられた。

「こっちから連絡は？」

衝動的に尋ねていた。

「ケータイに連絡しても全然つながらない」

「根本的な質問、していいか？」

麻生が交互に見比べた2つの顔はきょとんとしたが、そんなの知った事ではない。

「梨香さんのカレシは、どうして連絡付かなくなったんだ？
っ
てか、ヒロの言ってた力借りたって何」

尋絵と梨香が顔を見合わせる。

「え。尋絵……何の話？」

「梨香の事、こいつに話したのよ」

「どこまで話したの？」

「梨香とカレシの馴れ初め」

「私の事ってか、私とカレシの話じゃない」

「そんな感じ」

「おい尋絵」

「だって最後まで聞いてくれなかったのよ」
尋絵の不機嫌な視線が麻生に刺さる。

「だから、教えろつつってんだろ」

負けじと言い返した。

「話の途中で逃避したくせに」

ぼそつと唾棄する尋絵を、この際無視する事にした。

「梨香さん。話してくんない？」

「私はシカトかよ」

「探してくれるの？」

不満たらたら彼女の横で、梨香の顔がぱつと明るくなる。

「怪我した人を目の前にして何もしねえなんて、そこまで非情な人間じゃねえから」

「ありがとう！」

「カッコつけてんじゃねーよ」

「まあまあ、尋絵。やり場のない憤懣は私のいない所でぶつけるって事でいいじゃない」

ずいぶんとその場限りなあやし方だった。どうせなら尋絵の不機嫌を緩和して欲しかった。

「私とカレシが出会ったのは高3の時で」

「そっから話さなくていいって」

桜田梨香の恋人である井延耕佑いのへ けんすけが唐突にその消息を絶ったのは、4日前の事である。仕事を終えて家に着いた時、同棲していた耕佑の姿がなかった。徹夜で麻雀など日常茶飯事であった彼だから、梨香はさして気にも留めなかった。風呂に入って汗を流し体を洗い、部屋に戻ってみれば携帯電話に不在着信が残っている。誰かと思えば耕佑からだ。徹夜で飲んでいる時、ご機嫌になるところしでよく電話をかけてくれるのだった。

「それで『愛してる』って囁いてくれるの」

「ノロケかい」

携帯電話には留守番メッセージが入っていた。耕佑からの着信は2分おきに3件。留守番メッセージも3件。そんなにも愛を伝えたのかと梨香は恍惚とした。

「あ。鳥肌が」

だが、留守番メッセージの内容は、まったく異なるものだった。

『梨香。しばらく連絡できそうにないんだ。心配はいらないよ、すぐに片付くから』 1件目。

『言い忘れた。ホテル葉崎に部屋を取ってある。何も聞かないで、梨香はそこにいてくれないか。理由は後で話すから』 2件目。

『梨香？ まだ何も起きてないよな？ 早くホテルに行ってくれ。そこは危険だから 早く！』 3件目。

切迫した声音で、息切れしながら訴えていた。

「一言、愛してるって言ってくれてもいいのに」

「彼の身を案じよう。ねえ、すぐに案じよう」

哀しげにため息つく梨香に早口で指摘。

「アソー。どう思う？」

尋絵の顔はこちらが心配してしまうほど憂色を帯びていた。なる

ほど。こんな事態に直面しているのなら、梨香の事を我が身の事と受け取るのも合点がいく。彼女がすがって来た時にけんもほろろに接した自分を、少しだけ後悔した。

「梨香さん。カレシに言われた通りに、今はほてるにいいの？」

「うん」

「刺されたのも、そこで？」

そうならば、梨香の居場所はすでに突き止められていると考えて良さそうだ。何故彼女が狙われるのかという点は皆目見当も付かないが、ホテルは危険だと思われる　のだが。

「ううん。自宅のマンションの前」

あっさり否定。

『へ』

尋絵と声が被さった。

「留守電聞いてから、すぐにホテルに行ったのね。だけど急な話でしょう？　荷物もまともにまとめてなかったもんだから、足りないものを取りに行ったら、ぶすつと」

ナイフで腹を刺されるジェスチャー。笑えねーよ、なんて無防備な女なんだてめーはと、率直な感想は飲み込むに留まった。

「という事は、すでに家はマークされてるって事ね」

腕を組んで、尋絵がうなる。

「忘れ物なら、俺とヒロが取りに行こう。梨香さんが戻るのは危険だし。てか、この状況で戻るのは不可能だとは思っけど」

「アソー」

「あいよ」

「病院も危険じゃない？　また狙われたりしたら……」

秋野尋絵という女は、まことをもって有人を大切に作る人間だと実感する。昨今の病院がセキュリティを強化しているというのにこの心配ようだ。

だが、備えあれば憂いはない。

備えに絶好な人間がいた。

「幸輔に頼んどきゃいいだろ」

「コースケ？」

梨香が目を丸くする。

「アソーの友だち」

説明した尋絵が、あそつか、と手を打った。

「梨香のカレシもコースケだもんね。驚く事に、アソーもコースケなんだよ」

「っへ~~~~」

麻生をまじまじと見つめて感心する梨香。言われてみれば、3人もコースケが集まるとは大した偶然だ。

「すっげー奇遇」

梨香に同感。その口が、あ、と開いた。

「そーいや、梨香さん。恋人のコースケさんってどの組？」
参考までに聞いただけ。

「えっと、たしか」

ヤクザに首を突っ込むと面倒になるのは目に見えていたし、ましてやそこに飛び込むなど微塵も考えていなかった。組の名前を聞いたところで麻生には縁遠いものだと思えていた。

「みくもきようかいそうそう。三雲興会」

梨香が気軽に口にした名は、しかしずっと身近なものだった。

第2話：「佐岩井公園コミュニティ」

これから仕事だという尋絵を葉崎駅まで送り、幸輔がバイトから帰って来るまでの時間を、麻生は駅前のファーストフードで潰した。昨日は遅番で、今朝は早番で……よく体が持つものだと思底感心する。

「いらしゃいませ!」

澁刺とした店員の声を耳に、つまんだポテトを口に、カウンター席で駅前のバスロータリーをぼんやり眺めていると、幸輔が窓の外を横切った。わざわざ足を止め、1メートル未満の距離で全身を使い手を振ってくれる。

「こーちゃん!」

店の自動ドアをすり抜けるや、犬のように駆け寄る。

「どうして無視すんだよ!」

「窓挟んで臆面もなく手え振んなよ!」

18歳とは思えない暴拳と思えた。

「バイト上がりで疲れてるところ、悪いな」

「そんな事ねえよ。3時間寝られりゃいいし」

麻生のとなりに座るとすぐにポテトに手を伸ばし、幸輔は平然と言いのけたのだが、紛れもない事実だった。松原幸輔は、たとえば、3日3時間でも十分だというから驚きだった。4日を越すと6時間に繰り上がる反動は愛嬌。

「尋絵さんの友だち、どうだった?」

「食いすぎだろ」

半分以上残っていたポテトはあつという間に幸輔の胃袋へ消えた。

「何が?」

「自覚ゼロなのが厄介。」

「何でもねえよ。腹減ってんだろ? 何か食えよ」

「あ、いい？ バイトでメシ食べはしたんだけど、小腹がすいちゃつてさ。ちよつと待ってて」

と言つて幸輔が買ったのがポテトだった。

「……おまえ、そんなにポテト好きなの？」

「大好きだよ。イモくさいところが」

しかもＬサイズ。

それ以上の言及は避けた方が得策だと、麻生は判断した。

「梨香さんは軽傷で済んだよ」

「誰？」

「おい」

「あ、尋絵さんの友だちか」

「んで、どんな話になつてるかっつーと」

2人の馴れ初めなど当然省いて、現状を伝える。もくもくとポテトを熱心に口に運んではいたが、相槌も打たずに幸輔は聞き入つて

最後の3本をくわえたところで、話は終わった。

その間、実に3分。

「食うの早っ」

「なるほど、そういう話になつてんのね」

「無視かーい」

「小腹空いてるって言つたろ？」

「小腹の域越えてんだろ、ぜってー」

呆れるばかりの麻生がポテトの空き箱を見ると、幸輔の手の平が叩き潰した。

「三雲興会つてーと、タケさんか」

指先を舐め、窓の外を見つめる彼の瞳に懷古が映る。

「そーいや、最近会いに行つてないね」

「タケさんの所には俺が行く。幸輔には他に頼みたい事があんだよ」
幸輔が振り向いた。

「頼みたい事？」

「梨香さんの見張り」

「梨香さんが怪しいのか」

「ちっげーよ」

神妙に呟く幸輔の後頭部をはたいた。

「また襲われるような事がねえとも言い切れねえだろ？ そっじゃなくても、襲ったヤツが来るかもしれない」

「ん~~~~」

「……何だよ、その不満面」

「いや、不満じゃなくて。腑に落ちねーんだよ」

「梨香さんを刺しただけってところか？」

「そっ、そこ」

幸輔の人差し指が、ビシッと麻生の鼻先に突き付けられた。

「うぜー」

指を叩き落としたが、彼は気にせず話を進める。

「カレシさんの居場所を知りたいなら、刺す前に脅すでしょ。しかも、襲われたのはマンションの前。ヘタすりゃ人目につく。部屋まで尾行するか、待ち伏せして脅して、部屋の中で話をした方が懸命だ。悲鳴上げられりゃ終わりだけど、それにしあって、いきなり刺すのは馬鹿だね。ラチるでもないわけだし。単なる通り魔じゃん、それじゃ。どうして刺すだけに止まったのか、そこが納得できないナリ」

「ナリって何だ」

「見張りはいつまですりゃいいの？」

「見事なスルー具合だった。」

「少なくとも、梨香さんを襲ったヤツが尻尾出すまで。そう簡単に出すとは思えねーけど、俺も三雲興会から調べてみる」

「ホテルは？」

「ホテル？」

オウム返しに尋ねてから、幸輔がホテル葉崎を指しているのだと思に至る。

「ああ、そっちは今のところ平気だろ。襲われたのはマンションの

方でだし、ホテルはまだ安全なんじゃねーの？ ホテル行つたつて
梨香さんはいねえんだから」

そこまで言つた麻生の唇が不意に止まる。もしも 仮説が頭を
よぎる。

「きつと俺とこーちゃん、同じ事考えてるんじゃない？」

幸輔が笑んだ。

「その、梨香さんって人がカレシから何かを受け取ってるんじゃない
かなーって、俺は考えたんだけど」

ぴったり同じ事を考えていた。

「……………あー、ダメだ。そんな話聞いてねえな。言つてねえだけ
かしんねえけど」

梨香と話した時間は短く、襲われた時の事しか聞いていない。

「じゃ、それは幸輔にお願いするわ。もしかしたら、何かを受け取
ってるかしんねえし」

「確認しとく」

「よろしく」

一度帰宅してから病院に行くと言う幸輔と別れた麻生の足は、そ
のままバスロータリーに向かった。歩いても行ける場所ではあつた
が、バスに乗った方が早く着く。

「……………ま、妥当な判断だろ」

乗客の少ない車内のシートで揺られながら、独り言ひとつ。

葉崎駅から東へ15分ほど 麻生が降りたのは佐岩井公園さいわいこうえんだつ

た。海辺に程近い、緑生い茂る広い公園である。昼間はちっこいや
んちゃ坊主が母親に見守られ駆け回り、夜は平均身長172センチ
の茶髪やんちゃ坊主が女を引き連れてたむろする公園でもある。さ
らに加えるならば、深夜は18歳未満立ち入り禁止区域でもある。
あちこちの草むらから聞こえる猫の鳴き声をヒントに、推して知る
べし。将来ある君子ならば危うきに近寄らずがよろし。

そう考えると、この公園も未恐ろしい空間だと感じる。

感じてみたただけだ。

公園の入り口のバス停に降り立つと、湿気をふんだんに含んだ熱気に麻生の唇がへの字に曲がった。バス車内は冷房が頑張ってくれていたおかげで快適だったものの、その反面、半端でない温度差に体が参りそうだ。奮い立たせた気もすぐに萎え、ダルい足取りで敷地内に入る。噴水広場を抜け、アスレチック広場を抜け、定年を迎えたと思しき老夫婦がウォーキングしている姿を横目に　麻生は公園の最奥部へと歩を進めた。

そよ風が少し強く吹いた。

足元の芝生が滑らかに揺れ、頭上に延びる枝葉がざわめく。すぐ近くでセミが鳴き始めた。

ミーン、ミーン、ミーン、ミーン……

歩道はとうに足元から消えていた。

見る限り緑色と茶色と白の視界。

あるのは葉擦れと木肌と木漏れ日の世界。

その中心に、コミュニティはあった。

「　　。コースケじゃねえか」

ブルーシートとダンボールと骨だけの力サで造られた4つのオブジェが、それぞれ4本の頑丈な幹に寄りかかる様子は、依然訪れた時と何ら変化がなかった。自然と、麻生の唇の端が笑む。

「ずいぶんご無沙汰じゃねえか」

最も手前に位置するオブジェから、ワンカップのビン片手に出て来た男は、麻生を見るなり太く大きな声で迎えてくれた。身長190と少しの巨体に、ボサついた白髪。頬骨の浮いた細面には無精ヒゲはなく、目尻には優しい笑いジワ。元は灰色だったと予想できるが、点々とシミが付いているせいで薄汚れている印象しか与えない、つなぎの作業服。

「久しぶり、リョージさん」

コミュニティ一番の背丈と綺麗好きの性格を持つ63歳、リョージ。麻生は笑顔で挨拶して。

「他のみんなは？」

残る3つのオブジェは、一見したところ静かなものだった。誰かが出て来る気配もなければ、誰かがいる気配もない。何より、笑顔だったはずのリョージの顔が、不意に曇った事が気になった。

「みんな、今はタケさんの所に行ってるよ」

タケさんの所　そう聞いて、麻生の視線はコミュニケーションの奥にあるオブジェを見やった。すっかり錆び切った上にパンクしている自転車が淋しく停められたオブジェ　タケの家である。が、やはり誰かがいるような気配は皆無。

彼の飼っているはずの雑種犬（名前は忘れた）すら、いない。

「行ったって追い返されるだけで、無駄なのになあ」

「みんな、どこ行ったって？」

「大東病院に行ってる」

「はあ？」

驚きのあまり素っ頓狂な声を出す。

「どうして病院なんか……………」

嫌な、胸騒ぎがした。胸がむずがゆく締め付けられる。胃が収縮する。重力が徐々に消え失せる。

タケさんの所へ

「おとつい、急にぶっ倒れたんだよ」

あれだけ暑かった空気が冷たい。ねっとり　肌になっとり　まとわり付くのは湿気か汗か。こめかみで血液が脈打つ。耳鳴り。ドクンドクン早鐘打ってるのは何だ。右手が痙攣する。耳鳴り。瞬きも忘れた。眼球の奥に鈍痛。三半規管が震動する。喉が渴いた。水が欲しい何か飲むものを。耳鳴り。耳鳴り。タケさんがどうした。タケさんがどこ行った。タケさん　タケさんが　どうしたって？

「……………うそだろ？」

セミがつるさい。

第3話：「点線交錯」

まさか、こんなにも早く舞い戻る事になるなんて予想だにできなかった。

大東病院。

葉崎市が誇る総合病院であり、わざわざ遠方から通う患者が朝から待合室のイスを埋めるほどの人気ぶりである。それが果たして喜んで良いものかどうかは、判断に迷う点ではあるが。

「コースケー！」

ロータリーを抱えているせいで広々とした正門に入ったところで、昇降口の自動ドアからすすぐと出る2人の老人を見付けた。

「タケさんは!？」

氣息奄々と駆け寄った麻生に、2人は沈痛な面持ちを左右に振るばかりだった。

「ダメだ。まったく入れてくんね」

肉付きの良い体と、これまた肉付きの良い顔とスキンヘッドの男は、東北生まれのコーゾー。東京に来て十数年というが、まだ東北訛りのイントネーション。

「このナリじゃ、入れてくんねーんだよ」

コーゾーとは対照的に小柄な瘦躯をしょんぼり縮ませているのがオサム。頭のとっぺんはすっかりはげ、取り巻くように生える白髪も薄い。

2人ともリヨージと同じ作業服を着ているが、どちらもそろって汚れていた。おまけに汗臭いともなれば、病院側としても受け入れるわけにはいかない、というわけか。

「わかった。入れてくれって行つて来る」

『無理だつて!』

踏み出した麻生を2人がかりで抑え込んだ。

「何でだよ！　せつかく来たつてのに入れねーなんて理不尽だろ！」
頭に血が昇り沸騰している麻生は老人を振りほどこうと暴れたの
だが、さすがに2人を突き飛ばせなかった。

「落ち着け、コースケ！」

「おめえが行つてもなんもなんね！」

入り口でこれだけ大いに騒げば人目に付かないわけがない。自動
ガラスドアの中　ロビーに居合わせた患者、受付のお姉さんその
他大勢の好奇の視線が、麻生の神経を逆撫でた。

「見てんじゃねーよ！　何見てんだ！　離せ！　入れろつつてん
だろお！」

喚き暴れる彼を、2人の老人は必死に引つ張った。開いては閉じ、
開いては閉じを繰り返すドア越しに、ぎこちない力二歩きで横へ異
動していく3人を、病院関係者・患者たちは啞然と見送った。

「入れやがれコラアアアアアア！」

悲痛な叫びだけが尾を引いて

きつかり5分後

「　　ごめんなさい」

麻生は土下座した。

「　　いいっていいって！」

「　　顔上げていいからって！」

そんな彼をオサムトコーゾーが慌ててなだめる。その様を脇から
眺めていると、滑稽で楽しかった。

「まったくさー、あれだけ攻撃的に取り乱すこーちゃんも珍しいよ
ね。あんな目立つところで暴れるし」

プシッ　炭酸飲料の缶を開けながら、芝生にあぐらを掻いた幸
輔が不機嫌に言い捨てた。滅多に見られない麻生の土下座で、内心

は大爆笑であったが。

「返す言葉もないです」

「もう顔上げなつて！」

「こつちも落ち着いて話もできねーから！」

老人2人の必死の説得は、かれこれ10分は続いていた。ひと度頭に血が上るとあらゆる規制も自制も利なくなってしまうのが、自他共に認める麻生の欠点。今回の騒動も、タイミングよく幸輔がやって来て、彼の頬を3発ほどはたかなかつたら、我に返る事はなかっただろう。

肩で息をし呆然と立ち尽くす麻生を、とりあえず落ち着かせようと連れて来た場所がここ。病棟を見上げる広場だった。今4人がいる芝生の丘をぐるりと歩道が囲い、敷地外との間には木々が立ち並ぶ。看護師や入院患者、その見舞い客の姿がちらほらと見受けられる。

「でさ。どうして、こーちゃんとコーゾーさんとオサムさんがここにいいのか、とりあえず教えてくんね？」

麻生がやっと顔を上げたのを待つて、幸輔が尋ねた。

「……あー」

我を失った事が相当堪えたらしく、へこんだまま正座を崩そうともしない麻生。指先で芝生をいじる姿に情けなさすら覚える。

「ダメだこりゃあ」

即座に麻生を切り捨て、2人の老人に視線を移した。答えてくれたのはコーゾーだった。

「コースケが一心不乱になんのも仕方ねー事なんだよ。今なあ、タケさんがこの病院にいるんだ」

「はい？」

「おとつい、急にぶつ倒れたんだ。いつものように朝起きて、メシ調達しに行こうとした矢先にな。俺らがぶつ倒れたんならもう後はねえんだろうけど、タケさんは違う。救急車呼べば病院に運んでもらえるし、すぐに駆け付けてくれる人もいる」

コーゾーは、見上げる者すべてを等しく圧迫するように建つ病棟を見上げ呟いた。

「正直、うらやましいんだ」

「俺らは決して歓迎される側じゃねえものな。金もなきや家族もない。いっどこで死んだって、誰も気付かねえ」

笑うオサムに、幸輔はどうしても笑えなかった。

「俺らとタケさんは違う。違うけど、死んじゃほしくねえ」
「んだな」

どうして2人は笑い合えるのだろう。

どうして2人は朗らかでいられるのだろう。

そして何より。

少なくとも俺は悲しいです　そんな一言が、幸輔は言えなかった。

唇を結んで黙って聞く彼の手が、強く握り締められた。

「よしっ」

ぱんっ！　麻生はやおら膝を叩いて立ち上がった。やっと立ち直ったらしい。

「へこむのは後だ」

そうでもなかった。

「オサムさん。コーゾーさん。タケさんとこ行こう」

「だゝあから。無理だったのがわかんねーのか」

コーゾーがぼやく。となりのオサムと同様、芝生から腰を上げる気など毛頭なさそうだ。

「どうして。こっちは見舞い客だろ？」

「ヤツらが来てんだよ」

諦観が色濃く染めたオサムの言葉は端的で、十分だった。麻生の表情に苦渋がにじむ。ヤツらがどいつらなのかくらい、幸輔でもわかる。その事が何を意味するのかを汲み取る事もできた。

「……何人くらい？」

麻生のその質問が茶を濁すに至らない事すら、わかった。

「6、7人だ。俺とオサムさんが受付のバアさんともめてる時に余裕ぶっこいてエレベーター乗ってた。あのババア、人を外見で判断しやがって」

しらふで他人の悪態を吐くコーゾーを見るのは珍しいのだが、対象が逸脱している。

「6、7人が……」

肩を落とした麻生は見ていて気の毒になってしまいうくらい気落ちしていた。

「門前払いが関の山だ」

零すオサムと一緒に、コーゾーの口からも大きなため息が漏れた。「……あきらめるしかねーな。タケさんが無事である事を祈ろう」

完全に脱力した彼を見上げ 幸輔の脳内で、にわかにイメージが膨張する。徐々に開く双眸。気付く失念。

「コーちゃん！」

今度は幸輔が立ち上がった。

「い、いきなり大声出すなよ」

虚を衝かれ驚き惑う麻生に言い放つ。

「梨香さん！」

それだけで伝わった。

「やばい！」

身を翻すや駆け出した彼の後に幸輔も続く。オサムが何かを叫んだ。コーゾーも何かを言ったような気もする。だが2人の鼓膜には届かず、ひたすら駆けた。広場に面した病棟の、自動ドアが開き切る前に隙間を抜けてエレベーターホールへ ちょうど到着していたボックスに乗り込み階数ボタンを叩く。『閉』ボタンを連打する麻生の気も知らないで、極めて業務的にドアを閉じ、マイペースに上昇するボックスが腹立たしい。3階に着くまで、麻生は苛立つて壁を叩いた。

チンッ

ドアが開く頃には2人の焦燥は沸点に達し、衝動に背を押される

ままに病室目指し全力疾走 目的のドアノブに手が届く 麻生

が思い切り引つ張った !

ばんっ！

「あはははははっ！」

テレビを見ながら、梨香は大爆笑していた。

『え~~~~~』

緊張の糸がぷつぷつ切れ、2人そろってその場に崩れ落ちた。

「ははははは！ あれ。どーしたの？」

「どーしたのじゃねーよ……」

2人に気付いた彼女は、笑いすぎて目にあふれた涙をすくいながら、呑気なものだった。

「……幸輔。あとよろしく」

快心の肩透かし。壁に手を付いて立ち上がる麻生の声音は疲弊でいっぱい。

「あいよー」

「便所に行って来る……緊張と一緒に膀胱も緩んだ」

「漏らすなよー」

「……………手遅れかも」

「うそっ!？」

頼りない足取りで廊下を歩く麻生の後ろ姿は、気持ち内股だった。

「……………え。ほんとに？」

「ああ！」

突然大声を張り上げた梨香に幸輔の肩がビクつく。

「あなたがもう1人のコースケくんね！」

「もう1人って……？」

そんな疑問も、しかしすぐに消える。

「初めまして、梨香です。よろしくね」

満面の彼女の笑顔は、幸輔の中にある何かを確実に射抜いた。

「よ、よろしくお願いします」

弛緩しきつた頬で裏返る声。

松原幸輔、18才。コンビニのアルバイトで生計を立てている。
特技、ひと目惚れ。

第4話：「白スーツTessy」

時に。

麻生浩介は決して潔い性格ではない。虎視眈々と獲物を狙い、いつでも襲いかかれるよう常に爪を磨いているような性格の持ち主。だが同時に。

向こう見ずで鉄砲玉な、衝動に駆られるままに飛び込んでしまう、実に危険な一面もあった。

己自身を省みても、扱いにくい人間だと思う。もしも目の前にこんな人間が現れたならば、露骨に距離を取ってバリケードを張った拳銃に深い深い溝を掘ることだろう。

にも関わらず。

幸輔や尋絵を始めとして、友人はいる。頼り信じてくれる人間がいる。

「幸せな事だねえ」

呟いた麻生は、3階から続く階段に足をかけた。幸輔に梨香を任せた後、3階の廊下を歩き回ったのだが、目指すものはなかった。テンポよく階段を上がり、5階と壁に表記された4階へ。

目指していたものはすぐに見つかった。

右、左、真正面の3方向に伸びる廊下　真正面の廊下の先に、素人目にもそれとわかる異様な空気。スーツに柄シャツをまとった男たちが剣呑な空気を生んでいた。その数、6。

ドアの閉じた病室の前で、皆一様に沈黙したまま、備え付けのベンチにどっかと腰を下ろしている。

男たちの中でも最も屈強な男と目が合った。

「……………」

「……………」

やっぱやめた。

目を逸らした麻生は右の廊下に爪先を向け、男子化粧室のドアを押し開いた。4つの便器と3つの個室、タイル張りの壁に囲まれたトイレは念入りに清掃されているらしく、汚れなどまったく見当たらない、見事なまでの清潔感だった。

「さて、どうしたもんか」

一番奥の便器で用を足していると、ドアが開いた。患者でもなければ先の屈強な男でもない。白のスーツを細身にまとった若い男。歳は麻生と近そうだった。端の便器で用を足そうとチャックを開く彼の服から、甘い匂いがする。ちろちろと便器を打つ音が1つ増えた。

「葉巻、吸うんですか？」

放水し続ける自分のモノを見下ろしつつ、麻生。

「キミも吸うの？」

鼻にかかった声は眠そうだった。

「親父が吸ってたもんで。俺が吸わないんですけど」

「高尚な趣味を持ってるんだね、キミのお父さんは」

「そうですね」

「そうだよ」

男は断言した。

「見たところ、入院してるわけじゃなさそうですね」

「自分のモノ見ながら、よくわかるね」

「横の視界が広いんです」

「へー。そりゃすごい」

「お見舞いですか？」

「祖父が入院してるんだ」

チャックを上げて、男は言い添えた。

「……まだ終わんないの？」

ちろちろちろ……

「膀胱が破裂するんじゃないかってくらい我慢してたんで」
にこやかに、彼に振り向く。

アッシュに染めた髪を無造作に散らした男の顔と対面　イラストで描かれる猫のような細目に、すっと通った鼻筋。小さな唇も、その頬も、健康的に血色が良い。背丈は麻生より高めだが、気になるほどでもなかった。白スーツをきっちり着こなす佇まいは紳士的で、まさしく紳士。

そんな彼の笑顔は柔和だった。

「我慢は良くないよ。したい時にしないと、本当に破裂しちゃうよ」
「次からそうします」

ドアが開いた。

男が振り向いて、麻生が見やった先に、ドア枠いっぱい体格が先の屈強な男がいた。彼は麻生の事など見えていないかのごとく、

「会長が目覚めました」

「わかった、すぐ行く」

白スーツに言い置くとすぐに退室した。

「彼、細木ほこぎっていうんだ。苗字からは考えられない体格だよね」

元来親しみやすい性格のようで、気さくに笑う白スーツだった。

「じゃあ、苗字がコンプレックスだったりするんですかね」

「そうでもないみたいだよ。キミも誰かの見舞い？」

流れるように華麗な話題転換に麻生は首肯した。

「友人の」

「まだ終わんないの？」

「今終わりました」

チャックを上げ、男の脇をすり抜けて洗面台で手を洗う。

「友人の見舞いかー。病気？」

「いや、刺されただけなんで」

「刺されたの？」

「ぶすつと」

鏡越しに見た男の顔は心底驚いている風だが、細目は細目のままだった。見開くかと思っていたのだけど。

「ケンカ？」

「いやいや、一方的に」

「世の中、危険でいっぱいだね」

「お互い、刺されないように気を付けましょう」

「あはは」

「ははは」

朗らかに笑い合つて、2人はそろって化粧室を出た。

「キミは面白い男だね」

肩を並べて歩くと、麻生との身長差が大体5センチほどだとわかる。

「見舞い客なら、また会えるのが楽しみだよ」

「俺はつまらない男ですよ」

「自慢じゃないけど、人を見る目には自信があるんだ」

男は細目を指し示す。

廊下の交わるところで、どちらからともなく足を止めた。

「じゃ、俺はこっちの病室だから」

彼が指した廊下の奥　先程までいた男たちの姿は消え失せていた。

「俺は3階なんで」

「わざわざこのトイレまで？」

「限界まで我慢するのが好きなんです」

「Mだねー」

しれつと言う麻生にからからと笑う男は、見たままの乾いた性格のようだ。

「気が合いそうだ」

それは遠慮願いたい。

「ヒマがあつたらいつでも来ていいよ。いつもいるわけじゃあないけど、誰かしら人はいるから。連絡してくれば飛んで来るよ」

人はいる　それは明らかに、患者の他に、というニュアンスを含んでいた。

「また来ますね」

「その時は一緒に葉巻でも吸おう」

「いいですね。一度吸ってみたかったですよ」

笑顔で別れ、踊り場まで降りた麻生の背後に声が降る。

「仲良くしようね、麻生くん」

ぴたりと足が止まった。

「……こちらこそ　勅使河原さん^{てしがわら}」

振り向く　階段の上から笑顔で見下ろしていた彼は、

「『てっしー』でいいって言ったでしょ？」

ひらひらと手を振ると背を向けて歩き去った。

……憶えてやがった。

彼の鼻歌と、リノリウムの床を叩く足音が妙に響き渡る。

「あいっ……」

麻生の表情が険を帯びた。

「……………手洗ったか？」

第5話：「Fool-Zock Girls」

梨香の病室に戻り、麻生がドアノブに手をかけると、

『じゃんけんぽいっ！』

何やら賑やかな男女混声が聞こえた。

『あいこでしょっ！』

「あああああ！」

がちや。部屋に入ってみれば、ベッドで笑い転げる梨香と、床に
跪いて頭を掻きむしる、上半身裸の幸輔。目の前で苦悶している
幸輔の哀れな姿が一体何に端を発しているのか、一瞬理解に窮した。
「あ、アソーくん。おかえり」

「何やってんの」

「野球拳やってんの」

それでこれ、というわけだ。

「はい、幸輔。つまないけど、次は靴下ね」

「ちくしょお……ちくしょおお」

悔し涙で靴下を脱ぐ項輔の姿は、情けないくらい惨めでいっぱい。
「てか、どうして昼間っから野球拳なんだ？」

とてもとても面白そうに彼を眺める梨香へ、素朴な質問を投じる。

「2人で黙ってたってつまないでしょ？」

「だからって即野球拳かよ」

「私から提案したら快諾してくれたから」

「提案すんな。快諾すんな」

「いいいいよおおっしっ！」

靴下を脱ぎ終えた幸輔が、みなぎる闘魂を胸に立ち上がった。こ
いつもこいつで、何をそんなに熱くなる必要があるか。

「次こそっ！ 次こそ勝つっ！」

「そう言って負け続けてるじゃん」

指差し笑う梨香。

「幸輔が1回でも勝てば、私はハダカなんだよ〜?」

腰に手を当て艶かしく上半身をくねらせる。

何だこの異空間は 麻生、絶句。

「 神よっ! 」

「何の神だ」

叫ぶ頂輔の足元に転がるシャツ、カットソー、靴下。対して、梨香は何かを脱いだような様子もない。1回でも勝てば つまっただころ、幸輔3連敗。

「弱っ」

「おおおおおお、きたきたきたきたあああああ!」

顔の前で左手をわなつかせるその瞳は、もう肉食獣のそれだった。というより全体的にバカだった。

「じゃ、次行くよ」

梨香が右手を振り上げる。幸輔は荒い鼻息で応えた。

「じゃああんけええん !」

幸輔の喉が振るい震え、雄々しく右手を振りかぶる。

「ぽiiiiiiiiiiii!」

「神が宿ったのは左手じゃねーのかい」

冷ややかな麻生の突っ込みは宙に浮いた。

幸輔 ちよき。

梨香 ぐー。

「ご愁傷様」

会心の笑顔を前に、幸輔は膝から崩れた。

「 うわあああああああああああああ!」

床を叩きむせび泣く彼に、もはやかけてやる言葉など見付かるはずもなく。

「幸輔、弱すぎ〜!」

腹を抱えて爆笑する梨香。よく笑う女だ。

「こんなに弱いヤツも初めて見るわあ」

まぶたにあふれた涙をすくっていたその瞳が、麻生を捉えた。

「アソーくん、やる？」

「やんねーよ」

「てか何してんの、あんたらは」

3人の視線がドアに収束した。

「入院生活が暇なのはわかるけど、1日目からずいぶんと穏やかにすごしてるみたいで結構な事だわ」

すらりと細い長身が、開け放たれたドア枠に肩を寄りかからせていた。首の後ろでくくった髪は長く茶色に染め、赤縁メガネの瞳は眠そうに半分まで落ちかかる。華奢な肩に白衣を羽織り、カットソーとスカート、タイツにサンダルという出で立ちを見れば、この女が何者なのかは誰の目にも明らかである。白衣の胸ポケットを挟んだ、『忍足』と入ったネームプレートに麻生は目を凝らした。

「……しのびあし？」

ガンを飛ばされた。

「あ？」

女らしからぬ気迫にたじろぐ。

「シノタリ先生だよ」

強烈な視線は梨香に飛んだ。

「オシタリですー。オシタリヒロトですー」

「ご……ごめんなさい」

麻生でもたじろぐのだから、梨香が小さく萎縮するのは当然。

「次間違えたら傷口かっぴらくかな」

医者とは程遠いセリフを口走る。

「すみません……っ」

「わかればいいのよ」

一瞬にして殺人的な忍足の気迫は霧消　再び睡眠不足な顔に戻った。

怖っ。

口に出したら何をされるか……麻生は胸の中だけで言い留めた。

「お2人は始めましてよね。彼女の手術を担当した忍足よ。見舞いに来てくれるのはいいけど、変に気合いの入ったじゃんけんやら奇声やら悲鳴はやめて。フロア中に響いて迷惑だから。あと、そのキミ」

淡々と話す忍足の指が、ジーンズを脱ぎかけたまま硬直していた幸輔へ向く。

「は…ひゃい」

「早く服を着ないとケーサツ呼ぶわよ」

「……ひゃい」

不可思議な返事にはまったく触れようもしない。大人しく服を着始める彼から梨香へ、忍足の目が滑る。

「秋野さん。調子はどう？ 麻酔がまだ効いてるだろうから痛みはないと思うけど」

「大丈夫です」

「ま、あれだけ爆笑してるんだから、心配するところはなさそうね」
無表情で抑揚もなく言う。

「麻酔が切れたら痛みが出ると思うけど大して心配はいらないわ。あんまり痛むようだったら、ナースコールで呼んで」

実に業務的かつ一方的に話した忍足は、梨香の返事もろくに聞かぬまま出て行った。

「……………あれが担当医？」

彼女が後ろ手に閉めたドアを啞然と見つめ、全身に張り付いていた緊張が徐々に解れて行くのがわかる。

「怒らなければ怖くないんだけどね」

「十分に怖えよ」

「怖く見えるだけだよ」

ごろん 梨香は仰向けに転がった。

「本当に怖い人なら医者になんかならないでしょ？」

「医者は金が入る」

「忍足先生は違うよ」

えくぼを作って破顔されると、麻生もそれ以上は言えなかった。
「無表情だからそう思うんでしょ？ 何考えてんだかわからないから怖い。 けど、そんだけの事だよ。歩み寄ってみれば、きっといい人だってわかる」

2個上の意見とは思えないほど、梨香の言葉には心地良い穏やかさがあつた。

「なんか、21とは思えねえな」

「どーして？」

「21つつつたら、ほら、まだ人生遊んでるもんだって考えてたから」

「あはは！ みんなそうでしょ。私の場合は仕事柄、そういう人も来るからさ」

「 梨香さんって、何の仕事してんの？」

シャツの袖に腕を通していた幸輔が横から入った。

「尋絵と同じ、ソープよ」

「あ、なるほど。だったらいろんな人と接するね。俺はまだ行った事ないんだけどね、ソープ……って、えええええ！？」

「騒ぐと、また先生が来るぞ」

そう脅してやると、慌てて幸輔は自分の口を両手でふさいだ。

「幸輔くん、知らなかったの？」

まさか彼がそこまで大仰な驚きように至るとは夢想だにしていなかった梨香の目が、キョトンとする。

「尋絵さんはファミレスのウェイトレスだって聞いてた」

「そりゃあいつが高校生ん時の話だ」

そう言えば、尋絵は幸輔をからかう事に愉悦を感じていた。

「こーちゃんは知ってた？」

「知ってた」

「わー、俺だけ蚊帳の外か」

「そう落ち込むなって。尋絵にからかわれている幸輔を見ると、俺も俺で楽しいんだから」

「楽しんでんなよ」

「幸輔って楽しい人だね」

「えー」

梨香に言われ、まんざらでもない顔の幸輔　人選誤ったかも
麻生には、幸輔の表情が手に取るようにわかった。

第6話：「尋絵、s 腹の虫」

葉崎市の東端 隣接する市との境界線として流れる宇佐川うさがわ沿いに、桜田梨香と井延耕佑の家があった。鬱蒼と草の生える川辺からは夏の虫の鳴き声が染み出る夕方6時。吹く風は湿気を含んで蒸し暑い。

「こりやまた、人気の少ねとこだな」

周囲を見回す。部活帰りと思しき高校生たちが、遠くに見える橋を自転車で走っていた。

「若いねえ」

「年寄り臭っ」

目を細めた麻生を見もせず、尋絵が吐き棄てた。聞こえなかった事にしよう。

「ここには何度か遊びに来てんの？」

「何度も遊びに来てんの」

「あつそ」

嫌味つたらしく訂正された。どうやら腹の虫たちがこぞって悪い場所にいるらしい。

一軒家やらアパートやらマンションやら、住宅が連なる区画の中でも、2人が目の前にしているマンションは建てられて間もない事がはつきりと明瞭に見て取れた。3階建てのグレーの外壁は色落ちもしておらず、オートロック式の出入り口は蛍光灯が明るく照らし出す。幅が狭い代わりに奥行きを持った、神経質なまでに直方体な無機物。埃ひとつ許さないという意気込みを感じる、綺麗にガラスの磨かれた自動ドアで仕切られた、エレベーターホールの手前に備え付けられているのは、2列×5列の郵便ポストである。そのうちの1つを、無遠慮にも、尋絵が開けた。

ばさっ。

彼女の足元に封筒がまとめて落ちる。ちっ！　　苛立たしく舌打ちする尋絵にうんざりしながらも、

「おまえさー、何そんなに苛立ってんの？」

封筒を蹴っ飛ばしかねない彼女より先に、麻生が拾い集めた。きびすを返し不機嫌を大いに散布しながら、尋絵がオートロックの自動ドアを開けている。

「……番号、知ってたのかよ」

ドア脇の壁に埋め込まれたパネルを横目に、ずかずか進む尋絵を追う。麻生の言葉なんて初めからなかったかの如く、尋絵は別の方向から麻生と向き直った。

「仕事でやなヤツの相手したのよ」

「どんなヤツ？」

「話したくない。思い出したくもない」

「　　おい」

8通集めた封筒を片手に、大股で歩み寄った尋絵の肩を強引に引っ張る。

「痛いっ！」

悲鳴を上げた尋絵が手を振り払う。

「何すんの！」

「お前が仕事でやな思いする事だって俺は知ってるよ。仕事が仕事だしやな客でも相手しねえといけねーだろ？　それで不機嫌になっって言ってるじゃねーんだ。空気悪くすんなって言ってるんだろ。八つ当たりなら1人でやれよ。見せ付けるようにすんじゃねー」

「うるせーよ」

「うるせー？　一緒にいる俺の身にもなれ。めちゃくちゃ居心地わるいんだよ。苛立つくれーなら話してくれた方が断然マシだ」

唇の端を持ち上げ、睨め上げる尋絵は鼻で笑った。

「話してどうなんの？」

「いつもそつだよな」

「は？」

「自分以外の事だと相談すんのに、自分自身の事になるとまったく話さねえのな。目の前で苛立って八つ当たりして、話してくれねーとわかんねーだろ」

「じゃ、放つといて」

「放つとけねー」

尋絵の顎を麻生の手がつかんだ。肉付きの少ない骨の感触。前に会った時より痩せ落ちた頬。

「自分の事話したっていいだろ。何を考えて何を感じてんのか、そんな事くれえ言ってくれたっていいんじゃないか」

「……そんなの知ってどーすんの」

「おめーを知れんだろ。苛立つなって言わねーよ、俺だってイラつく事あんだから。話せ。おめーにとって俺はそんなもんか」

睨み続けた尋絵から、小さくため息が漏れる。

「………放して」

その言葉からはもう刺が感じられない。

言いたかった事はすべて吐き出した。麻生の胸にあったわだかまりは、払拭されこそしていないものの。

「放して……もうエレベーター来てる」

見れば、ドアが口を開いていた。一言も口にする事なく手を放し、居心地が悪いまま尋絵とボックスに乗り込む。定員5名の空間で壁に寄りかかり、階数ボタンを押す尋絵を視界の隅で見つめた。

ウウウ……ン……

ドアを閉めたボックスが緩やかに上昇　その機械音だけが響く箱内で、麻生はぼつりと言った。

「友だちなのに何も教えてくんねえって、なんだか寂しいだろ？」
足元に視線を落としたまま沈黙し続ける尋絵に耐えかねた。

「………」

「………」

「………放つとけねー」

次の句を放とうと口を開いたら、彼女に先を越された。麻生の口

マネをして無表情のまま、また鼻で笑う。

「告白みたいじゃない」

「ときめいちゃった？」

「いっぺん頭かち割ったら？」

語調が静かなだけに、冗談か判別し難い。

チンッ

3階に到着したボックスは、ゆっくりとドアを開いた。尋絵は動かなかった。

「出るよ」

麻生の言葉に応える代わりに、細い指を『開』ボタンに押し付ける。お先にどうぞ、という意思表示らしい。意地を張るつもりもない麻生は、あっさり箱を出た。

「今日の客ね」

ふいに尋絵の声が麻生を追い越す。

「ひどい客がいたのよ。店に初めて来たみたいなんだけど、やたらと命令するヤツで。あーしろこーしろ、何してんだバカ、そんなに金取ってんのか、ちつともよくねーよ、この店はレベル低いなー。何様か知らねーけど、やたらとぶつサイテー男。あー、ハラ立って来た」

振り向く。彼女は下唇を噛んでいた。

「やたらとぶつ？」

「そう。文句言う度に」

「殴り返しやいいのに」

「『殴つたらオーナーに言い付けるぞ』」

「ガキか」

呆れる客もいたもんだ。

「顔じゃなくて、見えないとこばかり殴るのよ。腹とか腰とか背中とか、肩とか」

通りで、肩を引っ張った時に痛がったわけだ。

「わりい」

「客だからってさあ、そんな事していいの？ 真昼間からソープ来てるヤツにどうしてそこまで言われんだよ。ストレス発散グッズじゃねーぞ」

次第に熱を帯びる言葉を、麻生は受け止めた。

「こつちだつて仕事だから大人しくしてんだ、仕事じゃなかったらシゴくかよ！ 何だあれ！ 勃つてんのかわかんねえくれーのソチンが！」

エレベーターホールで受け止め切れるものじゃなくなった。

「まあまあ、公共の場でハレンチな暴言は避けよう」

「アソー」

きつと睨み付ける。

「腹貸せ」

「はい？」

胸を貸せの間違いじゃ？ 言葉の意味は直後にわかった。

ぼぐつ！

「あー！ スッキリしたあ！」

腰に手を当て仁王立ちする尋絵の足元に、腹を抑えてうずくまる麻生の姿があった。

「……結局、八つ当たりかよ……」

「こつちいう事あったら、次もよろしくね」

華奢な体のくせに、不意打ちだったものだから拳が重かった。

「友だちだもんね」

清々しい笑顔で覗き込む彼女が憎らしい。

二度と店に行くな、ソチン。

麻生は切に願ったという。

「さつさと起きろよ、アソー」

つい先程までの事がまるでなかったかのような振る舞いで、爪先で小突く尋絵。

「ありがとうね」

麻生が顔を上げた時には、すでに彼女は廊下を進んでいた。

「……………まいつか」
緩む頬を制し、立ち上がる。

第7話：「悪意を書き殴る」

エレベーターホールから直進する廊下には2対のドアが並ぶ。廊下の真ん中で身を寄せるように隣り合う造りになっているのは、奥行きのある長方形の間取りのせいだろうと察せた。蛍光灯の照らす廊下の突き当りには、非常階段が夕陽を赤く浴びる。

右手の壁の、奥のドアノブ　プレートは空白　に尋絵の取り出した力ギが挿し込まれる。
がちやり。

ドアを引いた尋絵が、玄関に入ってすぐの壁にあるすいっちを押した。果たして暖色系のオレンジ色の証明が灯る。

「ゆっくりしてってよ」

「って、おまえんぢゃねーだろ」

石張りの玄関に木製の靴箱。スリッパスタンドには4足のスリッパが差されている。そこから尋絵は2足抜くと1足をつっかけ、スタスタと上がり込んで行った。

「猫に小判」

靴箱の上に置かれた、招福と書かれた小判を首から下げた招き猫をチラ見し、麻生もスリッパに履き替えた。起毛のスリッパはフカフカしていて、履き心地は良かった。ピンク色なのが気に入らなかったのだが、残る2足のスリッパはと言うと、緑と紫　消去法でピンクをキープ。

廊下を進んで左に折れると居間だった。キッチン、食器棚、テーブルにテレビ。壁にもたれた本棚にはマンガ本が前後2段構えでぎっしりと身を詰めていた。

「　わっ！」

「どした？」

居間の向こう　カーテンで仕切るその奥を覗いた尋絵が、しき

りに手招いていた。きれいに整頓された部屋を突き進み、促されるままにカーテンの向こうを覗き込んで、

「うおっ！」

麻生も驚いた。

大きな猫がいた。

もとい。玄関の招き猫をそのまま大きくしたヌイグルミがベッドの上に鎮座し、こちらを見つめていた。

「何だこりゃあ……」

見たところ麻生の胸元までであるであろう身の丈の、招き猫のつばらな猫目に圧倒される。クローゼットが2つ並ぶ寝室に、そいつはあまりにそぐわない。

「そーだ」

恐る恐る踏み入った麻生の背中に、尋絵の声がかかる。

「梨香って招き猫が好きなんだった」

「どんだけ福に貪欲な女だ」

小綺麗な部屋をぐるりと見回す。出窓に招き猫のペア、枕元に招き猫の目覚まし時計、招く腕にリングをかける置物もあった。思い出してみれば、居間のテレビやケープル、キッチンにも招き猫の姿があった。

考えてはいけない事を考え、口にしたくない言葉を口にする。

「ひよっとして……カレシさん、あまりの不気味さに逃げたんじゃ」
招き猫の隣に腰掛ける。ダブルベッドはいいスプリングだった。

「2人そろって招き猫が好きみたいよ。2人で招き猫片手に仲良く撮ったプリクラ、私もらったし」

「もう突っ込みようがねーな」

丸く膨らむ猫の後ろ頭を撫でていた麻生は、ふとベッドに転がっている物を見つけた。

「2人が幸せならいいじゃない。さ、早く梨香の服を持ってってあげよ。替えの下着もないんじゃないかわいそうだ」

クローゼットからブランド物のバッグを取り出し、尋絵は荷造り

を始めた。もう1つのクローゼットはカレシの物だと聞いた事がある。しかし今、その戸を開くべき人間は目下消息不明。どこで何をしているのかわからない。

もしも。

このまま彼が帰って来なかったら　その時、梨香はどうするのだろう。以前の尋絵がそうであったように、今の梨香は恋人にべつたりだ。皆の前でこそ明るく振る舞っているが、胸中に侵食している不安を少しでも忘れようと努めているのが、尋絵にはわかる。

鬼気迫る声音での留守番メッセージ。

それを聞いた直後の彼女の取り乱しように、麻生たちは知らない。得体の知れない恐怖と不安が混濁し混乱する脳は悲鳴と狂乱しか指令しない細胞の塊に成り下った。涙なのか、鼻水か涎か汗なのかも判別が付かなかった。すぐる声は悲鳴で、すぐる腕は暴力でしかなかった。水平を維持している天秤から片方の分銅を取れば、当然その腕は傾ぐ。唐突に片割れを見失った梨香の精神もまた、均衡が幻となった。

でないの電話に出てくれないの、どーして出ないの出てよ出てよ出てよおお！！

かけどもかけどもつながらない携帯電話を振り回し泣き叫ぶ梨香は、それでもリダイヤルを推し続けた。マニキュアの剥げた爪が白く、指先が赤くなるほど強く。

髪を振り乱す彼女を、必死に抱き締め続けるしかできなかった。彼女の力になりたかった。友人を支えたかった。梨香を救いたかった。

そして、麻生に救いを求めた。

かつて尋絵を救ってくれた麻生に。

「　　ね、アソー」

こんなもんだらうと衣類をまとめ終え、先程から黙り続けている彼を振り返った。

ウィーン、ウィーン……

尋絵に背を向け、手にしたバイブと同じように首を揺らす麻生を見た。

「黒くて太くて、な、何じゃこりゃあ」
凝視しながら呟いていた。

「あんたは何してんのオオ!？」

即座に背中を蹴っ飛ばす。

「いつて!」

「他人^{ひと}んちが上がって勝手に遊ぶな!」

「ちよつと待て! 俺はこれが何なのかと……!」

慌てる麻生の手が何の拍子にか、バイブのダイヤルをMAXに回した。

ウィンウィンウィンウィンウィンッ!

「おおおお! 手が痺れるううう!」

ベッドでのた打つ麻生。

「うるさい!」

激しく揺れるバイブを放そうともしない手から、強引にもぎ取った。スイッチ、オフ。

「梨香さん……あんたはスゲー。スゲーよ」

興奮で息も絶え絶えな麻生へ一言。

「本気で死んだ方がいいよ、あんた」

入院生活に必要なだと考えられるものをバッグに詰め込んだ後、2人は早々に部屋を出た。まさか主のいない家でゆっくりとくつろぐには気が引ける、目的さえ遂行すれば長居する必要もない。

「犯人は現場に2度現れるっつーけど」

予想通りバッグを持たされ荷物持ちと化した麻生は、ドアをロックする尋絵に何ともなく言った。

「それらしいヤツなんて見なかったな」

「自分で刺しといて、それでも家を張る理由なんてある?」

「井延耕佑が戻ってくるかもしれないじゃん」

「梨香をホテルに移動させてんの?」

「犯人がそこまで知ってつかよ」

「あそつか」

肩を並べてエレベーターに乗り、1階に降りるとオートロックの自動ドアをくぐり 異変に気付いたのは尋絵だった。

「腹へったー。メシ行こーぜ、メシ」

「アソーのオゴリなら」

「うわー、搾取って言葉知ってる？」

「上納って言葉なら知ってる」

「ソープ嬢ってのはみんなそうなんかい」

「……何あれ」

「腹へったー」

なおも空腹を訴える麻生の手を引っ張る。

「あんだよ？」

足を止め振り返った数歩前で、尋絵が指差したのは

「……あれ」

呆然とする彼女の指先を辿った視線 2列×5列の郵便ポストだった。アルミ製の光沢にピンクが混じった……ピンク？

麻生の目が見開く。

『FUCK YOU!』

スプレーで書き殴られたピンクの文字。ポストだけで収まり切らず、暴れ回るように壁にまではみ出していた。陰湿な悪戯にも思えたが、露骨なまでの敵意を隠そうともしない文字。

カランッ！

2人の首がドアの向こうに引っ張られる 夜の帳が迫る夕闇の中で、何かが動いた。

「頼む！」

言うが早いか麻生が駆け出す。道路に出てすぐ右折 はるか前方を走るスーツ姿を追った。距離は5メートルほど。足の速さは…

…追いつける！

何の目的でここにいる？

あのスプレーはおまえか？

投げ付けたい質問を頭の中で繰り返して駆ける。スーツの人影が脇道へ飛び込んだ。麻生は体ごと体重を横に倒し

キキイッ！

「つとお！」

目の前に飛び出した車に慌てて身を引く。

迷惑な視線をあからさまに残して おまけに舌打ちしたのも窓越しに見えた 学生と思しき男の駆る車は走り去った。左ハンドルだったのが気に食わなかった。

「……………あーあ」

なおかつ、追っていた人影を見失うという失態付き。住宅街を抜ける道では、先のスーツ姿が律儀に待っていてくれるような事もなく。

「くそっ！」

電信柱を蹴っ飛ばした。

おまけに。

「……………」

マンションに戻った麻生を待つてくれていたのは、スプレー缶とバッグと、尋絵の携帯電話だった。

道路に転がるスプレー缶 振り向くきつかけとなった物音の正体なのだろうが 衝動と力に任せ蹴り上げた。縦回転で放物線を描きながら草むらへと消える缶を背に向け、マンション入り口に放置されたままのバッグへと歩み寄る。程よく膨らんだその上にご丁寧に載せられた携帯電話が

）

鳴った。

第8話：「4th K」

「ちよつといいかしら」

ノックもせず忍足女医が現れた時、幸輔と梨香は仲良くバラエティ番組に笑い転げていた。

「あ。俺、ちよつと外すね」

忍足と梨香の顔を見比べ、席を立った幸輔だが、

「用があるのはキミ」

相変わらず眠そうな瞳は意に反して彼を指名した。

「行つてらっしゃい」

梨香が呑気に手を振って送るのを背に、忍足と一緒に部屋を出る。窓の外はとうに暗く、蛍光灯で照らされる病院の廊下は学校のそれを彷彿とさせた。ただ学校とは違って、清潔感に神経を集中させている感があるのだが。

現在午後7時半を回ったところ。病棟内には時間を持て余した患者の談笑や、トイレへ向かう姿が多く見受けられる。そして驚く事に　その患者たち全員に忍足は声をかけた。

「おばあちゃん、腰はどう？」

「薬はちゃんと飲んだ？」

「おじいちゃん。もう若くないんだからはやぐんじゃないよ」

表情こそ変化はなかったが、聞いた事もない柔和な声で1人1人に話しかけ、患者が笑顔で応えてくれる、その姿は紛れもなく医者だった。

怖く見えるだけだよ。

梨香の言う通りだ。歩み寄れば案外いい人なのかもしれない。

「慕われてるんですね」

となりの病棟につながる渡り廊下を歩きながら、幸輔はその背中に言った。

無視された。

梨香さあぁん！

息苦しさに助けを求めた。

となりの病棟は外来病棟だった。こんな所に連れ出して何のつもりだろう。受付時間をとくに過ぎた病棟内は消灯されており、非常口を示すグリーンの光源だけが残る中、2人の足音だけが不気味に響く。

「この病院の診療室、担当医ごとにボックス部屋になってんのよ」

緑色のソファが並ぶ待合室を横切って、忍足の足が止まった。廊下の両脇にスライドドアが何枚も並んでいる様は、薄闇に浮かび上がっているようで気味が悪い。すべてのドアには大きく番号が記されていた。患者を呼ぶ際に、診察室の番号で招くシステムらしい。

「病状やカルテも立派な個人情報だから、密室で診察するの」

7番のドアをスライドした忍足が、診察室の明かりを付ける。

「何してんの。早く入りなさい」

促されるままに入室した。蛍光灯の光に目を細め、ドアを閉める。
「座って」

さらに促され、一見して高価なものわかる、背もたれ付きの黒革イスに腰を沈める。こんなにも座り心地抜群なイスで診察を受けるのかと、幸輔は戸惑った。

部屋は4畳ほどの広さ。忍足が座るデスクにはパソコンと、レントゲン写真を見るためのディスプレイがあり、あとは幸輔の座るイスだけが用意された簡素な部屋だった。

「ここなら、話は外に一切漏れない。この意味がわかる？」

優雅に、忍足の長い足が組む。

「この意味って……」

今さらながら幸輔の胸がざわめいた。主治医とその患者の友人が密室で話すなど、これではまるで……

「……もしかして、梨香さんの身に何か……」

「彼女は健康そのものよ」

即答はうれしいが、せめて表情に変化がほしい。

「まあ、その梨香さんに関係する事なんだけど」

デスクに肘を突き、メガネの奥の双眸が一瞬にして鋭利に変わる。

「エロエロパラダイスって知ってる？」

「……………」

「……………」

「……………今、何て言いました？」

「エロエロパラダイスって知ってる？　って聞いたの」

端正な無表情で何を言うかこの人は。

「……………なんですかそれ」

「これなんだけど」

白衣の胸ポケットから取り出した名刺カードを幸輔に差し出す。

ド派手なピンクにこれでもかとハートマークを散りばめた　いや、

詰め込んだデザインの紙に、丸文字で印字された文字。

『エロエロパラダイス　エリカ』

「梨香さんが所持していた物よ」

「勝手に取っていいんですか」

「もらったの」

幸輔の冷静な突っ込みをもものともせずに戻した。

「かわいいわねって言ったら簡単にくれたわ。　で、もう一枚」

再び胸ポケットに指を入れる。次いで差し出された物も同じものだったが、こちらにはキスマークが付いていた。

「なんで2枚も持つてるんですか」

「キスマークの方は同僚が落としたものよ」

「はい？」

驚き手元の2枚を見比べる。

「同僚って言ったら」

「そう、この医者」

顔色ひとつ変えずに忍足は言いのけた。

「その白衣から落ちたのを拾ったの。正直げんなりしたわ。こんなところに行く男と、そのネーミングセンスゼロの店名に」

「後者はどうでもいいでしょ」

「もっと捻りようがあるでしょ」

「俺に言われても……」

真っ向から責められても困る。

「そこでお願いがあるんだけど」

話題の移行は早かった。

忍足という女、無頓着と言うよりもあつさりした性格のようだ。

「可能な限り、梨香さんを外に出さないでほしいの」

言われて逡巡。

「それは……同僚に会わせると良くない事でもあるんですか？」

「良くない事しか残らない」

不気味極まりない事を口にし、忍足は背もたれに寄りかかった。

「そこまで」

キスマークのカードを指先で弄んだ幸輔は、

「人目のない所で、その男がキスマークに口付ける瞬間を見たい」

すぐさま壁に投げ付けた。

「梨香さんが入院してるなんて知ったら何するかわからない」

床に落ちたカードを追う忍足の目には懸念ばかりが映る。

「わかりました」

背筋を這う悪寒と、夏だと言うのに立つ鳥肌と、胃を覆った吐き

気を抑えながら、幸輔は頷いた。

「お願いしたわ。私独りじゃ守り切れないから」

安堵したのか、わずかに彼女の唇が緩む。

「今日は彼、当直じゃないから安全よ。それから 面会時間は7時までなんだけど、あなたに限ってそこは目を瞑る。事情が事情だから、彼女のそばにいてあげて」

彼女と口にした忍足の語調に何か引っかかりを覚えたが、すぐに気のせいだと考え直した。

「で、その男の名前は？」

「はやしこうすけ
林航助」

これで、コースケは4人目だ。

第9話：「Gi-Wack to Tessy」

『もしもーし。あなたのお名前は？』

人を食った物言いだけで電話の向こうにいる人物が誰だかわかった。

「……てっしー。女をどこにやった？」

『おっと。いきなりビンゴとは驚きだね』

「答える。女をどこにやった」

「この女って麻生くんの何？」

「そこにいるんだな？」

『ねえ、麻生くんの何なの？』

鼻にかかった声は聞いているだけで腹が煮立つ。

「どこにいる？」

『この女は大切な人？』

「どこにいたかって聞いてんだ！」

『そういきり立たないでよ。怖いな。今お迎えに上がるから』

「どこにいたんだよ！」

『またあとで』

電話は一方的に切られた。着信履歴を見ても非通知。携帯電話を地面に叩き付けたい衝動を舌打ちで抑えた。

ほどなくして、1台のライトバンが麻生の前に止まった。黒塗りの車体から現れたのは、あの屈強な男だった。細木とかいったか。

細木の開けた後部ドアを、麻生はバッグ片手に仏頂面でぐぐった。シートに腰を沈めるのを確認して細木がドアを閉める。車内には誰もいない。窮屈そうに運転席に乗り込んだ細木と2人きり。とんだドライブだ。

「これ、しといってくれませんか」

「何だよこれ」

「それをしてもらえないと、車は出せません」

体付きから容易に予想できる低音ボイスは、思いの外物腰が丁寧だった。仕方なく、手渡されたアイマスクを付ける。畏に決まっただけなのだが、これしか尋ねのいる場所への道はない以上、従う他なかった

「着きました」

1時間もかからないくらいだろうか、視界が真つ暗な状態で車に揺れていた麻生は

豪快にいびきをかいていた。

肩を揺り動かされ目覚めると、口元のよだれを拭いながらマスクに手をかけ、

「まだ取らないでください」

「何なんだよ」

文句を言いながらも細木に腕を引つ張られ歩く、そんな自分の姿を想像したくなかった。そして、今。

立ち止まったかと思えばアイマスクを取られ、今まで暗闇に慣れていた視界に光が差す。あまりの眩さに麻生は手をかざした。

「おいでませ、麻生くん」

正面から、あの声が聞こえた。

「目隠した無礼は謝るよ。人に知られたくない場所なもんだから、致し方なかったんだ。何を隠そう、秘密の場所だからね」

声の響き方から考察するに、ここはただっ広い場所らしい。肌にまとわり付く湿った空気。冷房もなし。悟られぬよう爪先を動かすと、じりりという音と感触があった。風はない。遠くでは女の喘ぎ声

「聞こえる？ 麻生くんの女はクスリとSEXを堪能中だよ」

目が光に慣れた。

「うそつけや」

「どうしてそう言えるのかな」

「あの声は未成年の声だ」

「わお、正解」

勅使河原、拍手。

「そ、麻生くんにまったく無関係な女の子。A V撮影中でした」

「……これはまた」

彼の言葉を流してまぶたを開く　推察通り、連れて来られたこ

こは廃工場だった。

「大層な歓迎っぷりじゃないか」

光源は高い天井からぶら下がった白熱灯。打ちっぱなしの壁。あちこちに高く積まれた木箱。砂利交じりの地面　麻生から4メートルほど離れた木箱で、足をぶらぶらと垂らし座る白スーツが葉巻をくわえていた。そして、麻生の背後には細木。

見る限り、この場には3人しかいないようだった。

「麻生君を迎えるんだから、これくらいいしないかね」

勅使河原の口から煙の輪が浮かぶ。これくらいとはどれくらいなのか、ほんの少しだけ気になった。

「けど、すげーね。喘ぎ声だけで未成年だってわかるんだ？」

工場内の隅にはプレハブ小屋が見えた。どこの女かなんて知る由もないが、その中でコトが行なわれているのは確実だった。少なくとも、あのプレハブに2人はいるだろう。この場にいる人数、3人改め、少なくとも5人。

「わかんねーと思うけど、声の湿り気が違えんだ」

「湿り気、ねえ」

聞いてみただけらしい。

「うん、わかんないね」

勅使河原はそれ以上、大して興味を示さなかった。実のところ、単に当てずっぽうで言ったただけだったのだが。

「んじゃ、次の質問。　麻生くん。井延耕佑って男を知ってる？」

「知らねーよ。会った事もねー。んな事より、尋絵はどこだ」

そう。場内に視線を配しても尋絵の姿が見えなかった。

「尋絵ちゃんっていうんだ、あのコ？」

「どこやった？」

「あのコも同じ事言ってたんだよね。知らないって。会った事もないって。けどさ、じゃあどうしてあのマンションにいたんだい？」

終始笑みを絶やさない勅使河原と会った人間は、人当たりのいい人だと口をそろえる事と思う。笑うと線になる細目は穏やかで明朗な性格であるし、不快を与える要素は見当たらない。

だが。

「教えてよ。どうしてあそこにいた？」

首を傾げたその左目が薄く開く。直視する人間の胸中を見透かそうと開く左目と、その内面に飼い慣らした残虐性を目の当たりにしてもなお、人当たりのいい人だとたまえるだろうか。

あいにく、麻生は初対面でその2つと対峙していた。

免疫はすでに付いていた。

「……早合点もいいとこだ」

彼を見据え、静かに言を押し出す。

「早合点？」

「俺と尋絵の新居なのよ、あそこ」

堂々と。

「2人の愛の巣」

「麻生くん、結婚したの？」

「いんや、まだ。近々籍入れるつもり」

「へー。それはおめでとー」

勅使河原の拍手が乾いた音を立てた。

「それはそれは、俺もとんだ勘違いをしたもんだ。恥ずかしい恥ずかしい」

「いやいや、とんでもない」

「あははー」

「はははー」

「細木」

勅使河原の呼び声に背後の細木が反応した。

「はい」

「麻生くんと、近い将来のお嫁さんはどの部屋に入った？」

「303号室です」

「あれ？ 303号室？ 本当に？」

「本当です」

迷いのない細木の返答を聞いて、勅使河原は腕を組んで考え込んだ。

「俺の勘違いかな？」

とんだ猿芝居だと、麻生は自分の事など棚に放り上げて胸中で漏らした。

「その部屋、井延の部屋じゃなかった？」

「間違いありません」

義務的に答える細木。勅使河原の唇が、にんまり左右に伸びた。

「ああ、もういい」

くだらない。

「こんなつまらねー事、お互いやめよう」

麻生が、顔と手を振って制した。お互いがお互い、見え透いた事を言っているこの状況が億劫だった。

「素直になろうよ、麻生くん」

「ずっと監視してたのかよ」

微笑する彼にため息をつく。

「いや、そんな事ないよ。監視は時々しかしてない。人の生活を覗くのは趣味じゃないから」

肩をすくめてうそぶく勅使河原へ、単刀直入に切り込んだ。

「梨香さんを刺したのはてっちゃん？」

麻生の言い放った問いを、

「……………うん？」

勅使河原はきょとんと受け止める。

「とばけんな。その井延を探すために刺したんだろ」

空気を振動した麻生の言は、短く尾を引いて拡散した。

「そんな野蛮なマネをすると思う？」

眉毛を上げる顔はそらとぼけているようにしか見えない。

「他に誰がやるってんだ？」

第10話：「歪曲friendly」

「ん」

ヒゲの跡もない顎を撫で、天井を仰いだ彼のとぼけようが気に食わなかった。

「そっか。それで彼女の姿がなかったのか。ふん、刺されてたのか」

独り言を呟き始める始末。なめきった拳動は麻生の神経を逆撫でた。

「とぼけてんじゃ……！」

踏み出したその肩が強く引かれた。振り向いた頬に鈍痛が破裂吹き飛んだ麻生の背中が派手に地面に擦れた。

「つつ！」

視界で星が瞬いた。遅れて口腔に鉄臭さが充満し、殴られた頬を激痛が圧迫する。

「失礼します」

かろうじて聞き取れた声に続いて、あばらに重圧がかかった。

「てめっ！」

逃げようと暴れても遅かった。体に乗っかり麻生の両腕を膝で、腹を尻でしっかりと固定した巨体は、弾き飛ばすには重すぎた。それでも抗いながら細木の顔を睨み付けた顎を、彼の大きな手がつかんだ。潰されるのではと思うほどに強い握力で。

「麻生くん」

組み敷かれた麻生の頭上で、耳障りな声がする。いつのまに歩み寄っていたのか、麻生の頭を左右から挟むように立ち止まった勅使河原の表情は、照明の逆光で影になっていた。

「突っ走る前に良く考えてみなよ。彼女を刺すくらいなら、部屋に乗り込んで直に聞き出す方が早いし利口だと思わない？」

尋絵を奪われ頭に血が上っていたせいもある。単純に、生理的に受け付けない人間を目の前にして苛付いていたせいもある。答えを急くあまり、失念していた。

歯噛みする。

「そんな頭の悪い事、俺がするわけない」

「……てっちゃん」

「何？」

「井延って男、何したんだ？」

「教えてあげられない」

そう言われるだろうと予想はしていた。

「……と思ったけど、場合によってだね」

「……は？」

予想外な方向に血路が開く。しかし相手は勅使河原、開いた道を容易に渡らせてくれるとは思えない。

「麻生くんの友達、たしか大東病院に入院してるんだよね」

過去の麻生自身の言動を心から悔やんだ。こんな事になるのなら、化粧室で迂闊に話すのではなかった。

「一方的に刺されちゃった友達の見舞いに、来てたんだよね」

「もって回った言い方してねーで、ストレートに言いやがれ」

「友達に井延の居場所を聞いてくれない？」

「やだ」

「細木」

顎をつかむ手に力が込められた。ギリギリと骨が軋み頬に歯が食い込む。全身の筋肉が収縮し、激痛の悲鳴が麻生の喉を灼いた。

「……っ！ー！」

「はい、止め」

勅使河原に呼応し顎を締めていた力が緩む。

「できれば、麻生くんとは仲良くしたいんだ」

骨にこびり付く痛覚に眉間を寄せ、氣息奄々と抗議する。

「これが仲良くしようっつー態度かよ……」

「嫌われたくないんだよ。もしも麻生くんの友達が姿を消したりしたら、きつと心を痛めるでしょう？ そんな麻生くんを見たくないんだ。これは、その気持ちを伝える手段」

「強引な男は嫌われっぞ」

「結果良ければすべて良し」

勅使河原が唄うように、ジャケットの内ポケットから何かをつまんだ。麻生の視界には逆光で影としか認識できないそれを、

「動かないでね」

麻生に向け垂直に落とした

スタンツ！

「……………」

鳥肌が総毛立つ間もなく、麻生の首筋、すぐ右脇に突き立ったものの落下する瞬間に見えたものはナイフだった。依然と勅使河原の表情は窺えない。遅れ馳せ、毛穴が一気に開いて冷や汗が吹き出た。プレハブの喘ぎ声が大きくなった。

「麻生くんに嫌われるくらいなら、いつそ殺す方がマシ」

恐ろしい事をさりとらえてくれる。再びポケットから影を抜き出した。

「……刺したのはおまえんとこの人間じゃねーんだな？」

「違うよ？」

「だったら……誰だ？」

「知らないね」

麻生の独り言に律儀に応え、つまんだら影をぷらぷらと揺らす。

「あつちは、もうすぐ終わるみたいだ」

喘ぎ声とスプリングの軋みが大きく聞こえるプレハブに首をひねった勅使河原の顔を、ライトが照らした。

「こつちもそろそろ終わらせないと あ」

やっと窺えた微笑が啞然とする。指からすり抜けた影が麻生の左目に一直線に落下し

スタンツ！

「やー、ごめんごめん。落としちゃった」

息を呑んだ麻生の左耳元にナイフが突き立っていた。

「……お、おめーよお」

喉からはかすれた声しか出ない。

「安心して。次は平気だから」

三度、ポケットから抜く。

「一体いくつ持ってたんだ」

「ナイシヨ」

つまんだナイフの狙いを定めて。

「さ、麻生くん。協力してくれるの？　してくれないの？　言っと

くけど、保留はなしね」

「……………くそ」

先回りされた。

「どうする？」

どうする？　自問した。

ヒロの野郎、マヌケにつかまりやがって。

胸中で八つ当たり。

喘ぐ女がうるさかった。

テンポを早くするスプリングがうるさかった。

漏れ始めた男のうめく声もうるさい。

勅使河原が憎らしかった。

細木が邪魔だった。

勅使河原を殴るのに、細木は邪魔だった。

ヒロの野郎……あとでぶん殴ってやる。

「……時間切れ」

制するいとまも有らばこそ。

勅使河原の指からナイフが離れた。落ちる事が義務だとしても言うように、ナイフは一直線に。麻生の右目が、その切っ先をたしかに捉えた。憎いまでに尖った先端はそれが権利だとも主張するように麻生の右目を

ズツッ！

「っ！」

プレハブの男女が絶頂を迎えた。

尋絵は寝起きがいい。睡眠を漂っていた意識が浮上し、枕とタオルケットの感触の中で寝返りを打つ。腕に触れたタオルケットは短く毛羽立っていて、少しくすぐったい。最近買ったばかりだというのにもう毛羽立ちやがって。そんなはずない。そんなにすぐ、毛羽立つわけがない。

ぱちりと目を開いて、そこが尋絵の部屋ではない事に気付いた。もうちよつと寝てしまえ、と囁く睡魔を無視して上体を起こす。寢室の窓際に寄り添ったシングルベッド。カーテンの開かれた窓からは眩しい陽光と微風が入った。窓と対面する本棚には文庫本が数冊と、あとは雑貨だけ。そのせいで棚のスペースはスカスカだった。床に視線を落とせば、雑貨が転がったまま放置されていた。枕元に置かれたメガネケースを見つけて思い出す。

そういえば、コンタクトだったっけ。

「ふあっ」

とりあえず、腕を振り上げて背伸びとあくび。
ベッドから下りて、居間に出た。

「アソー？」

部屋の主はいない様子。どこか外出したのだろうか。すぐに戻って来るだろうと踏んだ。

キッチンに入ると冷蔵庫を開けて、ろくな物が詰まっていない中身を見回してからミネラルウォーターのペットボトルを取り出す。本当は牛乳が飲みたかったのだが、麻生は苦手だと言っていた。舌の上に残る感触が嫌なのだそうだ。

多少、錆が見受けられるシンクの横に置かれた食器入れのカゴから適当にグラスを選んで、ミネラルウォーターを注いだ。ペットボトルを冷蔵庫に戻し、ドアを足で閉め、ソファに足を運んだところで気が付いた。テーブルに置かれたメモと、背もたれにかけられた

タオルケット　昨夜はどうやら、ソファで寝たらしい。さぞかし寝にくかったろうに。

「今さら、何を氣遣つてんだか」

ソファに座つて、テーブルのメモを手にする。メモに隠れるように、カギがあつた。

『カギ、持つといて』

味気なく走る筆跡は麻生のものだ。

ポストに入れるでも、本人に返すでもなく　持つといて。

何のつもりでどこへ行ったのか知らないが、少しだけ不安に胸が揺れる。すぐに彼のケータイにかけたが、『電波の届かない所』云々のアナウンスにしかつながらない。

なーに、すぐに歸つて来る。

自分にそう、言い聞かせた。

ここにいるてもヒマな時間を食い尽くすだけだ。今日は仕事もない。梨香の所へ行く前に自宅に歸つて、シャワーでも浴びよう。カギは、麻生が歸ってきたら投げ付けてやればいい。歸つて来たら歸つて来れば。

カギをつかんで出た玄関で、梨香のバッグとご対面した。その上にメモが一枚。

『よろし』

「それで、バッグ引きずりながら家行つて、ここに来たわけよ」

「都合良く荷物を押し付けられたんだね」

「出かけるついでに持つてつてもいいじゃない？　アソーに文句言つたろ」

「それから、アソーくんから連絡は？」

大東病院の個室。下着を換えた梨香は、浴衣に腕を通しながら尋ねた。その腹部を覆う包帯が痛々しい。尋絵は首を振る。

「まったくなし。どこ行つてんだかもわかりやしねーし」

シーツに引つ付いていた赤銅の髪の毛を叩き落したところで、不

満が解消できるわけもなく。

「どこ行っただろね、アソーくん」

「幸輔ー。入っていいよー」

梨香の着替えが終わるのを見計らって、ドアの向こうに声をかけた。わずかに開いたドアの隙間から、おずおずと幸輔の顔が覗く。

「幸輔ってさ、バイトは平気なの？」

尋絵はささやかな疑問を投げかけた。昨日から梨香の見張り役に着任したのは良しとして、就任期間が定められていない。いつまでここにいるのか定かではないが、幸輔にも人並みのスケジュールといったものがあるはずだ。その代表例が、コンビニのアルバイト。と言うか、それ以外を知らない。

「うん、問題ないよ。知り合いが経営してるから、融通利くんた」
ドアの外でしゃがんでいたのか、幸輔は屈伸を始めた。

「知り合い？」

「友達の親」

「あゝ」

尋絵と梨香、2人そろって納得。

「そりや多少の融通利くわけだ」

「シフト気にしなくても平気だね」

異口同音に頷く。

「今日ってコーちゃん来ねーの？」

「音信不通で行方不明なのよ」

尋絵が見舞いに来るなり幸輔を追い出したものだから、彼はその事を聞いていない。同じ事を説明するのはひどく億劫ではあったが、仕方がない、説明してあげよう

梨香のマンションの前で遭遇した不審な人物を麻生が追い駆けて間もなく、その場に取り残された尋絵の前に黒いライトバンが現れた。

「やあ、こんにちは」

目の前で横に開いたドアから、アッシュヘアにしるスーツの男がその身を出した。

「ちよつとだけ、お話してもいい？」

「怪しい人にはついてっちゃいけないんで」

「大丈夫。俺は怪しくないから」

尋絵の腕を取るなり強引に引つ張る力は強かった。

「大きな声出さないでね。平和主義者だから、何事も穏便に進めた
いんだ」

喉元まで出かかった悲鳴をとつさに飲み込む。平和主義者の手には拳銃が握られていた。

「……誰？」

「車に乗ってくれたら、教えたい」

乗るか死ぬか　ずいぶんとまあ、一方的な二者択一だ。

「さ、乗って」

結局腕を引つ張られ、つんのめるようにして車へ引き込まれた。

「ちよつ……！」

「ちよつと失礼するよ」

抗議の声を上げた彼女の口を布のようなものが覆う。脳が頭の中で浮く錯覚と脱力感。

「ケータイだけ借りるね」

意識の輪郭がぼやけ朦朧とする聴覚はその言葉だけを捉えて、五感
は切断された

第12話：「love letters」

「んで、気付いたら麻生の部屋だったのよ。あの後どうなったのかさっぱりわからないからって、聞き出そうにも麻生の姿はないし」

「布で口元を押さえて……尋絵、貞操のピンチっ！」

「……あんたが言うのと笑えない」
わめく梨香への反応に困った。

「そこらへんは平気よ。特にこれと言って、体はなんともなかったし」

「体 なんとも淫靡な響きだね」

伸脚に移っていた幸輔は無視。

「となると、いよいよアソーくんの行方が気になるな」

「コーちゃんの事だから、ひよっこり戻って来るんじゃない？」

「メモを2枚も残せたくらいだし、心配はしてないんだけど。でも何があつたのかは気になるでしょ」

「これ、何？」

「勝手にレディのバッグ覗くんじゃねーよ」

ストレッチを終えるや、おもむろにバッグを開いた幸輔を蹴っ飛ばす（土足）。悲鳴を上げ大仰に倒れた彼の手から、封筒がばらまかれた。

「ああ、これ」

拾い集めながら、ポストを開けた時の光景を思い出す。あの時の尋絵は自分でも驚くほど苛立っていた。神経がささくれ立っていた。機嫌が悪い事を隠そうともせずに、むしろ前面に押し出していた。

麻生の言葉がうれしかった。

「梨香。これ、たまつてた郵便物」

「いない」

それまでの笑顔が失せていた。普段コロコロと笑う梨香の顔は、表情すら失っていた。

「でも」

「いない」

こんなに強圧的に拒絶する彼女を目の当たりにした事がない。差し出した封筒を見ようとせず、頑なに拒み続ける。天井の角を睨み付け、両手の指を組み合わせ、寡黙になる。

「……いないって言われてもねえ」

尋絵の手の中で行き場を失った封筒たちを見下ろす。一見してダイレクトメールの類ではないとわかるそれらは、皆一様にアズキ色の封筒だった。全部で7通あるアズキ色には、切手があったりなかったり。

なかったり？

「へー。切手なくても届くんだった」

復活していた幸輔が横から覗き込んだ。

「郵便局はボランティアじゃねーだろ」

本当は、サービス精神旺盛じゃないと言おうとしたのだが、そんな事はどうでもいい。梨香の異常な拒みよう、無表情、切手がなくとも届く手紙。開けるのももどかしい尋絵は1枚の封筒を力任せに引き裂いた。破壊された隙間から覗いた便箋もアズキ色。6通を幸輔に押し付け、抜いた便箋を開く。裂けた封筒が足元に落ちた。

『ぼくの愛するエリカへ』

僕に黙って、いなくなるなんてずるいよ

けどエリカは、ぼくの愛を確かめたかったんだよね？

ぼくに追い駆けてほしかったんだよね？

わかってる。わかってるよ

待たせてごめんね

やっと見付けたよ

さあ、2人で純潔な愛を育もう』

まだ続く文を無視して、幸輔の手から奪った封筒も同様に裂く。

『あんな店、早く辞めてぼくと結婚しよう』『エリカと1つになりたい』『長身のあの男は誰だい？ ぼくとエリカの仲を邪魔するヤツは許せない』『エリカのために花を買ったよ。小さくて、キレイな花』『最近帰って来ないけど、どうしたの？ 心配だよ』『プレゼントは気に入ってくれた？ エリカの好きな』
ぐしゃつ。

「……何なのよ、これ」

便箋を両手で握り潰した尋絵は、背筋にいる寒気を振り払おうと、禍々しい何かを発する源を、気持ち悪いその何かを、床に投げ付けた。

「……いつからなの？」

「去年の夏くらい。前の店の客。しつこいから店も家も変えたの」
口にするのもおぞましいとばかりに、梨香の言葉は味気ない。

「信じらんない。店も家も変えたのに」

衣擦れ。自分を抱きしめた彼女の体は小さく震えた。

「何なのよあいつ。気持ち悪いつ。ただの客じゃない。客だったじゃない。接客しただけだったじゃない。なのにどうしてこんな事するの。こんな事までしてどうしたいの。どこまで私を追い詰めたいのよ苦しめたいのよ、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い」
頭を抱え唇をわななかなせる梨香を、尋絵は抱き寄せた。揺れる体、蒼褪めた相貌。抱きしめた頭に顎を寄せ、優しく囁きかける。

「大丈夫。怖がらないで大丈夫。梨香には私がいるから。アソーだつて、幸輔だつて、カレシだっているでしょ」

「コースケはいないのお。私のそばにいないのお。どこ行っちゃったのよコースケええ。会いたいよ、そばにいてよお」

呪詛は嗚咽に変わった。

こうなってしまうては成す術はない。梨香からあふれる感情とその身をきつく抱きしめる。彼女が壊れてしまわないように。彼女が崩れてしまわないように。笑顔が決壊し、ただただ流れる涙に頬を濡らしむせび泣く梨香を、強く強く、抱きしめ続けた。

「　　ちよつと行つて来る」

泣いて泣いて、泣いて泣いて。泣き疲れて寝てしまった梨香を横たわらせた尋絵は、心配そうに彼女を見守る幸輔に言った。

「どこに？」

「もう1回、梨香のマンションに」

寝顔だけを見れば、安らかなものだ。しかしその実、内面は疲弊している。すり減っている。どうしようもないほど、どうしようもないくらいに。ゴミ箱にねじり込んだアズキ色を一瞥する。こんな事態になっていると知っていれば、梨香に見せなかつただるうに後悔したつて、その先には何も無い。だからこそ。

幸輔は何か言いたそうではあつたが、何も言つて来ない。

だから先に、尋絵が言つた

「幸輔。梨香のそばにいてあげて」

「危ないよ。もしも、この手紙のヤツが来てたら、尋絵さんが……」

「その間、誰が梨香のそばにいるのよ」

ぴしゃりと言い放つ。

「だったら、尋絵さんがそばにいればいい。マンションには俺が行く」

尋絵の視線を、毅然と幸輔は見返した。

「どこだか知つてる？」

「……え？」

「梨香んち、どこだか知つてんの？」

「……」

幸輔の視線があさつてに飛んだ。

「梨香のそばにいてあげて」

「………はい」

不服そうではあつたが、今度は素直に頷いてくれた。

「手エ出したらしばらくからね」

「そんな事するかい」

「うそ。信じてる」

まるで弟のような彼にふざけて笑って、部屋を出た。

「あ、そうそう。好きになるなよ　　っと、これは遅いか」

振り向きざまに言い添えた言葉に幸輔が固まった。おもしろくらいわかりやすい。からかい甲斐があるってものだ。

「梨香には内緒にしようってやるよ」

笑ってドアを閉める。その足を踏み出した時、尋絵の顔は一片の笑みも消えていた。

第13話：「目」

腕時計を見ると午後4時まであと5分ほど。晴れやかだった空はにわかに曇り始めていた。もしかしたら、ひと雨来るのかもしれない。そうなってしまうえば帰りが困る。びしょ濡れになってしまうのは避けたい。濡れ過ぎず、乾き切らずが一番厄介だ。

そんな事を考えながら尋絵はマンションに入った。郵便ポストの前で腕組みする男がいた。

「こんにちは」

渋い顔でポストを睨み付けているのは、頭がすっかり寂しくなった中年の管理人だった。梨香の部屋へ遊びに来る際、何度か声を交わした事がある。

「ん？ あ、こんにちは」

「どうしたんですか？」

「これ見てよ」

管理人が顎で示したのは、郵便ポストの壁　ピンクの『F U C K　Y O U』。

「誰が何のためにしたんだが、困りもんだよねえ」

「イタズラですかね」

「じゃなかったら、こんな事しないだろう。横文字って、そんなにイカしてるのかねえ」

「イカスなんて言葉、久しぶりに耳にした。」

「じゃ、失礼します」

早々に話を切り上げて自動ドアを開けようとした尋絵を、管理人が呼び止めた。

「ああ、あんた。井延さんとこの友達だろ？　郵便物来てるよ」

と、今度は指で示す。住民ポストを覗くなんてとんでもねー不届

き者だと一瞬思ったが、すぐに思い出した。見れば、ポストの覗き窓から中身が覗いている。

「桜田さんに、お大事になって伝えといてくれないか」

不躰で多少乱暴な物言いではあるものの、一住民である井延も梨香も、顔と名前をしつかり記憶しているし、その身を案じている（彼が救急車を呼んだのだと、あとになってから梨香から聞いた）。できた管理人だと思う。

「はい、伝えておきます」

ポストにはアズキ色の封筒が投函されていた

施錠を解いたドアの向こうは、昨日麻生と来た時と何ら変化はない。当然なのだが。

部屋まで、難なく来てしまった。怪しい人物を見るわけでもなければ鉢合わせになる事もなく、梨香のように襲われる事だって皆無で 難なく、ここまで来れてしまった。

部屋に来たって証拠や手がかりなどないのに。不甲斐ない自分に、少し落ち込んだ。

1秒で立ち直った。

「……よし」

尋絵の手には封筒がある。先の封筒とは異なって、ずいぶん厚みがある。テーブルと並ぶ2つのクッション 白と黒、白とピンクのそれぞれ縞模様 のうち、梨香のものと思われる白&ピンクの方に座り、テーブルの上で封筒を開いた。

便箋とビデオテープ

「この2人は誰？」

特に男の方

こいつに言い寄られて迷惑してない？」

気色悪さを堪えて開いたアズキ色には、その3行しか書かれていない。

この2人という文字。そしてビデオ。

日にちも考慮して、昨日の麻生と尋絵の事だと容易に想像できる。

ビデオは大方、マンションを出入りした2人の映像だろう。

何が、ぼくの愛するエリカ、だ。さも恋人のように想いを綴り文字を連ねた文面は、思い出すだけでも鳥肌が立つ。時にそういった誇大妄想へ発展し、自らが客として接客された事を忘れ、ストーリーになる客がいるという事を、話だけなら耳にした事があった。中には、思い詰めたストーリーカーに殺害された者さえいる。

殺害 嫌な響きだ。一方的で、理不尽で、妄想。それだけで殺されるなど 梨香が殺される事など、あつてはいけない。そうなってしまう前に止めなくてはならなかった。

ビデオデッキを借りる事にして、気は進まないが、確認の意味でテープをセットした。テレビを付けて 再生。画面はすぐに明るくなった。

「……え？」

カーテン。尋絵。

カーテン越しに尋絵が背後を振り向く。

次いで、麻生。

「これって……」

呆然と尋絵は呟いた。瞬きを忘れた。口を閉ざすのも忘れた。思考すら停止した。

音声のない画面の中で、麻生と尋絵は驚いていた。

画面を越えて、こちらを 尋絵を見て驚いていた。

頭が記憶を呼び起こす。弾かれたように立ち上がった彼女は、寝室とリビングを仕切るカーテンを勢い良く引き開いた。ぶちぶちっという繊維の悲鳴。ベッドの上で昨日と変わらぬつぶらな瞳で招き猫が鎮座する。

テーブルのペン立てから抜き取ったハサミを、福を招く猫の額に倒れ込むようにして躊躇なく突き立てる。ぶちっ 繊維を貫く音。ハサミを投げ捨て、穿たれた穴に指を突っ込む。人差し指しか入らない穴を強引に広げる。中指が入り、綿が飛び出した。ぶちぶちっ

左手の指が入るほどに広がった穴をさらに裂く。奥歯を噛み締

め、無心に。盛り上がる綿に両手指を押し込んで、生地を左右に引っ張った。渾身の力を込めた。噛み締めた。噛み締めた。噛み締めた。

ぶぢぶぢぶぢっ！

少しでも裂けてしまえば簡単に切れ切れた。真つ白な綿が圧迫から逃れて膨張し、左右の目が別の方向へ向き、招き猫の頭はいびつに開いた。細かい繊維が宙を浮遊。窓を雨が打ち始めた。

小型のカメラが、あった。

息を乱し、肩を上下させ、しばし安心してそれを見つめていたが、むんずとつかみ取るや力任せに、床に投げ付ける。

バキッ！ 叩き付けられたカメラはバウンドして転がった。

「……ゲス野郎が」

されるがままの機械に吐き棄て

ぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢぶぢっ！

背後で弾けた音でとっさに振り向いた視界一面を布が覆った。のみならず押し倒される。

「ちょっ！？ 何！？」

わけがわからないまま本能的に手足を振り回す。右足が何かを蹴った。

「うっっ！」

うめき声と同時に、ベッドに押し付けていた力が緩まった。腹まで膝を持ち上げ、屈伸の要領で何かを蹴っ飛ばす。たしかな手応え。床に重いものが落ちる鈍い音。体が急に軽くなった。眼間を邪魔する布をつかみ、払う。仕切りとして使われていたカーテンだった。

「い、痛いじゃないか」

ついさっきまでカーテンのあった辺り、リビングと寝室の敷居に小柄なサラリーマンが倒れていた。打ち付けたのか、後頭部をさすり立ち上がる。

「おまえ、誰だよう？ エリカの何なんだよう？」

やばい……っ！

直感的に察知する。

こいつ、私が生理的に受け付けない人間だ……っ！

ベージュのスーツ。ネクタイはずれていた。

「エリカはどこ行っただよう。おまえが隠したのう？」

にじり寄る男に対し、尋絵は膝で後退る。足元に何かを見付けた男は一度屈むと、ハサミを逆手に握って起き上がった。さーっと、尋絵は自分の血の気が引く音を聞いた。

「エリカをどこへやったんだ　よう！」

「やあああああ！？」

男の振り上げたハサミがマットに突き刺さる。飛び退らなければ、間違いなく尋絵の膝に刺さっていた。

「どこだ、よう！」

尋絵はベッドから床に転がり落ちた。ぶすっという音が不気味に耳を打つ。

「な、な、なっ」

必死になって四つん這いで逃げる進路　リビングへの敷居に男が跳躍した。眼前を阻んだベージュのズボンに心臓が萎縮する。

「きやあああああ！？」

尋絵の頭は恐怖でいっぱいだった。仰向けに跳ね、踵で床を蹴って体を後退させる。凶器を持った生理的に受け付けない男が殺意を向けている　混乱するための要素は十二分だった。

「エリカはどう？」

一步、一步。恐怖心を煽るようにゆっくりと歩み寄る。

「来ないで来ないで来ないでえええ！」

後退に限界が訪れた。壁際に追い詰められた尋絵が乱暴に喉を鳴らせる悲鳴。

ぴたりと。男の足が止まった。

男との距離は１メートル強。

「……うるさいなあ」

ハサミを振り上げる。

「いや、いや、いや」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔を必死に振る。

「やめてやめてやめてやめて」

「エリ力を出せよう」

振り上げた腕に力が込められた。

「いやあああああああああああああ！！」

壁に背中を押し付け両腕で頭をかばい声帯を奮わせた絶叫が、

ガシヤアアアアアアアアアンツ！！

突如つんざいたガラスの破裂音に掻き消された。

「うわあ！？」

弱々しくうつろたえる男の声にまぶたが開く。後ろに下がった男と
尋絵のちょうど間　　サッシ窓が粉碎され、破片が室内に散つてい
た。ベランダからベッドにかけて、土が軌跡を描くように直線状に
散っている。ベッドに見付けた植木鉢が、残っていた土を零しながら
向こう側に転がり落ちた。

がしゃんつ。

割れたらしい。

ベランダから伸びた手がカギを開け、枠だけとなったサッシ窓を
カラカラとスライドさせる。吹き込む大粒の雨と一緒に、ずぶ濡れ
た麻生が床を踏み締めた。

「あ…あ、あ……」

名を呼ぼうにも舌が回らない。

「病院からここまで、全力で走って20分　　自己新記録！」

「ただだ誰だよおう！」

「うるせい！」

狼狽か困惑か両方か、飛びかかった男のハサミを簡単によけた麻
生の拳が頬にめり込む。軽々吹き飛んだ男は壁に衝突し、泡を吹い

て白目を剥いた。

「あ、あそ……」

舌っ足らずな尋絵を振り向いた麻生は、彼女に寄るとしゃがみ込んでその頭を撫でてやった。

「顔洗って来いよ。今のヒロ、ひでー顔してっから」

彼の笑顔で緊張の糸が緩み、抱きつくや声を出して泣きじゃくった。

第14話：「吐」

濡れたシャツは早々に脱ぎ捨てたものの、ジーンズまではさすがに脱ぐ事ができなかった。正確には、尋絵が脱がせてくれなかった。「パンツ一丁でうるつくつもり？」

質問を投げかけた彼女の目が怖かったので、ジーンズは脱がずに上半身だけ裸体をさらし、頭はタオルで拭いただけ。何にしる。

「こんだけすりゃ、何もできねーだろ」

立ち上がり、腰に手を当てた麻生はフローリングで身動きできずにうめく男をせせら笑った。膝を折らせて腕を後ろに回させた上にタオルケットでグルグル巻き。

「げぼっ……こんな事して、いいのかよう」

縛る時に暴れたものだから腹に一発食らわせていた。吐くまでではないにしろ、呼吸は大いに乱れていた。拳を振り上げると、男の身がビクついた。

「ひっ！」

「……女に刃物振りかざしといて、情けねーザマだな」

初めから殴るつもりなどない。女に対し暴力の限りを尽くし、男が現れてからはこの醜態。弱い者イジメ以外の何にも当てはまらない。虫唾が走る。

「あ」

洗面所から、洗ってすっきりした顔をタオルで拭いつつ、リビングの敷居を跨いだ尋絵が立ち止まった。彼女の様子を麻生が訝る間もなく、その足が動く。つかつかつか 一直線に、男を見つめ、麻生の横を抜け、踏み出し続けた爪先は男の腹に食い込んだ。「こえっ！」

男の首と唇が前に突き出る。

「……っ」

尋絵はさらに蹴った。タオルケットで抵抗もできない男の腹を、手加減もせずに2回。

「ヒロ」

彼女の突然の奇行に気圧されていた麻生が我に返り、3発目が放たれる直前に後ろから制止した。

「い……痛い、痛い……」

むせる男を睨み付け離さない尋絵の方は、荒れる息に大きく上下していた。

「殺すつもりかよ」

背中から抱き締め麻生が止めなければ蹴り殺しかねない、それほどまでの殺意と気迫。涙と怯えをもって見上げる男の視線と交わるのも毛嫌いするように、嫌悪するように、尋絵は視線を引き剥がした。

「……この男」

「？」

「昨日、私を殴った客」

「こいつが？」

尋絵の事を思い出したのか、男の瞳が大げさに見開いた。

「……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

……

ひたすら謝罪し始めた男を放置して、とにかく尋絵をソファに座らせる。

「ヒロ。あいつをいくら蹴ったところで何にもなんねーんだよ。気持ちはわかるけど、もしもあいつが死んだ事にでもなってみろ。責められるのはヒロなんだぞ？ ヒロにとって、それは割に合う事じゃねーだろ？」

「……ごめん」

目は虚ろになっているものの、冷静さを取り戻した風だった。店、マンション 尋絵に2度も暴力を振るった梨香のストーリーカー。彼

女が敵意を注ぎ込む条件はあつて余りある。一時の衝動を駆り立てる要素を、男は持ちすぎた。

尋絵の頭を撫でてやって、問題の男に向き直った。

「改めて。こんにちは、ストーカーさん」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

未だ繰り返す彼の前で、どつかとあぐらを掻く。嘆息した麻生は、デッキから取り出しておいたカセットを男の眼前で示した。

「これはどういう事？」

「ごめんなさい……」

「いつからこんな事してた？」

「ごめんなさい……」

「なあ」

「ごめんなさ」

「俺にも蹴られてえか？」

「っ」

口を閉ざした男は必死に首を振った。

「だったら質問に答えろよ。いつから盗撮してた？」

「……エリカの、誕生日」

梨香の誕生日を麻生は知らない。

「何日？」

「6月19日」

今日は6月25日。6日前という事は、金曜日。

「どうやって部屋に持ち込んだ？」

「……宅急便で」

そんな怪しげなもん、ベッドに置いとくなよ梨香さん……

「この住所はいつから知ってた？」

「せ……先週」

「どうやって知った？」

「……街で。偶然、エリカを見かけて」

「で？」

「……後を、ついてった」

「気持ち悪い」

尋絵が低く吐いた。

「……そっぴゃ、この部屋にはどうやって入ったんだ？」

マンションの入り口はオートロックだ。住民が自室から迎え入れるか、暗証番号を入力しない限り入る事はできない。尋絵と一緒に部屋に入るとは考えられないし、オートロックの自動ドアをくぐったのも、彼女1人だと、さっき聞いている。となると、この男は暗証番号を知っていなければ、この部屋には入って来れないはず。

「……したっ、下にいた男がドアを開けて入ったからその間に」

……そりゃそうだ。

このマンションに他の住人もいるという基本的な部分をすっかり失念していた。

「じゃあ」

尋絵が、再度男を睨んだ。男の肩が臆病に跳ねた。

「部屋にはどうやって入ったの」

彼女に対してすっかり恐怖心に囚われてしまった男は、恐る恐る、なるだけ彼女の氣に障らないよう慎重に言葉を探った。

「……カギ、閉め忘れてたようで……」

「……」

麻生が尋絵を見た。

尋絵はあさつての方向を見ていた。

「おい」

「……」

反応なし。

第15話：「壊」

「エ　エリカは？」

急に声を張り上げ男の身が跳ねる。体を起こそうとしたのかもしれないが、タオルケットが許すべくもない。

「エリカはどこだよ！　ぼくの愛するエリカは……！」

「なあオジサン」

静かに強く、男の語を遮った。

「オジサンとエリカは恋人か？　店の中だけの関係だろ？　別に付き合ってるわけでもねえだろ」

「なっ何を！　ぼくはエリカを愛してるんだ！」

弱々しかった態度が一変、唾を飛ばして抗議する。

「いっぱい店まで行って！　手紙だっていっぱい書いて！　プレゼントだってあげたんだ！」

純情とは程遠く濁った想い。ノイズの混じった恋心。ねじれた愛情

「愛してるって言ったか？」

赤く濡れた男の瞳を見つめる。

「ぼくはっ……！」

「オジサンの事じゃねえよ」

その想いを。その恋心を、その愛情を。

「エリカはあんたに、一度でも愛してるって言ったか？　ねじ伏せる。」

男の右まぶたが痙攣した。

「……え？」

ぴくっ。

「愛してるって、あんたに言ったか？」
ぴくっ。　ぴくっ。

然自失としていた。

そんな彼に投げられた麻生の問いは、当然のように返る事もなく、虚空に吸収される。

「……そんな状態になる前に聞きなさいよ」

背後で尋絵が毒づいた。

「だよなー」

彼女の言を軽く流したのには理由がある。

麻生はケータイを取り出すとアドレス長を開き、電話をかけた。相手はすぐに出た。

『どうした、コウ。人殺しの自首だったら歓迎するぞ』

しゃがれた声はいつもの調子でからかった。

「ちっげーよ。出世できずにいる遠野のオッサンに手柄をあげようと思ったんだ」

『うれしくて涙が出る言葉だねえ。飴ちゃんをあげよう』

「いらねーよ」

『ははっ！ 俺にくれる手柄ってな、どんな首だ？』

「すーかー」

『シケた首だな。どうせなら連続殺人事件の犯人の首をもって来いよ』

「そんな事件、起きてんのか？」

聞き覚えがなかった。テレビニュースなんて、思えば最近見えない。

『ああ。九州でな』

「遠いよ。どう捕まえんだよ」

受話口でガハハ笑い。あまりの声の大きさに携帯電話を耳から離す。

『まあいい。今回はストーカーで我慢してやる。次はでっけえ首を待ってるからな』

マンシヨンの住所を告げて通話を終える。

「誰？」

「ケーサツ。仲のいいオッサンにこいつの世話頼んだ」

不思議そうに聞いた尋絵へ、魂の抜け切った男を携帯電話で指した。

「あ」

電話をしまい、ふと思い出す。

「こいつの名前って何だ？」

おもむろに麻生が、男のタオルケットを解きにかかったもんだから尋絵は驚いた。

「ちよつとっ！」

「何？」

体を拘束していたタオルケットが解ける

「おおおお！！」

刹那、雄叫びを上げた男が麻生の首に手をかけた！

「アソー！？」

尋絵の悲鳴

ごっ！！

鈍い音。

テーブルにあつた招き猫の陶器をこめかみに打ち付けられ、白目を剥いた男は2度目の失神に倒れた。

「……ひやつとさせんなよ」

ほつと胸を撫で下ろす尋絵に破顔一笑。

「変態にやられるわけないっしょ あ」

きしっ 麻生の右手の中で、招き猫が真つ二つに割れる。

空っぽの中身から何かが落ちた。

「何だこれ？」

麻生の拾い上げたそれは、小型マイクだった。

第16話：「ホテル葉崎905」

葉崎駅の北口には飲み屋が密集する。北口がこうも偏った発展をしたのは、葉崎駅を最寄りとする大学が4つもあるためだった。並んだ店の灯す明かりがあふれる午後8時　今日は金曜日。サークルで、個人の付き合いで、酒を交わし1軒目を消化した赤ら顔の学生たちが2軒目を探し、あるいは早々に帰路に着き、あるいは道端にうづくまる光景。四方八方から鼓膜を打つ騒ぎ声。

酔っ払い天国と化した大通りを、駅の反対方向へ歩けばすぐにそれは佇む。

ホテル葉崎。

居酒屋がまだ軒を並べる以前から街を見下ろす11階建ての建物は、今や居酒屋の中に埋もれ、湧き立つアルコール臭に息苦しうにも見えた。ガラス張りで大通りに接する自動ドアをくぐると、赤絨毯にシャンデリアのロビー。右手奥の受付カウンターにはシヨートヘアの女が折り目正しく頭を下げる。

「いらつしゃいませ」

好印象待合なしの営業スマイルを浮かべる、彼女の前を横切った先のエレベーターで9階まで昇る。揺れを感じさせないボックスで待つ事数秒、緩やかに停止し左右に開くドア。その向こうには、ロビーとおそろいの赤絨毯が直進する。天井に埋め込まれた電球がやわらかい乳白色で照らし出す壁に、木目の綺麗に浮き上がるドアが等間隔に並ぶ様はまるで絵画を思わせるほど、潔癖なまでに完璧だった。どの部屋にもアンティークの調度品が用意され、シャンデリアのあるリビングと、ランタンをイメージしたライトスタンドのある寝室といったレイアウト。夜になれば淡いライティングで、ワインのグラスを傾ければ彼女もウツトリ。海を一望できるベランダもあります。街の光を足元に、2人で夜の海を眺めてみてはいかがで

しょう。目を凝らす事なく、夜闇に煌めく橋が遠くに見えます。曇天時には見えない事もあり。葉崎駅から歩いて10分。1泊2食付、1万6千円から。

さて。

『905』と刻まれた金のプレートを叩く。

が、いくら待てどもドアが開く様子はない。もう一度ノックしても、やはり誰かが出る気配もない。

外出しているのか？ 怪訝に思いながらドアノブに手をかけた。何の抵抗もなくドアは開いた。

不用心極まりない。これでは誰が入って来るか知れたもんじゃ……頭をよぎった最悪の結果にはつとしたが、すぐに消えた。室内に入っただけのバスルームからシャワーの音がする。なるほど、これではノックに出る事はできない。ノックが聞こえたのかも怪しいところだ。

ってゆーか、カギ開けたまんまでシャワー浴びんな。

驚かせてやろうと思い、音を立てぬよう鍵を閉め、忍び足で奥に入る。リビングに抜けると果然と立ち尽くした。まず目に飛び込んだのは、コンビニのビニール袋や空のカップラーメンやオニギリの袋の散乱した木製のテーブルだった。銀の燭台は本来の位置であるテーブルの真ん中から、足元に移動している。暗く室内を反射するテレビにはゲーム機が繋がれ、コントローラーの伸びる安楽イスの周りにはゲームソフトのケースたちがひしめいた。アンティークである事が誇りのソファに至っては、Tシャツやらトランクスやらジーンズやらが乱雑に……

……トランクス？

がちゃ。背後でドアの開く音。頭の中を整理できぬままに振り返った。

「あー、スッキリした」

下半身を巻くバスタオル意外何もまとっていない男が、濡れた頭をタオルで拭きながら現れた。細身ではあるが鍛えていると推測で

きる筋肉。考えるより先に身構えた。

「だっ誰だ!？」

がっしがっしと髪をめちやくちやに拭いていた手が止まる。バスタオルを少しずらした男は、覗いた右目でこちらを窺った。

「……ああ、あなたがコースケさん？」

何もかもを面倒臭く感じているような口調だった。それよりも、名前を知っているという事実には戸惑った。

「てめえ何モンだ!」

怒鳴る。男は大した反応も示す事なく、ゆっくりとタオルを外した。どこからでもかかって来いと身構えたのだが、半乾きの茶髪の男は空咳をひとつして、短く答えた。

「俺もコースケなんだわ」

「……意味わかんねーし」

麻生浩介と名乗ったその男は、一通りの説明をした後、おもむろに尋ねた。

「タバコある？」

「切らしてる」

「たしか買ったよーな気が」

頭にタオルをかぶったまま、無造作に散らかったコンビニ袋を漁り始めた麻生を、所在無く眺める。

「おつ。あつたあつた」

袋から未開封のタバコを取り出し早速くわえた彼は、次いできよるきよると辺りを見回した。

「ほらよ」

「お、あながと」

放り投げたジップで火を付け、深く深く息を吸う。実にうまそうに紫煙を吐く男だと思った。

「……で、今の話は本当なのか？ 梨香が刺されたって」

「井延さんに対して、そんな縁起でもねーウソつくと思う？」

語調は真剣でも身に着けているのはバスタオル1枚。

信じるに値するのか、本気で迷った。

「こんなナリだから信じらんねー？」

心を見透かすように言ってから、どうしてか苦虫を噛み潰す。よくわからない男だ。

「……梨香が刺されたなんて」

鼓動が増して胸が苦しい。眩暈もする。ソファに重なる服の上から腰を下ろした。

「何か冷たい物、ってもこれしかねーか」

テレビのとなりで壁に寄り添う小型の冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、麻生はそれを放り投げた。

「ありがとう」

「飲めば少しは落ち着くだろう？」

受け取ったミネラルウォーターはしっかり冷えていて、喉を程よく刺激して食道を流れる感覚が気持ちいい。汗ばんだ体と乱れる思考を落ち着かせるのには最適だった。

「話は、わかった」

ペットボトルの半分近くを喉に流し込み、麻生を見つめる。窓の向こうを眺める彼はビールの缶を口にしていた。

「何者にか知らねーが、梨香は刺されて大東病院にいる。だが、その刺した野郎は組のモンじゃねえ」

「組長の話だとな」

「そいでもって、病院にいる梨香を守ってくれてるって事だな、あんたが」

「そういう事」

「あの野郎じゃねーとしたら……」

梨香を刺したのは。

「……誰だ？」

「ああ、それなら問題ない。もう捕まえた」

至極あっさりと応えてくれた。おかげで疑問も不安も払拭。代わりに、何とも無駄な事を呟いたという疲労感を覚えた。

「……それ以前に、どうしておまえはここにいった？」
根本的な質問を口にする。

この部屋は梨香の身の安全を確保するために用意したものだ。梨香が病院にいる事は信じられても、麻生という男がここにいる現状が理解できない。テーパールのビニール袋を見る限り、今日や昨日からいる様子とも思えない。それ以前に、タバコを見付けられなくなるほどにビニール袋を放置するな。

「あんたが姿を消して、今日でちょうど1週間。梨香さんに会いに来る頃かと思つて、2日間ほど張つてたつてだけ」

窓際から安楽イスに移動した麻生は、散らかったケースを足でどかしながら、イスを井延と向かい合わせた。

「もしも生きていれば、必ず恋人の所へ来ると思つてたんで」

「もしも来なかつたら、そんな時はどうしたんだ？」

「組長のとこに直接乗り込む」

イスに座り、事も無げに言いのけた彼を一笑に付す。

「バカか？ 半殺しにされるだけだ」

「もう殺されかけてるし」

「はあ？」

見たところ、麻生の体には傷一つ見当たらない。

「虚勢張りやがる前にゴミ片せよ」

「……明日、片そうと思つてたんだ」

目が泳いでいる。

「はっ」

失笑してやつた。

「なあ、井延さん」

「話逸らすな」

「わあかったよ！ 今片すよ！ 今すぐ片付けますー！」

いきり立った麻生が立ち上がった拍子に、バスタオルがはらりと。

「あ」

「……とつとと履きやがれ」

手近にあったトランクスを、慌てて前を隠した麻生に放ってやる。

「きったねーモン見せやがって」

「うるせーよ」

かくして、トランクス一丁でテーブルのゴミを片付ける麻生の姿があった。

第17話：「満足 怪訝 驚愕」

「なあ、井延さん」

イスに置かれたままのタバコを、勝手に吸っていた井延が顔を上げた。

「どうしてあんたは逃げるハメになったんだ？」

「俺が会長から受け取ったもの、それがほしいんだよ」
「会長？」

ゴミをビニール袋に入れる麻生の手が止まったが、またすぐに動き出す。

「ああ、タケさんか」

「知ってんのかよ？」

仏頂面でゴミを片付ける麻生を驚き見つめる。どこからどう見たって井延と同じ側の人間ではない。学生ほどの年齢の、ただの男だ。ましてや会長はアレであるし、こんな平凡な男との接点などあるはずがない。

「受け取ったって、何を？」

「教えられねーよ。ただでさえ梨香の事で巻き込んでる見てーだし、これ以上首突っ込む事もねーだろ」

言ってから、はたと考えた。

「おい」

「何」

「てめー、梨香に手エ出したりしたらブツ殺すかな」

「人の女に手エ出すかよ。考えるだけ損だ」

「そりゃそうだ。ゴミもともに片付けられねえような男に、梨香が体を許すわけねーし」

笑ってから、ふと思う。

「おい」

「次は何だよ」

「まさか、力づくで梨香を……」

「だあからあ！ そんな事あ一切してねーつつてんだろ！」

声を荒げた麻生が袋でテーブルを叩いたせいで、せっかく集めたゴミが宙に舞った。

「……あーあー」

テーブルから足元にかけて落下したゴミをげんなりと見下ろす麻生は、見ていて滑稽だった。

「けどよー、井延さん」

テーブルに屈みゴミを拾い上げる彼を見ているのも飽きた。ゲーム機と並んだりモコンを手に取りテレビを付ける。バラエティ番組だった。

「会長が、どうして井延さんに託したんだ？」

「無難だつて感じたんだろ。それに、社長を良く思つてねー人間の1人でもあつからよ。俺に渡せば社長の手には行かねーって事だ」

画面の中では、気ぐるみを着たタレントがプールでジタバタと大袈裟なまでに溺れていた。スタッフの笑い声が聞こえる。麻生の声が重なった。

「でもバレた」

「そう。それで今や逃亡生活よ」

「誰にバラされた？」

「俺」

「は？」

「酒に酔った勢いで」

「……ダメじゃん」

「んな事あわかつてる」

頭を抱え、井延の顔が苦渋に歪む。

「わかつてんだけどよ……秘密つてのは、酔うと誰かに話したくなるだろ？」

「なんねーよ。なるんじゃねーよ」

「トランクス一丁のゴミ拾いが」

「そーゆ事言うんですかあ？」

麻生の語気が一気に弱々しく萎んだ。

「何にせよ、そんな時いた誰かがチクったんだ」

ふうん　麻生の鼻が鳴る。息を吸う、空気のコスる音がした。

「最初から渡しちまっとけば、すべては丸く収まってたんじゃねーの？」

「おめーなあ……」

抱えた頭を上げると、あれだけ散らかっていたゴミがキレイになくなっていく。

「梨香さんそこから離れる必要だってなかったんじゃねーの？」

ゴミでパンパンに膨らんだ袋の口をキュッと縛る麻生。

「……片すの早えな」

「本気出せば早えのよ」

「最初っから本気出しとけよ」

それには応えず、麻生の放り投げた袋は綺麗な弧を描いてゴミ箱へ吸い込まれた。

「今からでも、返しに行けば解決するだろ」

「簡単に言ってくれてんじゃねーよ」

井延の口調が荒くなる。

「じゃあ、いつまで逃げてんだ？」

睨みを利かせた視線を受けても動じなかった。

「明日か？　１年後か？」

「社長に渡すわけにはいかねえんだ」

「だったら俺に預けろ」

何言ってるんだ？

「は？あ？」

素っ頓狂にも程がある。身の程もわかつちやいない。酔狂にしたりして笑い飛ばせもしないし、ジョークにしては悪趣味だ。

「絶対、悪いようにしない」

麻生の目は真剣だった。

生じた沈黙に割り込むタレントの悲鳴とスタッフの笑い声。
会長を愛称で呼ぶ男。

麻生浩介。

考えがあるのかバカなのか。

井延を真っ向から見据える彼の目は。

「……くっ」

どうして吹き出したのか、井延自身にもわからない。

「わかってねーな」

どうしておかしさが胸から湧くのか。

「これ以上首を突っ込むな」

「それがさあ、もう十分突っ込んでんだよな」

腕組みした麻生が困り果てたように首を振る。何を言っているのかさっぱりだったが、決定的な事実を突き付けてやれば大人しくなるだろう。

「麻生。それでもお前に預ける事はできねえよ」

「何で」

「俺の手元にそいつがねえんだよ」

両腕を大きく広げて示してやる。

「俺が捕まった時のために、コインランドリーに放っちゃったよ。」

誰のもんだか知らねえヤツの洗濯物の中にだ」

予想通り、予定通り　麻生の目と口が丸くなった。

「……………あいたー」

失望の念に手の平で額を叩いた彼の反応を、満足のにじんだ笑みで眺めた　のも束の間。

「わかった。井延さん　ぜつつつてー捕まるんじゃねーぞ」

「……？」

決意を瞳に宿した麻生を前にして、満足は怪訝に取って代わった。
「そのカギなら友人が持つてる」

カギだなんて一言も言っていない　怪訝は驚愕に至った。

第18話：「葉巻Smoking」

困った。

困り果てた。

麻生は胸中で独り言を呟き、ひたすら前方へ投げ出していた歩を止めた。数にして5、6歩。距離にして3メートル弱。病室の前ではあの細木が、備え付けの長イスを無遠慮に陣取っている。いつも通り仏頂面で、腕を組み、最小限に首を動かして麻生を見た。

「……………」

特に何かを言ってくるわけでもなく、また細木は正面の壁に顔を向けた。無視というよりも、さほど問題ではないといった拳動だった。

困った。

胸中で繰り返した果てに、気まずさを脇に押しやった麻生は声をかけた。

「こんにちは。右手、大丈夫？」

腕組みする細木の右手には白い包帯が巻かれている。それに至る直接的な関係者として、麻生は気遣ったのだが。

「……………」

細木は何も言わなければ、一瞥もくれなかった。気まずさが手元に戻った。

しかし、怯むわけには行かなかった。勇を鼓舞す。

「……あのさ、病室に入れてもらえねえ？ 何するってわけじゃないくて、タケさんを見舞いてえんだけど」

「……………」

沈黙。

「面会謝絶ってわけじゃねえんだろ？ 5分でいい」

「……………」
続、沈黙。

右手の平を突き出して強調した自分と、この状況がバカバカしく思えた。

「……もういい。通るぞ」

麻生は再び歩を進めた。

1歩、2歩、3歩、4歩

「それ以上進むな」

5歩。

細木の正面で麻生は止まった。目だけが見上げるせいで、睨み付けているように感じる。ひょっとしたら睨み付けているのかもしれない。

「医師と社長以外は通せない」

低く空気を震わせる声音には、有無の発言を許してくれそうな隙がない。

「見舞いに来ただけだったのに？」

眼力だけで相手を縛る事ができるのであるう気迫に、麻生は抗った。右手にぶら下がる、包装されたフルーツのカゴを掲げて見せる。

「そいつは俺が届ける。おまえは帰れ」

「顔を見に来ただけなんだって」

「帰れ」

けんもほろろに繰り返す。

まったくもって、取り付く島もない。勅使河原が手を回しているだろうと予想はしていたが、よりによって細木を部屋に置くとまでは予想しなかった。勅使河原のとなりが細木のポジションだと思い、顔を合わせる事はないだろうと高をくくっていた。

正直なところ、麻生はこの男が苦手だった。無愛想どころか、よくできたお面を被っているかのように表情の変化が欠如し、発する言は短い。

要は、コミュニケーションの取りにくい相手なのである。

表情が動けないから、感情がつかめない。短い言葉は義務的で、細木自身が見えて来ない。いつだって我が道に猪突猛進な幸輔とは

異なり、相手を見てから次の行動につなげる性分には苦手なタイプ。相手の出方が皆目見当が付かないため、どう出るべきかが見えない。次の言動につなげない。

出直すしかねえか。

お手上げだった。

力で押そうとしたところで、細木の腕力は一昨日、身をもって知っている。正面から向かったとしても、簡単に投げ飛ばされるのが関の山。強行突破は目に見えて無謀だ。

だが。おめおめと引き下がるわけには行かない。

「……タケさんの様子は？」

「……………」

「容態くれえ教えてくれてもいいだろ」

「教える義理もない」

「赤の他人つてわけじゃねえんだ」

「俺にとつては赤の他人だ」

麻生の堪忍袋の尾が、音を立てて細くなった。

「あんたよお」

「はい、はいはい」

一歩踏み出した麻生が首を回す。階段を昇りながら、ぱんぱんと手を叩いていたのは勅使河原だった。

「そんなにカッ力したらダメだよ、麻生ちゃん」

くそつ 閉じた唇の中で舌打つ。今この時、最も出くわしたくない人物は相も変わらず白のスーツで、目元に微笑を浮かべて、麻生に歩み寄った。

「せっかく見舞いに来てくれたのに悪いんだけど、会わせるわけにはいかないんだ」

タケさんの容態が芳しくないのではなく、勅使河原の勝手な都合なのだと、軽薄そうな細目から確信する。たかがドア1枚だ。勅使河原と細木の手をかくぐって蹴破るくらい いや、蹴破るのは良くない。閉じこもる事ができなくなる。内側から施錠してしまえ

ば　そこまで考えて、細木を見た。

ダメか。

いまだ麻生を睨め上げる細木ならば、施錠したドアを破るなど容易に違いない。

「……振り出しに戻る」

「何？」

「いや。独り言」

諦めて、カゴを押し付けた。

「ありがとう。ジイさん、フルーツに目がないからね」

きつと喜ぶよ。そう言つて、勅使河原の手から細木に渡るカゴを、煮え切らない思いを胸に麻生の目は追った。

「ちよつとだけ、時間いい？」

勅使河原の身が翻る。胡乱に眉をひそめた麻生は肩越しに振り返り、サギ師な微笑をくれた。

「約束について、話がしたいんだ」

庭に出た2人は、適当なベンチに腰掛けた。まだ南中に達していない太陽が煌々と照らし出す芝生が微風に揺れて、視界で青々と躍る。日当たりの良い場所に置かれたベンチは座ると尻に温もりを感じ、多少の不快感につながったが　となりの勅使河原は涼しい顔だった。

その薄い唇に葉巻を挟んだ。

「で、だ。盗人は見付けてくれた？」

煙まじりの質問を吐く。

「そんな簡単に見付かるわけねえだろ」

早速ウソをついた。盗人　つまるところ井延耕佑は、ホテルで息を潜めているはずだ。

『部屋から出てうるちよろすんなよ』

三雲興会の人間に見付かったら厄介になると釘を刺した麻生へ、嫌味なまでの笑みを作った井延は、麻生のまとめたコンビニのビニール袋をせせら笑った。

『安心しろよ。メシだつてルームサービスで事足りる』

思い出してみると、改めて腹立たしい。

貧富の差なんて大っ嫌いだつ。

勅使河原に見えないように下唇を噛んだ。

「あいつは、どこに行つたんだろうね」

小さな呟きは独り言なのか判じかねたが、聞こえなかった振りを
して彼の横顔を盗み見る。麻生と同年代の人間が葉巻をふかす姿は、
見慣れないという事も手伝つて、どこか違和感を抱かせた。

「吸う？」

視線に気付いた勅使河原が吸い口を差し出して来たが、遠慮して
おいた。

「俺はこつちで十分だ」

ポケットから出した、しわくちゃなソフトケースからタバコをく
わえる。カキンッ 勅使河原の取り出したジッポが硬質な音を立
て、麻生のタバコを焼いた。

「あんがと」

「どーいたしましてー」

カキンッ 再び硬質な音を立て火を閉じ込めたジッポは、スー
ツの内ポケットに吸い込まれた。

「細木さん、つつたつけ、あの人」

「図体でかくても細木」

勅使河原お気に入りのフレーズのようにだった。

「手、大丈夫なのか？」

「あれくらいの傷、大した事じゃない」

無感情な言葉を微風に乘せた彼は、ふんつと息を鳴らした。彼の
狙いを定めたナイフが麻生の右目を射抜かなかった事が不満なのか
落下するその刃をすんでのところで止めた、細木が気に食わないの
か 次いで放った細木の言葉が腹立たしいのか。

「社長。これは……こんな事は、しちゃあいけません」

すべてひっくるめて勅使河原の機嫌を損ねていると考えるのが妥

当だろう。

麻生にしてみれば右目を失う事が避けられて万々歳なのだが、刃を素手で握り止めたために皮膚が裂け、赤い雫が刃を伝う光景を目の当たりにし、万々歳という気も失せた。切っ先に流れ着いた雫はすぐに膨らみ、反射的に閉じた麻生のまぶたで潰れた。

あの感触を思い出し、右まぶたをこする。

「三雲興会は、井延の行方はつかめてねえの？」

「つかめてないんだよねー」

「人はいるんだろ？」

だらしなく開いた勅使河原の口から紫煙があふれる。つまらなそうに麻生に流し目を送って、背もたれに体重を預けると空を見上げた。

「人はいても、使えないんじゃない意味がない」

どうやら、彼の腹の虫を動かす要素は他にもあるらしい。大した興味も湧かないが。

「へー」

「そ。無関心が正解。麻生ちゃんは井延を探してくれればいいだけ」
先程からずっと気になっていたのだが。

麻生は切り出した。

「……いつのまに『ちゃん』付けになつてんだ？」

「格上げ」

「何の」

「友情度数」

「何だそりゃ」

一笑に付す。

「じゃ、井延が何しでかしたのか、教えてくれないんじゃないかね？」

「井延を連れて来たら教えてあげる」

友情度数が上がったんじゃないのか 反論は先を越された。

「信頼度数はまだまだだからね」

微笑う彼の基準がつかめない。

第19話：「病院内で騒ぐところなります」

入院患者たちが起臥を共にする病棟の1Fには売店がある。ガラス罵詈で囲われた商品棚のレイアウトをのんびりと歩く幸輔は、各種取り揃えられた商品の豊富さに、しきりに感心していた。

うわっ。

うっかり女物の下着の並ぶ棚に挟まれてしまい、うろたえる。足早に棚を抜け、雑誌コーナーに逃げる。下着類は別で扱えよ。突然の出来事で手放してしまった平静を、適当に手に取った雑誌をめくる事で掻き集めようと試みた。

女物のファッション誌だった。

おいつ。

狼狽するにも限度つてもんがあるだろう。自分自身に突っ込んで、改めて雑誌を選んだ。

にしても。

7割方落ち着きを取り戻したところで、再度店内を見回す。ショッピングストアほどではないにしろ、スーパーに比べてもまだ狭いのだが、それにしても売店と呼ぶには広い空間を抱え込んでいた。飲食物、雑誌、衣類、生活用品……ポータブルゲームまでも置いてあるのだから驚く。ともすれば退屈でしかない入院生活、せめて楽しく時間を費やせるようにとの配慮なのだろうが……何とも。

店に入った時、レジカウンターに貼られた『現像承ります』のポップな文字を見て、激しく突っ込みたいのを必死に抑えたほどである。

コンコンッ。

適当に選んだファッション誌を思いの外熱心に読んでいた幸輔は顔を上げた。ガラスを挟んだ向こうに、忍足がいた。軽く驚いても会釈は忘れない。細く綺麗な指先で、ちよいちよいと手招く忍足に

従ってロビーに出た。

「彼女、明日には退院できるわ」

開口一番、忍足が言った。彼女という代名詞が梨香を指しているのだとすぐに思い至り、幸輔は顔を輝かせる。

「本当ですかっ？」

トーンを調節できずに大声を響かせるほど。通りすがりの看護師に睨まれた。

「病院内は静かにしなさい」

冷淡な忍足に頭を下げる。

「すみません」

「あとは自宅療養で十分よ。もちろん診察には来てもらうけど、普段通りの生活に支障はないでしょう。本人にも言ってるけど、仕事は完治するまでは出ないように。生活に支障を来さないって言うても、傷が完全に閉じたわけじゃないから」

続けて、梨香の傷がどんなものだったのかを説明してもらったが、幸輔の耳には一片も引かからなかった。

梨香が退院する。とても喜ばしい事だった。そうなると見張り役としての幸輔のポジションはどうなるか。梨香を刺した犯人はまだその尻尾を出していない。幸輔の見張り役としての任期は、犯人が尻尾を出すまで。

つまりは、見張り続行。

@梨香・S HOME。

……いやーははは。

「……退院がうれしいのはわかるけど」

忍足が不気味っぽく幸輔を見ていた。

「どうしてデレツとして……」

彼女の言葉が切れ、嘆息が漏れる。

「完治してないんだから、当分セックスは我慢しなさい」

たっぷり3秒、幸輔フリーズ。

「セックスっていうのは、体にかかる負荷を考えると……」

「ちつ違っ！」

「最近の若い脳みそって、9割方セックスよね」

「NO！」

混乱のあまり英語。

「責めてるわけじゃないわ。ただ、彼女を怪我人として労わってあげて、って言ってるの」

「誤解です、先生！」

「何が」

「なんつーか、いろいろと！」

先の『彼女』が代名詞ではないのだと気付いて、幸輔は抗弁しようとしたのだが。

「　　おいしい！　待て！　ちよっと待て！」

突如騒然とロビーに響き渡った男声にびっくりして、入り口を振り向いた。

「うるっさいな」

低く呟いた忍足の舌打ち。

入り口の自動ドアにぶつかりながら飛び込んで来たのは、麻生だった。焦燥に駆り立てられた彼は、目の前を悠然と歩く男に追い付くとその腕をつかむ。立ち止まった男は迷惑そうに、苛立った顔を麻生に向けた。スーツに柄シャツ　　男の顔に、幸輔は見覚えがあった。

「おめえ、何のつもりだ！？」

「あ？」

「どうして来てんだよ！」

「来ちゃわりいのかよ」

「つたりめーだろ！」

わめく麻生と睨み付ける男。ロビーにいた人間の視線を一気に集める中、男が麻生の手を振り払った。

「梨香に会いに来るぐれえ、いいだろ？」

「それが良くねえんだ！」

衣擦れの音に幸輔は背後を見た　忍足がいない。

「わけわかんねえよ。あ、もしかして手エだしたか？　あ？」

「出すかよ！」

姿を探して　すぐに見付けた。

「隠したってすぐにわかんだぞ？」

「隠してねえし！　隠す事もねえし！」

脇目も触れずに言い合う2人の所へ、忍足は歩み寄っていた。

「悪いけど。病院内で騒ぐのなら早々に出てって」

「あ？　俺は見舞いに来ただけだ。出てくならお前だろ、麻生」

「井延さん、あんたが見舞いに来るにはまだ早えつつってんだ」

割って入った忍足を挟んで、双方睨み合う。

「まだ早え？　は？　何言ってんのかさっぱりだ」

「それを説明してやつから外出ろ」

「麻生……そこまでして俺に会わせねえつもりか」

「あんたはまだ外に出ちゃいけねえだろうが」

「手エ出したんだろ？」

「そういう話じゃねえんだよ！」

「手エ出したから、俺と梨香を会わせたくねえんだろ？」

「しつけないぞ！」

「どんな手でオトしたんだ？　俺が死んだとでも言ったか？」

「言つかよ！」

「このゲス野郎！」

「はい。じゃ、続きは外で、って事で」

と制した忍足の白衣を、男が引っつかむ。幸輔は固唾を飲んだ。

「あんた、しゃしゃり出てんじゃねえぞ」

彼女に顔を近付け睨み付けた男の首を、忍足の手がつかみ

い指が頸動脈を確実に圧迫した。

「ぐっ」

男の枯れた呻き声。

「あの、先生……」

うつろたえる麻生。

「医者なめてんじゃねーよ。てめーの息の根止めんのなんて、ワケねーんだぞ？　ここは治療が必要な人のための場であって、騒ぎ立てていい場所じゃねーんだ。医者として患者を守る側にいる以上、あんたらみてーな人間を迎え入れるわけにはいかねーんだよ。わかつた？」

凄みを利かせた彼女の視線に射抜かれ、壊れたオモチヤのように麻生は、こくこくと頷いた。首をつかむ腕を男がタツプする。

「見舞うのはいい。患者にとってうれしい事だからよ。ただ、2度も騒いでみる、次は実行使で排除する事を、その足りない脳みそに刻み込んどけ」

この先何があってもこの人に齒向かう事だけは避けよう　幸輔は心に誓った。

？

ふと何かを感じ、彼は周囲を見回した。騒ぎを聞き付けたガードマンが、幸輔の背後から駆け抜ける。成り行きを見守っていた患者看護士たちの表情に浮かぶ安堵。ロビー内の張り詰めた空気が緩んだ。隅に身を寄せていた老人が拍手する。やがて拍手はまばらに広がり、すぐに渦と化した。

患者、看護士、売店の店員まで　皆一様に拍手を贈る中心で、麻生はバツの悪い顔で、首を解放された男は咳き込んで、忍足は無表情にガードマンに接していた。

彼女の人徳が拍手を生んだのか、単に野次馬のはやし立てなのかは区別ができない。しかしこうして現実に拍手は巻き起こっているし、その反面、この状況をつまらなそうに見つめる数人の医師たちもいた。

これが、忍足自身を取り巻く縮図だと感じた。

先程感じた粘着質の気配は、消えていた。

第20話：「HIMAYまでのCount 15」

「…………あいつ、何者なんだ？」

「医者」

「ドクター」

8分後には井延、麻生、幸輔の3人はエレベーターで昇り、11分後には梨香が涙ながらに井延に抱き付いた。唐突な離別の再会は、かくして果たされたのだった。

「会わせちゃって良かったの？」

抱擁し続ける2人を残して、麻生と幸輔は病室を後にした。ドアを閉めて、麻生に問う。

「三雲興会の人間に見付かりでもしたら、どうなるわかんねえよ？」

「ま、そんな時はそんな時。　　実はさ、さっきまで社長と話してたんだ」

「社長？」

「三雲興会の」

幸輔の目が点になる。

「…………いつのまに」

「そのまんま社長は帰ってったから、井延さんを力づくにでも帰す方が、ひよつとしたら危険なんじゃねえかって考えただけ。もしかしたら出くわすかもしれないし」

「…………よく鉢合わせにならなかったね」

「まったく。井延さん見付けた時、本気で冷や汗かいた。まさか病院にまで来るとは思わねえだろ」

2人はそろってトイレに入った。3つ並ぶ小便器の両端で仁王立ち。

「幸輔」

「ん？」

「梨香さんの事、好きだろ」
ぎくつ。

「ひと目惚れしやすいヤツだからな、おまえ」
恥ずかしさが麻生の顔を見させない。心臓が高鳴って落ち着かない。

「う、うるせい」

ふてくされた幸輔の耳までが赤くなっていた。

「ま、今回はあきらめた方が」

「わかってるよ」

ファスナーを上げた麻生の言葉を乱暴に掻き消す。彼の視線を感じながらも、幸輔は見つめ返す事もできずに、

「わかってる」

語を、ただ繰り返した。

「なら、いいけどよ」

麻生の気配が動く。小便器のセンサーが反応し、水が流れた。

ブブブブ……！

「お」

手を洗う麻生のポケットで携帯電話が揺れる。彼は濡れた手を振って水分を飛ばしてから電話に出た。

「もしもし？」

『おう。俺だ』

用を足し終えた幸輔にまで聞こえる声は、久しぶりなものだった。
「わり。今病院なんだ。公衆電話からかけ直すよ」

『病院で電源入れといてんじゃねえよ』

麻生は小言ごと電話を切った。

「遠野さん？」

「そう。ちよつくら電話して来る」

「行つてらっしゃい」

手を洗いながら幸輔は、だるそうにドアを開けた麻生を見送った。
ぱたん。

軽い音を立てて閉まるドア。シンクを流れる水。左回りで排水溝に流れる水。

静かにため息を漏らした。

ひと目惚れしやすいヤツ　麻生の言葉が耳朵で反響する。

わかつてる。

そんな幸輔自身の厄介な性格も、それを麻生が責めているわけではない事も。

桜田梨香と、井延耕佑。

お似合いの2人じゃないか。

井延が病室のドアを開け、梨香が振り向いた時に見せた、笑顔から泣き顔への転換。すぐにベッドから飛び出し、彼女の足に引つかかったシーツが床でほどけ、足をもつれさせたその身を井延は優しく抱き止めて。

強く、抱き締めて。

「……あんなの見せ付けられちゃ、出る幕ねえじゃん」

蛇口を力いっぱい閉めて、幸輔はドアを押した。

「おっと」

「あっと」

開いたドアの向こうに、本人がいた。

「ごめんなさい」

「いやいや」

ぽんっ　井延は幸輔の肩を叩いてすり抜けた。そそくさと退出しようとした背中に声がかかる。

「なあ」

顔だけ振り向いた。

「おまえ、梨香のヒマな時間潰してくれたんだってな」

井延が笑った。

「ありがとよ。楽しく過ごせたって言うってたぞ」

「どういたしまして」

うまく笑い返す事ができたか自信のないまま、幸輔は退出した。

あっちゃー！

自然、病室に向かつてしまった足を止めた。ドアを目の前にして、どうしたもんかと悩む。

- 1 ・ごく自然に入る
- 2 ・一発芸をかます
- 3 ・井延が戻るのを待つ

……一発芸って。

結局、部屋に入る事はやめた。野暮に思えたし、何より、幸輔の胸を締め付ける何かがまったく消えない。たまには手加減をしてほしいものだ。

庭にでも出よう　　そう思った途端、下腹部に鈍痛が走った。

「うっ」

へっぴり腰で腹を押さえた。目を閉じれば、大腸が収縮する様子がまぶたの裏に投影される。体内の何かが肛門を荒々しくノックする。

ちつとは空気読めよ！

己が身をこれまで憎んだ事はない。18年間、よろしくやって来た体はここに来て居丈高に刃向かった。

「つくそっ」

唾棄するにも迂闊に腹に力を込められず、情けない弱音にしかない。軋み立てる排泄欲求で制限された力を幸輔は足に向けた。

全身系を集中　　！

肛門に力を込め、脳内でカウントがスタートする　　！

残り15秒　　爪先が地を蹴った。低い姿勢から空気抵抗をくぐり抜ける。すれ違った女看護師が、彼の必死の形相にぎょっと道を譲る。廊下の患者たちをジグザグに、巧みに身を翻しよけながら疾走。

残り10秒　　廊下を駆け抜けた足にブレーキをかける　　キキ

イツ！ リノリウムの床を引っ掻いたシューズが滑る。横に流れる前髪越しに睨み付けたドアを引くと同時に跳び込　ドンツ！

「大丈夫？」

中から現れた清潔感漂う白衣に衝突し思わず尻もちを付いた。

カウントが2秒早まった。

「大丈夫ですっ」

差し出された手など見えていなかった。跳ね起きた幸輔は白衣をよけて、今度こそドアに跳び込む。

残り5秒　サイレンが回り警告音がつんざく。脂汗が額を覆う。トイレには個室が3つ　手前の2つは内側にドアが開いていた。

和式は不可っ！

なけなしのポリシーでもって奥の個室に向かう。先程トイレに入った時と同様、ドアは閉じていた。このトイレは洋式で、和式とは違いドアが外側に開く。そして大概、そのドアは閉じっぱなし

そこまで考えて導き出される答えは　すなわち。

ドアが閉じているからといって使用中とは限らない。

力む肛門が痙攣する中、脳内でGO！サインが煌々と点灯　幸

輔は力いっぱいドアを開いた　！

「……………えっ……………」

井延が、いた。

「……………え……………」

真っ赤に彩られ、便座で脱力した井延が。

第21話：「HIMAY、bloodに塗れた朱」

公衆電話は、エレベーターホールに備え付けられていた。色褪せたような緑色をした電話はテレホンカードも使えたのだが、

「そんなもん、持ってねえし」

持ち歩かなくなって久しい麻生は、財布を開いて小銭を探った。

10円玉を投入し、番号を押そうとして携帯電話を取り出す。

「番号なんて憶えちゃいねえし」

遠野の番号を出し、ディスプレイを見ながら番号をプッシュ。

こうしてみると、どんなにケータイに頼り切った生活かってわかるよなあ。

呼び出し音を数えながら、しみじみと思った。

『おつ』

「わり、俺」

『公衆電話じゃなくても、外出りや良かったんじゃねえか？』

「あ……」

正鵠を射抜き貫通した言葉に、今さらながら気付く。

「……次からはそうする」

『はは！』

遠野の豪快な笑い声は、聞いても不快にならないどころか安心感をもたらすから不思議だ。

「ストーカーのヤツ、どうなった？」

『そう、それで電話したんだ』

「そりゃそうだろ」

『あいつ、あつさり自供したぞ。あんまりにもあつさり過ぎて、肩透かし食らった気分だ』

「結構な事じゃねえか。暴力沙汰にならなくて良かったんじゃね？」

『俺にはそんぐらいがバランスいいんだよ』

「何のバランスだよ」

『あっさりした取り調べなんざ、発狂しそうになる』
とんだ刑事もいたもんだ。

「発狂しちゃった？」

『そんなヒマもねえほどよ。こっちが聞く事全部に素直に答えてくれちゃってよ、張り合いもねえ』

はんっ 遠野は鼻で笑った。

『志村良人、39歳。IT系の会社で勤務してんだと。コウ。IT系って何だ？ 系って言うてくくっちまえば何でもカッコイイとか世の中は考えてんのか？』

「知るか」

軽くあしらう。

「梨香さんにはいつから付きまとってるって？」

『去年からだ。風俗店で彼女に世話してもらって、のめり込み込んだんだ。結婚もしてねえし、女の経験も少ねえ。仕事上での接客だったとはいえ、志村にとっちゃそれ以上のもんになったって事だ』

「っへえ」

『梨香ってコが前にいた店の店主からも聞いたんだが、毎日のように通っちゃ指名してたんだとよ。イチズなオモイってヤツだ』

「茶化すなって」

ははっ！ 遠野の笑い声が不自然に途切れた。

「……あれ？」

もしもし？ 受話口からは何の返答もない。

はたと気付いた麻生は口いっぱいに苦虫を頬張った顔で小銭を取り出した。

『長らく公衆電話を使ってねえと、どのタイミングで切れんのか忘れちゃうよなあ』

電話に出るなり、遠野は爆笑した。

「今度は平気だ。30円入れたし」

『それなら安心だ。どうせなら気前良く、100円入れちまえよ』

「釣りつて出るっけ？」

『出ねえよ』

「じゃ、まっぴらだ」

『100円ぐれえでガタつくなよ、コウ』

「根っからの貧乏性なんだよ」

はははは！ 遠野なら世の中の何事も笑い飛ばせるような気がする。

「志村、これからどうなの？」

『ん？ ま、今回は不法侵入と傷害だな コウ。1つだけ、おまえの話と食い違ってる部分があるんだけどよ』

遠野の口調が一変、低く神妙さを帯びる。

「食い違ってる？」

『ああ。志村はな、梨香つてコを刺してねえって言ってる』

「はあ？」

『そのコが刺された時間、志村は会社にいたんだ。裏も取れてる。残業してたんだよ』

梨香を刺した人間が志村だと疑いもしなかった。その志村にはアリバイがある。となると、では…… 梨香を刺した人間は？

「 うわあああああああああ！！ 」

突然廊下を突き抜けた悲鳴に、危うく受話器を落としそうになった。

『どうした？』

「いや、なんか、悲鳴が」

『悲鳴？』

麻生の脳裏に一瞬だけ井延の顔が浮かんで消えた。今の悲鳴は、被害を受けた時に発する種のそれではなかった。むしろ、何か衝撃的なものを目の当たりにしてしまったような。

ばんっ！

どよめき始めた廊下に、トイレから飛び出した人影。転がるように現れたのは幸輔だった。

「い、医者！　この中に医者！　医者はいませんか！？」

「病院だぞ、ここ」

よつぽどパニックに陥っているらしい、地べたにへたり込み声を張る彼は一心不乱。その瞳が麻生を捉えた。すぐるように幸輔が叫ぶ。

「お医者ちゃん！」

「誰だそれ」

「いつ、いつ、いつ！」

引き攣った表情は、決してふざけているとは思えない。ざわり…麻生の胸でやな感触がうごめいた。

「いつ！　井延っさんがっ……！」

トイレを指した幸輔の右手は震え、紅く濡れていた。

『コウ？　何があった？』

手にしていた受話器を、フックに叩き付けた。

第22話：「そこにある悪意」

「お願いされるまでもなく、死なせるわけにはいかないのよ。病院内で人殺しがあつたなんて笑えないでしょ。ここには血液もあるし、設備も整つてる。その上執刀するのは私よ？ それを承知でなお、何かしたいって言うのなら、祈つてなさい」

手術直前でもまぶたの半分落ちた無表情は変化がなかった。毅然と表現するにはいささか頼りに欠ける背中を見送り、手術灯の光をぼんやり見上げる。

「……………」

麻生はどこか現実味のない今をどう受け止めるべきか迷っていた。ついさつき腕をつかんだ人間はすぐに血に塗れ、手術台に乗っている。洋式の便座で紅く染まり、だらりと両腕を下げ、貯水タンクに背中と頭を預けた肢体を目の当たりにした時、世界の境界に立つ感覚を覚えた。

生と死。

それは決して可視のものではなかったが、まるでそこだけ空間を異にしているような、処理のしように困る違和感。五感で感じられる井延の向こう。見えるはずもないのに、麻生は目を凝らした。裂かれた衣服から覗く血肉しか見えなかった。目を凝らした事を後悔した。

そうこうしているうちにトイレに担架が持ち込まれ、井延は便座から引き剥がされた。固まり切らずにまだ流れる血液が、彼の指先を伝って床に赤を描いた。

てっちゃんか、細木か……

もちろん、他の人間である可能性だって否定できない。勅使河原は帰ったのだし、細木はきつと、病室から動かない。三雲興会の間で、井延を知っていれば誰でもいい。

力づくでも病院から引き離すべきだったと、今さらながら後悔した。

「コーちゃん」

呼ばれて振り返る。幸輔が小走りで駆け寄った。

「ごめんごめん。なかなか収まりが付かなくて」

「もう済んだのか？」

「そりやもう、キレイさっぱり。後腐れなく」

「そいつあ良かった」

「体重が2キロぐらい減った気分だよ」

以上、大便トーク。

「井延さんは？」

幸輔は手術灯を見上げ、憂慮の色を浮かべた。

「忍足姉さんが執刀中。大した自信を持って入ってったところ」

「そう」

「幸輔。ちよつくら三雲興会に行つて来るわ」

麻生の発言に、幸輔の憂色が驚愕に変わる。

「どうしていきなり？」

「井延を刺したヤツの面を拝みに行つて来るんだよ」

「……その事なんだけど」

「？」

何やら言いにくそうに、控えめに口を開いた幸輔に麻生は怪訝を覚えた。

「いや、最初つから言えば良かったんだけど、なんてーか、言いそびれたつて言うか」

視線をあちこちへ飛ばしごまつく彼に苛立つ。

「それ、今じゃねえとダメな話か？」

「たぶん、井延を刺したの、三雲興会の人間じゃない」

何言つてんだこいつとあからさまに軽侮した目で見た。

「……は？」

「忍足さんに言われたんだ」

そこで麻生は始めて、林航助という人物を知った。

忍足と2人つきりで話した事を述べ終えた幸輔の肩に、ぽんっと手を置く。

「幸輔」

ドロップキックを放つ。

吹き飛ぶ幸輔。

「そついう事あ早く言ええ!!」

言うが早いか駆け出し、転がる幸輔の体を跳躍。痛覚に顔をしかめながらも慌てて起きた幸輔が後を追う。

「だって話す機会なかったろ!？」

「機会くれえ見付けろ! どうしてさっき話さねんだよ!」

「漏れそうだったんだ!」

下世話な主張。

「バカ! バカバカバカ!」

「ところで! どこ向かって走ってんの!？」

「どうしようもなくバカ!」

「どうせ俺はバカさあ!」

「ちよつと考えりゃわかんذار! その林ってヤツが井延を刺したのはどうしてだ! きつと梨香を刺したのもそいつだ! 刺した理由は!」

「井延さんは……梨香さんの恋人だから?」

階段を駆け上がる。危うく老婆にぶつかりそうになった。

「梨香を刺したらどうなる! どこに運ばれる!」

踊り場で麻生の身が翻る。1秒遅れて幸輔も翻す。彼が言わんとするところがわかった。

「病院!」

葉崎市の有する緊急病院は大東病院しかない。救急車で運ばれるとすれば、ここしかない。

「それが林の計算だったんだよ! 自分の領域である病院にまんまと引き込んだんだ!」

「梨香さあああああん！」

跳び出した3階の廊下に幸輔の悲鳴が轟き渡る。信じられない加速を見せた彼の足はすぐに麻生を追い抜いた。

「速っ!？」

幸輔の目は梨香の病室しか見えなかった。その手がドアノブに伸びる

ばんっ！

「あはははは！」

ベッドの上で、テレビ番組を見ながら手を叩き爆笑する梨香。麻生に気付くと不思議そうな顔をして聞いて来る。

それは先日にもあった杞憂。

どんっ 体に乗せた速度を殺し切れずに、麻生が衝突した。

「おまつ、急に立ち止まるんじゃないやねえよ！」

体がわずかに揺らいただけで、幸輔は何も答えない。呆然と注ぐ彼の視線を辿る。

シーツの乱れたベッドを残し、梨香は忽然と姿を消していた。

「梨香さん……」

「落ち着け、幸輔」

その場にへたり込んだ幸輔の頭に触れ、麻生は部屋に入った。

「まだ、そうだって決まったわけじゃねえだろ。トイレに行ってるだけかもしれねえ」

それが気休めにもならない事だとわかってはいた。簡易棚に積まれているマンガが乱雑に転がる床をよけ、ベッドに寄った。見てわかるほど、ベッドは正位置からずれていた。

腕を引っ張られ、必死に抵抗する梨香の姿が脳裏に投影される。
くそっ。

舌打ち。シーツを苛立ちと力任せに引っ張った。何の重みも持たない布が麻生の視界で舞い コトン 何かが床で鳴った。

第23話：「花婿Frenzy」

腕に抱えた彼女は思いの外に重くはあったが、彼にはまったく苦には感じられなかった。むしろ、愛しい人を傍に置ける喜びに全身が火照り、今にも踊り出したいほどだった。

地下駐車場の空気は外よりも涼しく、彼の靴音が一定のリズムで鳴り響く。白線で区切られたスペースに大人しく納まる車の列は、何の感慨も持たずに彼を見つめた。

やがて彼は1台の車の前で立ち止まった。右手に持っていたリモコンキーを押すと、深い青色を蛍光灯で鈍く輝かせる車がヘッドライトを瞬かせた。となりの車との隙間は十分に開いている。彼女を抱えたまま隙間に入り、後部シートに横たわらせた。胸を上下させ、静かに寝息を立てる彼女の額に口付けた。

運転席に乗り込んだ彼は、ダッシュボードに転がっていたタバコに手を伸ばし、止めた。ルームミラーで彼女を確認する。慣れた手付きでエンジンをかけ、すぐに発車。ハンドルを切って駐車スペースを脱した瞬間、車の前に人影が躍り出た。

「うわっ！」

急ブレーキを踏んだ体が前にのめった。人影が後方に飛んだのをたしかに見た。

「……おいおい」

飛び出したのは向こうだ。ぼくのせいじゃない。向こうが勝手に飛び出して。

責任転嫁の思考を慌てて掻き消す。

ぼくは医者じゃないか。責任追及なんて後でいい。まずは　そう。まずは手当てが先決だ。　思い直した彼は車を降り、ドアを閉めた　その瞬間。

「　　やあ、先生」

胸倉をつかまれ、圧倒的な腕力で背中を車体に押し付けられた。

「な……何？」

状況がわからず瞬きする。車の前から声がした。

「あつぶね。あと少しでもブレーキが遅かったら本当に轢かれてた」

「無茶してんじゃねえよ、幸輔。見ててひやつとしたわ」

「ナイスな演技だったっしょ」

すつくと立ち上がり満面の笑みで親指を立てた幸輔から、麻生は目の前の男へ目を移した。焦げ茶っぽいスーツ姿の男。目立たない程度に茶色く染めた髪の下に、細い指と二重の瞳が並ぶ。見た感じ、イケメン。

「俺の方がカッコイイ」

「は？」

意味がわからず見開いた男の目に、麻生はそれを示した。

「これ、先生のだろ？」

それはネームプレートだった。プラスチックの白い長方形。裏にはクリップ、表には林と記されていた。

「……ああ。どこに落としたのかと思ったら」

「どこに落ちてたと思う？」

ネームプレートを受け取ろうとした男の手をよける。

「返してくれないのかな？」

怪訝を込めた笑顔で麻生を見つめた。

「そいつの病室に落ちてたよ」

麻生の顎が後部シートをしゃくった。

「桜田梨香の病室で、だ。どこに連れてくかなんて知らねーが、彼女を返してもらっぞ」

「ああ」

林が笑った。清々しいまでに涼しく、人当たりの良い、さぞ患者たちに好評を博しているであろう笑顔でもって。

「きみたちは梨香の友だちなんだね」

人に好印象を与えるはずのそれは、しかし幸輔の背中を悪寒となつて撫で上げた。外より涼しいとはいえ、それとは明らかに異なる寒気に鳥肌が立つ。得体の知れない黒い何かが幸輔の前で両翼を広げた。右の顎の付け根が痙攣し頬を引つ張る。

違う。

直感的に悟った。

「ああ、友だちだ。だから返せ」

「あ、きみの声」

林の瞳が見開いた。

「知ってるよ。梨香の家に来てたね。もう1人の女は？ そこのきみじゃあないみたいけど」

幸輔と麻生の顔を見比べる。

こいつか 麻生は確信した。梨香の家で見付けた、招き猫の中から転がった小型マイク。

「梨香の事ならばくに任せてくれて大丈夫だよ。彼女を不幸になんてしない」

まるで麻生の言葉なんて聞こえていない。彼の眉間のシワが深くなるのも構わず言をつなぐ。

「名前を教えてよ。ぼくらの結婚を祝ってほしいんだ」

「ああ？」

「きみの名前は？」

麻生の何かが弾けた。頭は白く体が動く。固く握った右手が林の頬に打ち込まれる はずだった。

じつ。

あれ？

麻生の視界がブレた。林を睨んでいた焦点がずれ、浮遊感。顎で爆発した強烈な痛覚を思い出した時にはもう吹き飛んでいた。

「コーちゃん！」

幸輔の悲鳴が聞こえ どすつ コンクリートに背中を打つ。痛い。

「先に手を出したのはきみの方だよ。これは正当防衛だ」
歌うような林の声音。

「つて」

しかめっ面で顎をさすりながら、麻生は立ち上がった。眼間の林は軽く両腕を開いて言った。

「暴力に訴えようなんて野蛮だよ。いきなり殴りかかれたら、ばくだってつい反応してしまうよ」

変わらぬ笑顔で右アッパーを素振りする。ビツ　空を裂く鋭利な音と、先の、顎で弾けた痛覚が結び付く。単なる医者だと思っていた自分は甘かった。素振りの音、体の軸を揺らさない自然体な構え。ただの医者でない事に気付いた。

「こつ見えても、中学から格闘技をやってたんだ。最近はなかなか体を動かす機会がないのが残念だけど」

「みたいだな。全然効いてこねえ」

格闘技だあ？　麻生に知る由もない。にこやかに笑い続ける医者　接し方を改める必要性があった。

「梨香の友だちを傷付けたくないんだ。初対面だから信頼性に欠けるのはわかるけど、ゆっくり話せばわかってもらえるよ」

唄うように語を紡ぐ林は、己に心酔しているようにも見えた。

「だから今は、大人しく通してくれないか？」

「断固拒否」

「しょうがないね」

一瞬で林は麻生に肉薄する。彼の左拳の軌道上　とつさに両腕で顔をガードした麻生の脇腹を右拳が入った。

「くっ！」

胃が震える。歯を食いしばり反撃のためガードを解いた瞬間、頬を左拳が打つ。

「　もう痛くねえ」

頬で受け止めた体勢から打ち出した拳は林の鼻先を掠めるに留まった。さらに林の懷に踏み込み顎を狙う。

「おっと、危ない」

後ろに重心を移すだけで林は回避した。動体視力もしっかり備えているらしい。麻生がチラリと幸輔を見た。

「よそ見るなんて」

林の拳がその左頬を鈍く鳴らす。

「余裕じゃないか」

次いで右頬を鳴らす。

「」

「何だつて？」

訝った林の動きが止まった。生じたわずかな隙に、麻生の身が沈み彼の腰にタツクル

「ファツクつつつたんだよ！」

どんっ！ 林もろとも車体に突進した。

「ああ！？ 車が！？」

裏返る悲鳴 構う事なく身を翻しざまに林の右腕を取る。

「ケチくせえ事言っな！」

一本背負い 麻生の背で軽々と持ち上がった林はコンクリートに叩き付けられた。

「っでえ！」

硬い衝突音と潰されたカエルのような声が重なった。

「高収入の分際で、車1台でガタガタ わっ！」

勝利を確信していた麻生の腕が急に引つ張られる。体が前のめりに崩れた 倒れ込む腹にめり込んだ左拳。

「うつ」

吐き気を押さえ膝を付いた地面には、すでに林はいなかった。彼を探すため上げた顔を右フックが射止める。視界で星がちらついた。地に手を付いたはずが、麻生は右肩から倒れた。

「さすが、と言うか。ケン力慣れしてるのかな」

やや息の乱れた声をぼんやりと聞く。吐き気で胃の上辺りが気持ち悪い。鼻腔を鉄臭い匂いが横切った。右頬に当たっているコンク

リートの冷たい感触。

「だけど、やっぱりそれはケンカでしかないよ。敵うはずがない。一本背負いには参ったけどね」

林が大きく咳き込んだ。

「……まだ肺がおかしいよ。ったくどっ！」

「がふっ！」

腹部に衝撃。綺麗に磨かれた革靴がめり込んだらしい。喉元まで迫った胃酸を何とか飲み込んだ。鼻の奥が痛かった。

「きみ」

びくっ 林に対して車の陰にいた幸輔の肩が震える。

「梨香を返してよ」

先程麻生のアイコンタクトを受け取った幸輔はすぐに車に回り込み、今まさに梨香を背負ったところだった。

「婚約者から恋人を奪うなんて、ひどい事をするもんだ」

「あんたは婚約者じゃない」

梨香を背に寄せ立ち上がる。車を挟んで、林は微笑していた。どこまでもやさしく、それでいて狂気をにじませる微笑を浮かべていた。

「返してよ」

手を差し伸べたその微笑が、にわかに破綻する。

「返せって言うてんだろ！」

駐車場内に響いた声が長く尾を引いて

カツッ、カツッ。

靴音に変わった。

第24話：「幸輔サイレン」赤」

林のものではなく、幸輔のそれでもなく。

「あゝあ。麻生ちゃん、こてんぱんにヤラれちゃったね」

2人の視線が男声に引つ張られる。

幸輔の左。

林の右側。

エレベーターホールから白スーツが歩み寄っていた。

えっと……誰？

無造作へアに細目。勅使河原という人物を、幸輔は初めて目にした。

「車で来てたの忘れて戻って来たらこれだよ。麻生ちゃんってトラブルメーカー？」

横倒れになった麻生の頭で立ち止まる。

「で。麻生ちゃんをこんなにしたのは、あんた？」

勅使河原が林を見た。

「……引っ込んでろよ、てっしー」

麻生がうめく。

「つれないね。あ」

幸輔の背に梨香を見付けた勅使河原は、ふんふんと数度頷いて、なるほど。1つだけ確認しよう」

人差し指を立て、林に向ける。

「あんたはあのコの何？」

「婚約者だよ」

いつのまにか、林は微笑に戻っていた。

「そいつは変だね。あのコには恋人がいたと思うんだけど。それとも、井延は遊びでしかなかったのかな。あのコも、かわいい顔して罪深いもんだね。いやいや、いやいやいや、ずっと同棲していたは

ずだ。となると、婚約者であるあんたとはいっ会ってたんだろう」

過剰に芝居がかった身振りで言う勅使河原の見つめる先で、林がぼそりと零す。

「……どうもこいつも」

その右手が震えていた。うつむいたせいで前髪が瞳を隠す。

空気が、振動した。

「何だ！　どうも邪魔すんじゃない！　わけわかんねえ事ばかり言いやがって！」

「……てっしー、あっち行つてろ」

「麻生ちゃんは大人数く寝てな」

身を起こすために立てた麻生の腕を足で払う。

「いてっ！」

「婚約者だつて言つてんだろ！」

再び倒れた彼を越え、林が飛び掛かった。

「婚約者だろうが何だろうが、興味ないんだけどね」

後方に跳んだ勅使河原の鼻先で右フックがうなる。彼の右手がスーツの内側に回った。林の左足が大きく踏み込む。つながる右ストレート

捉えた……！

息を呑んだ幸輔の視界で勅使河原の身が沈む。その頭上を紙一重で拳が過ぎた。

どすっ。

勅使河原と林が　すれ違った。

「麻生ちゃんを痛め付けていいのは俺だけだよ」

くるりと振り返った勅使河原の言葉をまるで聞いていない風で、右腕が伸び切ったまま静止した林は呆然と、左太腿を見つめていた。そこに何があるのか、幸輔の位置からでもはつきりと見えた。

深々と、ナイフが突き刺さっていた　林の表情が引き攣る。

「ひいやああああ！」

「大袈裟だよ。刺されたくらいで」

喉が割れんばかりの悲鳴を上げ、膝を付き太腿を押さえる。ナイフを中心に赤い染みが広がる様を、今にも泣き出しそうな顔で見つめる。

「ひっひいいい」

「ナイフとか血とか、慣れたもんでしょ？」

空気よりも涼しげに言いながら、彼の前に回った勅使河原はおもむろにナイフを蹴った。

「っっ！！」

刃先が骨を削りなおも肉を裂く。林の喉が喘音に振るえ、

「ああああああああああああああああああああ！！」

悲鳴が荒々しく荒れた。傷口からあふれた血でパンツが赤く潤う。

「ああああああああああああああああああああ！！」

鬼の形相で跳び上がった林の左腕が勅使河原の胸倉をつかんだ。

「うるさいよ」

その手首をつかむや身を引く。引つ張られ林がつんのめる。引かれ伸び切った左肘に、勅使河原は。

ひとつかけらの躊躇もなく。

右拳を　　打ち込んだ。

「ごきんつ。」

「　　がああああああああああああああああああああ！！！！」

肘からぶら下がるだけの左腕を押さえた林は左足で踏み止まる事もできずに地面に伏した。涙を流し悲鳴を上げ続ける男を勅使河原は睥睨し、つまらなそうに淡々と、

「黙んなよ」

言い捨てる。

「あああ！　ああ！　ああああああああああ！！」

激痛に惜し気なく叫ぶ林を、やれやれと見下ろし　その右足を
持ち上げる。丹念に磨かれた靴底の下には林の頭部。

「　黙れ」

右足が全体重を乗せて落ちる

「　やめろ！」

寸前に、彼の後ろから幸輔が羽交い絞めにした。

「もういいだろ！　これ以上痛め付けなくなつていいだろ！」

訴えた。必死だった。直感的サイレンが、勅使河原が危険だと報知していた。林とは異なつて危険だと知らせていた。尋常でなく異常だと。

勅使河原の足が下りた。林の頭ではなかった。

林は泣いていた。恥ずかしげもなく泣いていた。

「つまらないよ、きみ」

興が冷めた口調で勅使河原が言う。

つまらなくなつて結構だ。

「……あんたは、おもしろえのかよ」

鼻で笑つたのが聞こえた。

第25話：「記憶 in 脳裏」

麻生がタケさんと呼び慕う老人は、途方もなく穏やかで、途轍もなく和やかで、比類もなく朗らかだった。

老人と出会った時、麻生は高校2年生に上がったばかりだった。3つ年上の恋人がいた。学校はサボりがちだった。夜は当然のように出歩いていた。思春期にあつて、達観めいた目線で優越を、すべての物事に斜に構えて、皮肉めいた立ち位置で睥睨を、常に持ち歩いていた。

年上の恋人はブランドであつたし、学校に至っては名ばかりのファッションでしかなかった。

真もつて、こまつしやくれたガキだったと、麻生は思う。

その日も麻生は堂々と、平日にもかかわらず制服で、マンガ雑誌しか入っていないカバンを肩から提げ、恋人と遊んでいた。昼に待ち合わせて昼食を済ました後にホテルへ直行。行為、休憩、行為、休憩、行為、行為、行為。平日フリータイムをがつり消化した。年上の恋人はステータスであつたし、学校なんてものは履歴書を埋めるための文字でしかなかった。

真もつて、性欲に貪欲なガキだったと、麻生は思う。

その後も麻生は堂々と、平日にもかかわらず制服で、捨てた漫画雑誌分の軽くなったカバンを肩から提げ、恋人と佐岩井公園へと足を伸ばした。時刻は夕刻。時期にやって来る夜闇と、恋人との第2ラウンドを楽しむつもりだった。

真もつて、性欲に貪（以下略）。

恋人と談笑しながら公園の奥へと入り込み。

麻生は、老人を見付けた。

もう少し視野を広げて 5、6人の少年に囲まれてうずくまる老人を見付けた。

少年の1人が、老人の背中を蹴っ飛ばした。
手加減なんてない。絶対的な暴力しかない。
恋人の高感度を上げるためでもあった。

当時の麻生がケンカっ早い性格のためでもあった。

ただ、3年経った今でも麻生が憶えている事はそのどれでもなく。
老人を蹴り付けた少年が笑いながら吐いた言葉。

ゴミが。

その後の事を、麻生は良く憶えていない。

気付いた時には、少年たちは全員倒れていた。口を切った少年がいた。右目が腫れた少年もいた。吐瀉物を撒き散らした少年もいた。右足が間接を無視して曲がった少年もいたし、両腕があり得ない方向へ捻じ曲がった少年もいた。

記憶はなくとも、わかりやすい状況だった。

彼らをのした時間などないまま、とりあえず、うずくまったままの老人に声をかけた。すると老人は、がばつ、と起き上がるや、麻生の横っ面をはたいたのだった。小気味のいい音は、さわさわと揺れる葉擦れに紛れた。

2秒たつぷり、何が起こったのか把握できなかった。

「……………」

我に返る。

「てめえ！ 助けてもらってそりやねえだろ！」

「おめえの周り見てみる！ これが人助けか！」

麻生が噛み付くと老人は倒れた少年たちを指し示し、
力を振り回したただけじゃねえか！」

「ああ！？」

「ガンつけるぐれえしかできねえか！」

「んだと、ジジィ！」

「来い！」

詰め寄った麻生の腕を取った老人の手を、すぐに振り払う。

「さわんじゃねえよ！」

老人は妙に静かな瞳で、麻生を見つめた。

「手当てしてやるつつてんだ。大人しくついて来い」

はあ？ 右眉を上げて直後、左脇腹を刺した激痛に顔をしかめ

た。見れば、銀色に光るバタフライナイフが刃を沈めていた。

「ええ！？」

いつ刺されたのか思い出そうとしたが、元より記憶が飛んでいる。手繰り寄せた記憶の紐はハズレだった。恐る恐る傷口に手を当ててみる。白いシャツを赤く濡らし肌に貼り付けたナイフは現実で、触れた手にはべったりと血が付いた。

クウン……

思いがけず、仔犬の声が聞こえた。屈んだ老人は、足元に擦り寄っていた仔犬を抱え上げ、

「傷が悪くなる前に来い。応急処置くれえ、できる」

大事そうに抱えられた仔犬は雑種で、傷だらけだった。

そのまま老人を無視し、病院に向かう事もできた。いろいろと面倒な事になるのは目に見えていたが、それが目下妥当な選択だと思った。のだが、麻生は。

「来るのか？ 来ねえのか？」

「……行くよ」

痛みがうずく脇腹を押さえ、ぶっきらぼうに言い放って老人の後に従った。

歩道の敷かれたその先 人が入るためのものではない公園の奥は緑豊かで、老人はそこに住んでいるようだった。並ぶ木々の中でもひと際太い幹を持つ木の根元にダンボールを組み合わせ、ビニールシートを被せた手作りの家を眺め、感嘆する自分に戸惑った。

ホームレスじゃねえか。

胸中に吐き捨てる。老人が身に突けているぼろぼろの衣服から予想できた事ではあった。そして麻生は今、そのホームレスから応急

処置を受けようとしている。肉に刺さった異物を早く抜き去りたかったのだが、

「絶対に抜くんじゃねえぞ」

老人に4回もクギを刺されたため、触れてもいない。芝生にあぐらを組み、手負いの仔犬を抱えている。時折鼻の奥で鳴くそいつの頭を撫でてやると、温かった。

「いよつこらせ」

ダンボールホームから現れた老人の手には、ワンカップの酒と木箱があった。

「ボーズ。寝っ転がれ」

仔犬を脇に置いてやり、言われるままにその場で横たわった。

やっぱ帰ろうか　そう思った瞬間、老人は微塵にも迷いなくナイフを引き抜いた。覚悟もしていなかった激しい痛みの上に体が浮く。「抜くなら抜くって言えばよ！」

しかし麻生の叫びなど気にせず、口に含んだ酒を傷口に吹き付ける。さらに激痛が走り悲鳴を奥歯で噛み潰した。

ぶっ殺ス！　ぜってーぶっ殺ス！

謙虚のかけらもない痛みが脇腹を無遠慮に掻き回す中、ひたすら頭の中で叫び続けた。

「　終わったぞ」

激痛に殺意でもって対抗し続けたせいで、何をされたのかなんて憶えていなかった。しかし麻生の腹はきれいな包帯で巻かれていて、痛みも幾分か引いていた。

「一発殴らせろ」

開口一番に言った。

「そんなに痛かったか？」

仔犬の治療に移っていた老人は、黄ばんだ歯を見せて笑った。

「……ジイさん」

麻生は、気になっていた事を口にした。

「その犬を守るために、ずっとやられっ放しだったのか？」

その問いに、老人は答えなかった。

「俺を殴る前に、まず病院に行け。しっかりした治療を受けるのが優先だ。そしたら、殴りに来い」

麻生としては今すぐにも殴り倒したかったのだが、老人の手当てを受けながら、痛みを堪える仔犬に見上げられ、気分が削がれた。「ぜってー殴りに来てやる」

言い置いて、老人に背を向けた。

「おまえがのした連中も一緒にな！」

去り際に背後から言われたが、正直億劫だった。面倒だから、救急車呼んでやった。

病院で診察を受けた麻生は、医師に驚かれる事になる。

「誰に処置してもらった？」

老人の応急処置は完璧だったらしい。

「5、6人の少年にボコられてたホームレスのジイさんです。少年の方？ ああ、そっちはぼくがボコりましたよ。あっはっは」

とはまさか口にできず、曖昧に応えておいた。

その晩、恋人に電話した。公園からいつの間にか姿を消していた恋人は、すぐに出た。

『浩介……なんか、怖いよ』

そして強制的にフラれた。

「クソ女」

ぶつつり電話を切られた。

未練なんてものは、髪の毛先程も生まれなかった。今までがそうであったように、今回も淡泊に終わった。ただそれだけの事だった。

翌日。麻生は早速、佐岩井公園へと足を伸ばした。約束通り、あの老人に一発お見舞いするために。平日のバスは空いていて、制服姿の麻生は運転手に一瞥されはしたが、気にもならなかった。

バスに揺られ、後方に流れる窓の景色を眺めながら、ぼんやりと思考した。

ゴミが たった一言で吹き飛んだ記憶。過去、幾度となく向けられた言葉だった。直接的な暴力に添えられていた単語だった。泣く女もセツトだった。

「ごめんね。ごめんね」

麻生の鼻から吹き出た血を、何度も謝罪しながら女は拭ってくれた。どうして女が謝るのか不思議でしうがなかった。確実だったのは、麻生の中で芽生えていた殺意が成長している事のみだった。

麻生の殺意は しかし果たされる事はなく。

ゴミが その言葉と痛みしか教えてくれなかった男は、街を千鳥足で歩いているところをトラックに轢かれた。泥酔していた彼には、赤信号が青信号に見えたらしい。

窓に、佐岩井公園が映った。

老人の元に辿り着いた麻生は面食らった。そこにいたのは老人だけではなく、加えて7人のホームレスたちが集まっていた。誰1人として声を発する事もなく、皆一様にいびつな輪となり座っていた。「おい、ジジイ」

輪の中心で、昨日の仔犬を膝に乗せた老人が顔を上げ、はっとなった。

老人は泣いていた。

仔犬は横たわっていた。口から舌をたらし、苦しそうに浅く速い呼吸に身を揺らしながら。

第26話：「トウゴ」

「……どうしたんだよ」

「見守ってたんだ」

麻生の近くにいた初老の男が、どこか訛りのある口調で言った。

「見届けようとしてんだ」

「待てよ……昨日、ジジイが手当てしてたろ？」

老人は歯を食いしばり、首を横に振った。

「傷口に菌が入ったんだ……こいつはまだ、生まれたばかりだから
免疫が…」

かろうじて、嗚咽と区別ができた。震える仔犬にポツリと添える。

「……すまない」

ごめんね 麻生の足が勝手に動いた。輪の中に飛び込んだ彼は、
ホームレスたちを縫って老人の前に立つ。

「何する！？」

仔犬を奪い上げた。麻生の暴拳に老人だけでなく、全員が立ち上
がった。

「返せ」

伸ばされた老人の手に言葉を突き付けてやった。自分のどの部分
から放たれたのかわからない思いも一緒に。

「獣医に診てもらおう」

子犬の体は驚くほど軽かった。見るからに痛々しい傷 どうし
て俺は。

「無理だ……」

「決め付けてんじゃねえよ」

「もう、無理……」

「俺は連れて行く」

周囲のホームレスたちを睨み付け声を張った。

「シケたツラで見守って！ それだけで満足か！」

麻生は駆け出した。ホームレスたちをすり抜けひた走る。

「……どうして」

公園を抜け出た彼は、勘に任せて道路沿いを駆けた。バスで外を眺めていた時、獣医の看板を見たような気がする。

「……どうしてこんな事してんだよ」

ゴミが。

ごめんね。

なんか、怖いよ。

「どうして走ってんだよっ」

ひたすら地を蹴った。

蹴って駆けて走って

あつた！

視界に飛び込んだ獣医の看板 掲げた建物に跳び込んだ。

「急患なんです！」

声を張って受付窓口に迫る。驚いて飛び上がった窓口の女は、露骨に迷惑そうな顔で、

「あー、じゃあ、この用紙に氏名と……」

ばんっ！ 差し出された用紙に手の平を叩き付けた。女が再び飛び上がる。

「すぐに診てやってくれよ！ その後だったら何でも書いてやるから！ この通りだから！」

麻生は、脇目も振らずに頭を下げていた。

「お願いします！」

人に頭を下げた事なんてなかった。教師にだって下げた事なんてないし、親にだって そもそも、いて、いないようなものだった。そして、人に何かをお願いする事なんてなかった。

「……そう言われても」

女の言葉が途切れる。自動ドアの開く音に、慌しい足音が加わった。何事かと振り向けば

「　お願いします！　こいつを救ってやってください！」

麻生のとなりで老人が頭を下げていた。彼だけではなかった
先程のホームレスたちが勢い良く待合室になだれ込んでいた。

「　お願いします！」

「　お願いします！」

待合室いつぱいに幾重も声が重なる。大の男たちが一斉に頭を下
げるその風景を、呆然と、半ば呆れながら麻生は見つめた。

その風景に、今、麻生はいる。

「　　お願いします！」

再び、麻生は頭を下げた

「　　これだけの人たちに付いてもらって、このコは幸せだね」
治療を終えた後、若い男の獣医はそう言った。
仔犬はトウゴと名付けられた。

「　　どっせい！」

気合いの入りまくった掛け声とともに棒切れが空に飛ぶ。

ワン！　ワンワン！　　棒の軌道を鼻先で追ったトウゴは、すぐ
さま尻尾を振って追い駆けた。幸輔が腕時計のストップウォッチを
スタートする。

「さて！　何秒で戻って来るでしょう！」

「知るか」

勢い良く振り返った彼の問いかけを、麻生は叩き折った。

「突っ走れ！　トウゴ！」

跳ねるように駆ける茶色の毛玉に声援を贈る、幸輔を眺めてあく
び。背中を倒せば視界がグルッと回って、紺碧に伸びる枝葉と葉擦
れと陽光。となりに座るリョージが、ボサボサの白髪を掻いた。

「タケさんのお孫さん、おまえの事を憶えてたか」

「2年前に1度しか会ってねえのにな」

「おまえだって憶えてたんだろ？　それと同じだ」

「俺の場合、腕折られたつてのがあるし」

右手をかざす。2年前、この佐岩井公園で、麻生は折られた。勅使河原が強引にホームレスの老人を連れ去ろうとしたところへ跳び込んだ代償だった。

その時の事を思い出したのか、リョージが苦笑する。

「まさか食ってかかるなんざ、考えもしなかったからな」

「血気盛んだったから」

「その顔も、お孫さん？」

やや腫れた麻生の頬と、唇のカサブタを指しているのだろう。

「いや、これは違う人」

「今でも血気盛んじゃねえか」

言われて麻生も苦笑する。遠くからトーゴの足音が聞こえた。

「ま、コースケのおかげでもあるからな。タケさんがここにいます」

「そりや言い過ぎでしょ」

顔だけ持ち上げれば、棒をくわえ猛ダッシュで戻って来るトーゴが見えた。興奮気味に幸輔が叫ぶ。

「すげえ！ 新記録！ 1分切った！」

「リョージさんとか、ここら一帯のみんながいたからタケさんは残ったんだ」

「コースケもその1人だ」

「そうだとうれしいね」

両手を広げ迎え入れた幸輔の顔面にトウゴが突っ込む。くわえた棒が鈍い音を立てた。

「少なくとも、俺はそうだよ。トウゴを助けたあの時から」

「……その話されっと、恥ずかしいんだよね」

「ははは！ 恥ずかしい事なんてひとつだってねえよ！」

涙目で顔を押しさえながらもトウゴの頭を撫でる幸輔の姿は微笑ましかった。

「タケさんってさ」

「おう？」

「どうして三雲興会から抜けて、ここで生活し始めてたんだ？」

「目的ってか目標ってか、目指すもんが変わっちまったつつてたな」

赤くなつた幸輔の鼻をトウゴが舐める。申し訳なさそうに耳を垂らしていた。

「目指すもん」

「そう。この生活を選んだのは、目指すもんがやりやすいからだつて、酔つてゐる時に言つてたな」

「酒、好きだったもんな」

酒を飲んでご機嫌になるとよく、麻生が吐くまで飲まされた。麻生にとっては迷惑な話だったのだが、おかげでアルコールには強くなった。

トウゴが幸輔にじゃれ付く。しまいには押し倒された。死に瀕していた彼を救つたのは麻生だというのに、何故か幸輔の方によく懐いていた。あれから2年　健康に育つた仔犬は大きくなって、今は主人の帰りを待っている。

「」

それは突然だった。弾かれたかの如く、麻生の上体が起き上がる。

もしかして……！

思考は不意に仮定を打ち出した。

「トウゴ？」

見開いた麻生の瞳の中、あれだけ嬉々としてじゃれ付いていたトウゴが静かになった。その身に乗つかられた幸輔の呼びかけにも応じない。

午後1時9分　その時に何が起こつたのか、鋭敏に感じ取つたのはトウゴだけだった。

「どうしたんだ？」

リョージが疑問符を投じる。

トウゴが空を仰いだ。夏の蒼をこれでもかと敷き詰めた空はどこまでも抜けていて。

[illegible]

長い長い彼の遠吠えを寛大に吸い込んだ。

黒くつぶらなトウゴの瞳は、心なしか濡れているように見えた。きつと、それは事実だったのだらうと思う。

午後1時9分。

タケさんが、逝った時間だった。

第27話：「ドアを挟んだコッチとアッチ」

『 たった今、ジイさんが死んだよ 』

その電話をくれた人物は、律儀にも大東病院の入り口で葉巻片手に待っていた。

「やあ」

「こーちゃん！」

呑気に葉巻をくゆらせる勅使河原の頬を、幸輔の制止も聞かずに殴り付けた。

「いきなり殴るなんてひどいんじゃない？」

殴り返された勅使河原の拳は重かったのだが、痛みはなかった。体中の血液が煮えている。

「ストップ！」

睨み合った2人の間に幸輔が滑り込む。奥歯を軋ませ麻生が睨み付ける勅使河原の口角が、左だけ上がった。

「ジイさんに最期の挨拶をしに来たんだろ？」

「ついでにその面も殴りに来た」

「それじゃ、あとはジイさんと対面するだけって事だ」

「まだ殴り足んねえ」

「ほんと、キミって男は」

ニタリと、勅使河原の唇が左右に伸びた。

「 おもしろい男だよ」

その身が180度回転する。自動ドアをくぐりながら、

「ジイさんの所に連れてってあげるよ」

そう言った無防備な背中に殴りかかるのは後にして、麻生と幸輔は大人しく従う事にした。

地下2階。陽の光に代わって蛍光灯が照らし出す無機質な廊下には、露出した肌にひんやりと触れる空気が飽和していた。3つの足

音だけが鳴り、1枚のドアを前にして立ち止まる。霊安室と書かれたプレートを一瞥し、麻生は部屋に入った。

蛍光灯が2本。簡素なベッドが1台。横たわる老人が1人。佇む巨体が1つ。

思いの外狭く区切られた部屋で、細木が手を合わせていた。

「何だ、来てたんだ」

勅使河原の放った言葉は何の感慨も意味も携えたものではなく、細木がいてもいなくても大した差はないようだった。ドア脇の壁に寄りかかった彼は、麻生と幸輔に目で促した。

久しぶりに対面する老人は痩せこけていた。胸元で組み合わせられた手は骨張っていた。そっと麻生の手を乗せた。信じられないくらい当たり前に、老人の手は冷たかった。

「体中ガタついてたんだってさ」

勅使河原の声を聞きながら、老人の顔まで視線を這わせる。筋張った首筋、乾いた唇、血の気のない頬、綿を詰められた鼻、閉じたまぶた、数本だけ立つ薄い眉、富士額。

「あんな生活してたんだ、ボロボロになるのも当然」

穏やかに眠る老人の顔が霞む。浅く吸い込んだ空気は、吐き出す時にはかすれていた。

「……タケさん。久しぶり」

やっと、会えた。

「病院のメシ、まずかったのか？ ずいぶん痩せたな」

無言のまま、細木が退室する。勅使河原は声をかける事すらしない。

「シケたメシ出すんだな、この病院。金あるんだから、メシぐれえまともなもん出せよな」

老人の手を優しく叩く。

「こんな手じゃ、俺を殴ったら砕けちまうよ。タケさん。トウゴが泣いてたよ。俺、犬が泣くのなんて初めて見たんだけどさ、本当に哀しそうに、泣くんだよ。ちゃんとあの頭撫でてやったのか？ あ

んたがガキどもから守った犬なんだ、最後まで面倒見てやれよ。そうだ、まだ言ってなかったけど、俺が刺された時に応急処置してくれただろ？ あれ、医者が驚いてたよ。完璧な処置だったってさ。あんた、すげーよ。タケさん」

麻生の膝が崩れた。慌てた幸輔がとっさに支える。

「こーちゃん」

「俺……………まだ まだあんたを殴ってねえだろがよお!!」

張った声が狭すぎる室内を飛び交った。

「……………くだらない」

幸輔が振り向いた時にはもう、勅使河原の背中がドアの向こうにあった。麻生の鳴咽を残し、ドアの隙間が細くなる。

ばたん。

「こんな所で何してんの？」

後ろ手にドアを閉めた勅使河原の前に、白衣を着た女が立っていた。メガネをかけた顔は眠そうではあるが、どこか理知的で、無機質な廊下に違和感なく溶け込んだ。白衣のポケットに手を入れたまま、その唇を最小限に動かす。

「お別れの挨拶をしに来ただけよ」

「ジイさんの主治医でもないのに？」

「病院の患者だから、じゃあ理由として不十分かしら？」

勅使河原は肩をすくめた。

「十分だよ。だけど、今はやめといた方がいい。せつかくの再会を邪魔する事になるし」

鼻頭と眉間に縦ジワを刻み込む。

「……………湿った空気に気が滅入るだけだ」

「そう」

女は無関心な顔で受け止めた。

「じゃあ、しばらくここで待つ事にするわ」

「それが賢明だ」

彼女の肩をすり抜ける勅使河原は、まだ昼食を取っていないかった事を思い出した。さて、何を食べようか

「コースケ」

足が止まる。

「これって何かの縁かしらね。同じ場所に同じような名前の男たちが集まるなんて」

肩越しに振り向いた。女の背中は微動だにしない。

「偶然にしては出来過ぎに思えるけど、それでもやっぱり偶然なのよ。こんな事言っても私自身信じられないけど 偶然じゃなければきつと、あの老人が呼んだんでしょうね」

勅使河原の表情に陰が浮き彫られる。頭の片隅にすら、空腹感が残らなかった。

「……………」

「あと1人、ね」

あと1人 その意味は皆目わからなかったが、

「おまえ何者だ？」

我知らず早口で質す。

女はゆっくり ゆっくりと振り返った。

「しがない女の医者よ」

口元が意味深に微笑んだように見えた。

「しがない女の医者が」

勅使河原の語尾まで聞く事なく、彼女の手がドアノブにかかる。

「俺の名前知ってるわけないだろ」

彼の言葉をすり抜け、女は霊安室に吸い込まれた。

ばたん。

ドアが閉まる音に勅使河原を連想したが、振り向いた幸輔をじっと見つめていたのは忍足だった。

「先生？ あれ……」

どうしてここに？ 尋ねようとしたところで彼女の視線が足元にずれた。あぐらを掻いて座る麻生は先程よりずっと落ち着いたものの、ずっと頭を垂れたまま何も言わない。

「もうお別れは済んだ？」

忍足の声音が凜と揺れた。こつも慈愛を感じさせる声音を紡げるなんて、初めて知った。

「……どうしてあんたがいんだ？」

天井を仰いだ麻生が鼻をすすって、背を向けたまま尋ねた。

「さつきも同じ事聞かれたけど」

きつと勅使河原だろう 幸輔が予想できる範囲では彼しかない。

あ。あの人もいるか。

入室した時にいた巨軀が脳裏をかすめた。

「その人の主治医ってわけじゃなくて、逝った人に祈る事くらいできるでしょ」

「じゃあ、この男がどんな人間かってのは知らねえよな」

「死に顔を見る限り、穏やかに逝けたつてのはわかるわ」

「そうとは限らねえだろ」

「もちろん」

「穏やかにだなんて軽々しく言うんじゃないよ」

「そっちこそ」

「あ？」

「少なくとも、私はあんたより人の死に顔を見てる。病院って、思ってる以上に人の死が多い場所なのよ。病で逝く人だけじゃない、ここは緊急病棟だもの、突然の事故に見舞われて逝く人だっている。そのすべての死に顔を、私は見てるの」

いったん言葉を区切った。麻生と幸輔が黙っていると、再び語を連ねる。

「そうしてるうちに、その人の最期が見えるようになったのよ。た

だ、実際に見たり聞いたりしたものじゃないから本当のところはわからない。あんたの言う通り、その老人が穏やかに逝けたなんて確証はないわ。私は死に顔から読んだだけ。そしてあんたは、穏やかには限らないって決め付けてるだけ。それを断言できるのは、あんたじゃない」

「……なんか」

やや間を置いて、麻生の首が忍足に向いた。

「人の死に対して冷静だな」

幸輔の目に映る彼はどこか卑屈さがにじみ出ていた。彼の敬愛してやまない老人の死がそうさせているのだとわかつてはいるのだが。
「怖いよ。人の死は」

忍足の右足が前に出た。

「めった刺しにされた彼の手術なんて、あまりにリアルに死を想像できて手が震えたもの」

「あんなに自信満々だったじゃねえか」

「そうしないとダメなのよ」

壁に沿って歩く忍足の瞳が、麻生から老人に移動する。ベッドの頭でぴたりと足を止めた。

「あれは自己暗示。人を助けたくて医者になったのに、手術する直前に怖いだなんて言ったら笑われるでしょ？　けど、死が怖いっていう気持ちは絶対に忘れたくない。私が手術しても死んでしまうんじゃないか　そう思っても手が震えなくなった時は、医者を辞めるつもり。死に対して怖いっていう思いと、それでも助けるっていう想いが極限まで引つ張り合って、拮抗してる状態が私にとってベストだから」

「すっげー精神状態だな」

反発し合う恐怖心と救護心に、両端から体を引つ張られる　幸輔には想像がつかない。限界まで引つ張られ、張り詰めて、プツンと切れた時なんて　その反動を想像もしたくない。

「そんなんでよく、これまでもつな」

「神経図太いのよ」

麻生の感嘆に彼女が振るった言葉もまた自己暗示なのかと 幸輔は頭を振って、思考を追い出した。それが否かを追求したところで意味なんてものは成さないのだから。

忍足の両手が、老人の頬を挟み込むように触れた。

「おやすみなさい」

初めて見た彼女の微笑は慈悲にあふれていて、美しかった。こんなにも優しい笑顔をどこに隠し持っていたのか、どうしてもいつかは出さないのか、不思議だった。

「2人とも、見送るんでしょ？」

見上げた時には跡形もなく引っ込んでいたけれど。

「見送る？」

麻生の片眉が跳ねた様子を呆れて見やり、忍足の顔が幸輔に向く。

「この老人が斎場に向かうのを、見送るんでしょ？」

「え……もう？」

穴を開けてやろうかというほどの幸輔の視線を、老人を見る事によつて忍足は受け流した。

「せめて葬式くらい開けばとも思うんだけど、斎場に直行するっていう話らしいわ」

麻生の目が見開く。

「どうして……」

「私に詰めたところでどうにもなんないって事くらいわかるでしょ」
「……………」

目の前に正論をぶら下げられては、麻生も口をつぐむ他ない。

「……じゃあ、せめて」

幸輔が提案する。

「俺らも車に乗せてよ。一緒に、斎場に行く」

忍足のまぶたが閉じ、開いて ゆっくり瞬いた彼女の言葉は重く沈んでいた。

「そんな権限、私にはない」

第28話：「ガチ」

これから老人を見送るというのに、麻生と幸輔はまるで見えないヒモに引つ張られているかのように階段を昇っていた。ヒモの先はもちろん、2人の先に行く忍足の背中だった。病棟はいつもと何ら変化なく、患者と看護師で賑わっている。老人が死んだ事が、まるで悪趣味な虚偽だったかの錯覚。

ぱったり、梨香と出くわした。

「アソーくん！ 幸輔！」

ストーカーの件が落ち着き、無事に退院を果たした彼女は、今度は井延の見舞いとして大東病院に通っている。

「あ、先生」

「忘れてたの？ 見えなかったの？」

「いや、そんな事……あれ？ 痛い、痛いです先生」

忍足のコブラクローが梨香のこめかみをきれいに捕らえていた。

麻生と幸輔が全力を注いで引き離れた後、顔をしかめてこめかみをさすりながら、梨香は物珍しそうに聞いて来る。

「どこ行くんですか？」

「屋上に、ちょっとね」

麻生に羽交い絞めにされながらも淡々と答える忍足。

『屋上？』

麻生と幸輔は、付いて来なさい、としか言われていなかった。

梨香と別れ、また階段を昇る。

まだ階段を昇る。

「なあ先生」

「何？」

「どうしてエレベーター使わねえの？」

麻生の素朴な質問。

「屋上まで、エレベーターじゃ行けないのよ」

「途中までエレベーター使えばいいじゃん」

「……………」

「何も、ひたすら階段昇る事ないんじゃないの？」

「あのコ、おもしろいコよね」

ナチュラルに流したつ。

「つい、からかいたくなるわ」

「いや、さっきのコブラクローは本気でした。確実に潰しにかかってました」

幸輔もコブラクローを食らう羽目になった。気持ち、強めだった。麻生が必死に止めなければ、頭を潰されかねなかった。

「ほら、私って人付き合いが下手だから」

呟いた忍足を2人そろって無視して

たどり着いた屋上には、細木と勅使河原がいた。背の高いフエンスに寄りかかって、言葉を交わすでもなく勅使河原は空を仰ぎ、細木はどこか虚空を見つめる。天井の中心で干されたシャツが、幾重も風にはためく様は波を彷彿とさせた。

勅使河原が3人に気付いた。

「最期の挨拶は終わった？」

この鼻にかかった声が好きになる事など一生来ないと、麻生ははつきり断言できる。

「あなたも見送りに来たの？」

彼らに歩み寄った忍足が、勅使河原の右手に葉巻を見付けた。

「ここ、禁煙よ」

「ああ、ゴメンナサイ」

形式のみの詫び。見せ付けるように紫煙をくゆらせ、視線を空に戻す。

「あいつ、うそみてえに痩せこけてたよな」

呟いた瞳には愛しさも懐古もなく、まるで一仕事終えた後の一服といった口調で。

「やーっと、いなくなった」

「 勅使河原あああ！」

麻生が殴りかかった。止めようとした幸輔の手はもう少しのところで空を掻き、麻生の目の前に巨体が立ちはだかった。

「邪魔すんなあ！」

「 ストープ」

右足に何かが引っかかる。前進する身を支えるものを失った麻生は無様に細木の足元まで転がった。

「つてえじゃねえか！」

すぐさま飛び起き振り返れば、足を引っ込めた忍足が麻生を睥睨している。

「麻生ちゃん」

思いがけず柔和な声を発した勅使河原を睨み付けた。彼はまだ、空を見上げていた。何を熱心に見入っているのか 彼に倣って幸輔も見上げてみる。遠くに入道雲が低空に浮かび、煌々と照る太陽の脇を綿あめの形をした雲がよぎる。夏の空。蒼は澄み、広大視界を戻すと、勅使河原は麻生を見つめていた。

「もう、隠すのはやめよう。井延と会ったんだろ？」

「はあ？」

「井延の恋人、もう退院したんだろ？ さっき見かけたよ。まだここにいるのはどうしてだ？ ああ、俺が隠すのもアレだな。彼女についてったんだ。そしたら、まあ、あんな平和そうに寝ちゃってさ」

勅使河原はゆっくりと、麻生に近付いた。無言で睨み返す麻生との距離を10センチほどに縮め、

「近えよ」

麻生の抗議をひねり潰す。

「井延が預かったものの、俺によこせ。もし麻生ちゃんが井延と接触

してるんなら、あいつが持ったまんまだなんて考えにくいんだよ」

「じゃあ、教える」

麻生の鼻をぐっと寄せる。勅使河原は身じろぎもしない。

「コインロッカーには何が入ってたんだ？」

「やっぱ持ってたんだ」

「教えてもらうまで渡さねえ」

「頑固なんだね」

「頑固なんだよ」

ごっ！ 勅使河原の頭突きが麻生の額を弾いた。仰け反った麻生の背筋と腹筋が膨らむ。

ごっ！ 反った身を返す反動を頭突きに乘せる。揺らいだ勅使河原の頬を麻生の拳がえぐった。回る体 左足を軸にした回し蹴りに変わる。革靴の踵が麻生のこめかみを捉え、

「力づくって、好きじゃないんだよ」

「ああ、俺もだ」

麻生が軸足を払う。バランスを崩し肩から落ちたところをとっさに受身を取った、勅使河原の頭に容赦なく打ち込む蹴り 腹筋と屈伸で跳ね起き、寸でのところで空振り。

「せっかくの白スーツが汚れちゃうじゃないか」

「そんなもん着てっから気になるんだ」

麻生が間合いを詰める 勅使河原の肘打ちを紙一重でかわし、ガラ空きになった胸元から突き上げた拳がその顎を砕く。彼の手が麻生の髪をつかんだ。

「つかまえた」

かわした肘打ちが顔面に入った。鈍痛 鼻の奥でキーンと痛覚が弾け、たまらずうめいた。噴いた鼻血がスーツを汚す。勅使河原が顔をしかめ、生じた隙を見逃さなかった。麻生の拳がみぞおちにめり込み、体をくの字に折った彼の手が緩んで、

「沈め！」

両手で固定した顎に膝を打ち込む。

「っっ！」

骨と骨がぶつかり合う鈍い音が空に抜けた。

白目を剥いた勅使河原の膝が地面に落ち、脱力した身がふらふらと左右に揺れた後、前のめりに伏す。乱れた呼吸に肩を上下させて彼の脇に座り込んだ麻生は、しびれた鼻に触れ、
「っっっ！」

しかめっ面。俯けば、鼻先から地面に血が滴る。赤い点のとなりに吐いた唾もまた、赤かった。口の中はきつと鉄臭いのだろうが、鼻がこの通りだ、嗅覚よりも痛覚の方が断然勝っている。

白目で動かない勅使河原を一瞥、麻生は俯いたままで首をねじった。

忍足は腕を組んで傍観に徹していた。

細木は自分よりも2回りほど小さい体を抱え込んでいた。

幸輔は自分よりも2回りほど大きい体に埋もれていた。

第29話：「咆哮が裂く」

「こーちゃん！」

いくら必死に暴れ、もがき、足掻いたところで細木の束縛は強固だった。

「……そんな泣きそうな顔すんなよ」

冗談でなく鼻が痛かった。もしかしたら折れているのかもしれない。それでも麻生は、幸輔に笑顔を作った。次いで、忍足と細木を見上げる。

「どうして止めなかった？なんて聞かないでね。どうせ止まらなかったらうし」

予想通り、忍足は冷ややかな調子で、

「今のは、社長からけしかけたものですから」

予想外に、細木は突き放した意見だった。

「麻生さん」

仏頂面かつ野太い声で名を呼ばれ、麻生は警戒した。今の状態でも、そこら辺のヤツなら相手は出来るだろう。テンションもまだ高い位置にあるし、鼻血を垂らしながらも体を動かす事は出来る。しかし、相手が細木となると話は別だった。

「力ギを、私にください」

やっぱ来た。

「麻生さんが持つていても意味のないものなんです」

「……そうかしら」

忍足がそう呟くのが聞こえた。彼女がどのような意図でそう呟いたのかまではわからないが。

「……何なんだよ、あの力ギは」

「会長の意志なんです」

「意志？」

細木が口を開きかけた時　階下がにわかに騒々しくなった。それは繁華街の喧騒にも似た、しかし決して樂觀的なものではなく、むしろ悲嘆色が濃厚な。悲鳴や慟哭が風の塊となって、屋上にまであふれていた。

「……何だ？」

怪訝を覚えたのは麻生だけではなかった。何事かと周囲を見回す幸輔も、黙して様子を探る細木も。

忍足だけが、知っていた。

「始まったわ」

「何が」

麻生の問いにしかし答えず、静かにフェンスに歩み寄った忍足は網越しに見下ろした。

「何が始まったって……」

腰を上げた麻生が鼻を押さえながらフェンスに近付き　絶句した。

「何だこれ！」

細木から解放された幸輔がフェンスに額を押し付ける。同じようになりで見下ろす細木が、唾を飲み込む音が聞こえた。

4人が見下ろす大東病院裏口は、人の頭で埋め尽くされていた。何十人というレベルを越え、とうに百を越えているであろう人の数は裏口に収まり切るはずもなく、道路にまであふれ返っていた。目を凝らせば、ホームレスが大半　見るからにヤクザと判別できる者や、コック姿もある。子供を抱える女の姿や、ひと際大声で嘆く青年も見受けられた。百何十人という老若男女が泣き叫ぶ渦の中心に、白いバンが埋まっていた。

「……もしもし？」

いつの間にか携帯電話を耳に当てていた忍足。

『せつ先生！　大変です！　人が！　人が！　前に進めません！』

電話相手はどうやら、あの中心にいるらしい。金切り声に近い男声と周囲の喧々囂々が麻生の元まで聞こえる。ただただ啞然と、麻

生は足下の信じられない光景に目を奪われつ放しだった。

「彼ら、何か言ってる？」

『会わせろって！ 誰っ！ タケさんって誰！ 助けてええ！』

かわいそうに、すっかりパニックっている様子。

「会わせてあげて。あなたの後ろで眠ってる人がタケさんよ」

『何なんですかこの人たちは！ あ！ ダメだって！ ワイパー引つ張っちゃダメだって！』

「早く会わせてあげないと、青柳くんに襲いかかり兼ねないわよ」

『ええええええええええ！？』

「いいから、早く会わせてあげなさい」

『誰たちなんですかこの人たちは！』

「家族よ。その人たち、みんな」

淡々と、忍足は一方的に通話を切った。

「……どーゆこと？」

点になった幸輔の目を見るなり忍足の鼻が鳴る。

「……俺の事が嫌いですか……？」

「あの人は、これまでの人生を、実に慌しく駆けて来たんです」

と、開口したのは細木だった。直立不動だったその手が網にかかる。

「任侠の世界に生まれ、ホームレスとして天寿を全うするまでに

教師、三雲興会社長、会長として、様々な人と接して来て。一度でも関係した人であれば、たとえ道端で肩がぶつかったただけの人でさえも、その人のために尽力し、奔走した人なんです」

あれだけ寡黙だったのにこんなにも滑らかに話す細木にも驚いたが、

「教師！？」

そちらの驚愕に麻生の目が剥いた。

「すげー、タケさん」

幸輔が見やるフェンス越しで、今まさに、バンから棺桶が下ろされる。騒々しかった群衆が水を打ったように静まり返る。戸惑いを

隠せずにいる職員がおどおど落ち着きなく、だが無事に箱を下ろし終えた。老人の顔の部分にある窓が開かれる

棺桶を中心に、黙祷の輪が広がった。

皆一様に手を合わせるまでに1分とかからなかった。

彼らに倣って、麻生も手を合わせる。

まぶたの裏でその老人は、黄ばんだ歯を見せ、笑った。

「ありがとう！ タケさん！」

誰かの張り上げた声が、静寂を感謝の波に変える。

「ありがとう！」

「ありがとう！」

「ありがとうおお！」

皆が皆、口々に諸手を挙げて空に声を張る。それぞれの謝恩を、想いを乗せて手の平を突き上げる。これだけの人数が1箇所に集って、それぞれでも同一の感謝を、逝ってしまったたった1人の老人に贈る。

「これだけ盛大に見送られれば、葬式なんていらないわね」

忍足の言葉は幸輔の目頭を熱くさせた。

この光景を一生忘れまいと、幸輔は心に誓った。それはあまりにも神秘的で、奇跡で、それでも1人1人の想いが形となった結果で、だから現実で。

だからこそ、つんざいた銃声を認識するのが遅れてしまった。

「てっしーさあ……」

麻生が背後を振り返る。

そのTシャツの脇腹に穿たれた穴が嘘みたいに、みるみる血で染まり、

「……空気読めよお」

脇腹を押さえたまま彼が揺れた どっ 横に倒れ込んだ。

「こーちゃんっ!？」

第30話：「快晴レクイエム」

「なんか、下がうるさくなつてんなあ。何の騒ぎ？」

銃を下ろした勅使河原が首をひねる。ぽきぽきと骨が鳴った。

「勅使河原武行さんの葬儀よ」

口調は呑気でも忍足の行動は早く、伏した麻生に駆け寄るやＴシヤツを裂きにかかる。

「……先生」

「何？」

「積極的だね」

「銃痕広げてやろうか」

「ごめんなさい」

ジョークだったつもりが紛れもなく本気の目だった。

「先生、何してんですか？」

「見てわかるでしょ。応急処置。すぐに手術する」

勅使河原を横目に、裂いて脱がせたシャツをさらに2つに裂く。

「そのキミ。ちょっと手伝って」

呼んだ幸輔にＴシヤツの布切れを渡し、忍足は携帯電話を取り出した。

「これで傷口押さえてあげて」

「え……」

「怯んでる場合じゃない。少しでも流血を止めないといけないの。」

「死んでもいいの？」

慌てた。左右の手にした布を当てるために傷口を確かめ、それでも一瞬怯んだ。ちょうどよく付いた筋肉を露わにする麻生の上半身に穿った銃痕は見るも痛々しく、流れる血と、ぬらぬらと光る肉と、血に濡れた骨が覗く。

「早く」

急かされて泣きそうになりながら、傷口を隠すように布を押し当

てた。

「ついたっ！」

麻生の眉間がシワを刻む。

「あ、ごめっ」

「強く押さえないさい」

言われるままに幸輔は引つ込めかけた布を再度押し当てた。腹部と背中を、麻生の体を挟むようにして。なおもうめき声が聞こえたが今度は力を弱めなかった。

「もしもし？ 早く出なさいよ、何してたの あっそ。急患よ。すぐにオペの準備。左脇腹を負傷してる。出血が多いから輸血の用意もして」

布は瞬く間に真っ赤に染まり上がった。生暖かく湿った感触に幸輔の喉頭が上下する。

「なあ、先生」

気付けば、すぐ頭上から声が降った。

「この人の血液型は？」

頬と肩で携帯電話を挟み脈を確認しながら、忍足の目が幸輔を向く。

「……A型」

「血液型はA型。よろしくね あと、屋上に担架持って来て。説明なんて後にするわ。いいから早く」

「無視すんなよ、先生」

携帯電話を切り、そこで初めて忍足の瞳が上を向いた。

「助けなくていいんだよ、そいつなんて」

「どうして」

「もっと早く気付けば良かった。他人のために熱くなる性格、祖父さんがこいつを大切にしていた事」

どこか虚ろな勅使河原の瞳は、苦痛に耐える麻生を見下ろしていた。

「そいつだったんだ」

「

「そいつが、祖父さんの隠し子だったんだ」

隠し子！？

幸輔の首が跳ね上がった。同時に、勅使河原の足が麻生の腹に、傷を押さえる幸輔の右手ごと食い込んだ。

「あつ！」

「ぐあ！」

2人が激痛を叫ぶ。

勢い良く立ち上がるや忍足の手が胸倉をつかみ、勅使河原の顔を引き寄せた。

「何してくれてんだてめえ」

凄みの利く睨みとセツトで低く押し殺した声を放つ。

「これは俺と麻生ちゃんの問題なんだよ先生。だから邪魔すんなよ」

「だったら傷を負ってる以上、私と麻生の問題だ。てめえこそ邪魔すんな」

「ずいぶンドスの効く声出すね」

「引っ込んでろ」

「うぜえ」

「っ！？」

勅使河原の手の中で下を向いていた銃口は、忍足の左足を射抜いた。屈む幸輔の眼間で、スリッパを履く足の甲が血を噴いた。忍足の顔が歪み、胸倉をつかんでいた手が緩む。

「っざけやがれ！」

痛覚に歯を食いしばり憤怒の形相で殴りかかったその胸元に銃口を突き付ける。

「どけよ」

ぴたりと静止した彼女をおかしそうに見つめる。

この男を、幸輔は心の底から憎らしく思えた。

負傷し氣息奄々の麻生、泣きながら彼の傷を押さえ続ける幸輔、銃

を目の前に動きを封じられた忍足、そして

「もうやめましよう、社長」

勅使河原へ向けて伸ばした右手に銃を握り込んだ、細木。
勅使河原の首が、彼の方へ倒れた。

「そんなもん向けてどうするつもりだよ、細木イ」

細木の音吐は太いがために、はつきりと聞こえた。

「社長は人を傷付けすぎます」

「何だそれ」

「あなたが殺した先代の社長から、どれほど血を見れば気が済むのですか」

「俺にそんなもん向けていいのかって聞いてんだ」

「会長は、血を見るために三雲を発展させたわけじゃないんですよ」

「おまえも無視かよ、おい」

「下を見てください」

「とんだ茶番だ」

「ですが、彼らが会長を慕う気持ちは本物です」

「根性が腐れてる」

「会長は、この街が好きで　好きで好きで好きで好きで」

「気でも触れたか？」

「大好きな葉崎という街を、守るために三雲を存続させたかった」

「くだらねえな」

「三雲は暴力を振るうためのものじゃない」

「ヤクザが泣くぜ」

「社長はヤクザを履き違えているんです」

「何を履き違えてるって？　あ？　俺が何を履き違えてるって？」

「任侠は人を傷付けるためにあるんじゃない。家族を守るものです」

「だから何だ」

「葉崎全体が、家族なんですよ」

「はっはっはっはっ！」

勅使河原の哄笑が弾けた。

「バカじゃねえか!? 葉崎全体が家族ときた! ヒヨった事言うのも大概にしるよ!」

「家族を思ったからこそ、今こうして、多くの人々が集まってるんです」

「ホームレスのたわ言だろうが!」

声を荒げた彼に細木は躊躇いなく、決定的な言を投げ付ける。

「あなたは間違ってる」

一切の表情が欠片なく落ちた勅使河原の瞳が見据える先で、細木は繰り返した。

「あなたは、間違ってる」

強めの風が吹いた。

勅使河原の裾を揺らし、忍足の前髪を払い、蒼白な麻生の頬を撫で、布いっぱいに吸い込んだ血を冷やした。ひと際大きくはためいたシャツが竿から外れ空を飛んだ。

「……殺させるなよ、細木」

零細な声は無感情。

「俺に、おまえを殺させるな」

仏頂面の唇は動かない。

シャツが、対峙する2人の間に割り込んだ。細木は、陽光に輝く潔癖な白に目を細めた。

お互いが死角になった刹那の後。

通り過ぎたシャツの向こうで。

勅使河原の銃口は。

細木を睨んでいた。

名を叫ぶ。

「細木イイイイイイイイイイ!」

フェンスさえも越えて宙に舞ったシャツは、風に煽られひっくり返った。

銃声が2発。

乗っていた風を失い、重力に引つ張られるままに群集にはためく。
瞳を赤く泣き腫らした人々に見守られる中、シートは躍るように地面へと

棺桶を、やわらかく包み込んだ。

第31話：「大東病院308」

大東病院308号室は6台のベッドが並ぶ相部屋だった。ドア脇によるベッドが1台空いているのは、そこにいた少年がつい昨日、無事に退院したばかりだからだ。彼と仲の良かった向かいのベッドの少年は、新たに話す相手を見付けようとせず、白いボディのゲーム機とばかり睨めっこしている。

窓際のベッドでは、両足にギブスをはめた老人のとなりで、老婆がナシを切っていた。開け放たれた窓から吹き込む涼しげな微風に、甘い匂いが乗った。その向かいのベッドはシーツが乱れたまま放置されている。デザイナーだと言っていた無精ヒゲの男は、タバコでも吸いに出たのだろう。

そして、部屋の真ん中で向かい合うベッドでは、2人の男が睨み合っていた。

少年がくしゃみした。

「……見てんじゃねえよ」

「見てねえよ」

「ガンつけてんじゃねえか」

「気に入らねえなら出てけ」

「そっちが出てけよ」

「生憎、血が少ないもんで療養しろって言われてる身なんだよ」

「ああそうかい。こちらメッタ刺しにされたもんでよ。無茶すんなって言われてんだ」

言葉を返す代わりに手近にあった雑誌を投げ付け

「ガキか」

宙で叩き落された雑誌が脇腹を強打。

「はっつ！」

麻生はたまらず身をよじった。呆れ顔で彼を見下ろした尋絵は向

かいのベッドに笑顔を向けて、

「初めまして。秋野です」

「ああ」

麻生の時とは打って変わった明るい声で、井延が会釈する。

「梨香、すぐに戻って来るよ。話は聞いている。俺がいない間、梨香が世話になったみたいで」

「とんでもない」

謙虚に手を振る尋絵に一言。

「何もしてねーし」

「黙れ」

指で腹を弾かれた。

「はうつ！」

「ケガ人はケガ人らしく大人しく寝てやがれ」

「……ひゃい」

麻生、涙目。

「尋絵！」

「おっと」

尋絵の背中にぶつかって来たのは梨香。思わずよろめいた。

「アソーくんの見舞いに来たの？」

言いながら麻生に手を振って来た彼女へ、麻生もまた振り返す。

「……死ね」

井延が殺意を呟いた。

「そ、この男の見舞い」

「これ」

麻生の催促で差し出されたそれは、

「……これだけ？」

リンゴ1ヶ。包装ナシ。直接手づかみ。

「かじれるじゃん」

シャクツ！ と皮ごと。

「……えー」

「文句？」

「滅相もございません」

尋絵の手から、ありがたくリングを戴いた。赤い球体を、どこか腑に落ちない思いを抱えて見つめる。尋絵が入院した暁には、抱え切れないほどのバラを贈ってやろうと決意した。

「梨香」

井延が不満顔で声をかけた。

「ん？」

「ちよつと外に出ようや。そいつの顔見てたら胸クソ悪くなった」
吐き捨てた井延の言葉を赤字覚悟で即お買い上げ。

「よし、そんなセリフ二度と口に出せねえようにしてやる」

尋絵の指が弾く。

「はうっ！」

赤字のままに終わった。

「秋野さん」

ベッド脇の靴に足を突っかけた井延が尋絵に笑いかける。

「これから、梨香をよろしく頼みます」

「もちろんです」

笑顔で首肯した彼女に笑みを深くし、

「じゃ　ごゆっくり」

「また後でね」

退室した2人の背中を、尋絵は内心戸惑いながら、麻生は中指を立てて、見送った。

「ガキか」

「あだだだだだだだだだ！」

指を逆方向に曲げられ、麻生はたまらずタップした。

第32話：「大東病院、それぞれ」

中庭を目的もなく歩く。夏の太陽は肌に厳しくとも、風は優しい。井延と並んで歩く今この瞬間が、梨香にはとても幸せに思えた。

「心配かけて、ごめんな」

井延が呟いた。

「これからは、傍にいて守るから」

梨香が見上げた彼の目は、照れくさそうに、あさつての方向を向いていた。

あの時もそうだった。

梨香が、襲われた時。

レイプされかけた時。

果敢にも犯人に挑み、殴り殴られ蹴り蹴られ、相手をのした後恐怖にうずくまり打ち震える梨香へ手を差し伸べた時。

傷だらけになりながらも差し伸べた時。

「ねえ、耕佑」

井延の手を握って、梨香は足を止めた。手を引っ張られ、立ち止まった井延が振り返ったその顔を、両手で素早く固定する。

「そういう事は、目を見て言おうよ」

井延は少しだけうつろたえてから、覗き込む梨香の瞳を見つめて言った。

「俺が梨香を守る」

俺が傍にいて、おまえを守ってやる。

それは、2人の始まりの言葉。

彼の言葉を一言一句残さず吸い込むように、深く深く、梨香は深呼吸した。膨らむ肺が井延でいっぱいになる。吸い込んだ語句たちを零さぬよう慎重に息を吐いて。

「よくできました」

満面に笑んだ。

手で弄び、ためつ眇めつ眺めた後、麻生はリンゴに嚙り付いた。
シャクツ　　甘酸っぱい汁が舌を濡らし、香りが鼻腔に昇る。

存外、美味。

尋絵はと言えば、イスに座って雑誌に読みふけている。何をするでもなく、ただそこにいる。

ふと視線に気付いた。窓際のベッドの老夫婦が麻生の様子を窺っている。老婆が差し出したナシを、老人が頬張る　　ふつ　　勝ち誇られた。

ハラ立つー。

「ねえ、アソー」

麻生の前に雑誌を置いて、尋絵があくびを噛み殺した。

「退院したら、ここ行かない？」

「どこ？」

「ここ」

尋絵の指が示したページでは、写真やら地図やらコメントやらがカラフルに色めき立っていて、見ているだけで目がチカチカする。

「イベント会場って言うのかな。最近できたらしいんだけど、ちょっと興味があるんだよね」

地図を見て、それが葉崎市にあるのだと知った。市内とはいえ、内地地のことと海岸のそこは両端。それでも、車を使えばすぐだろう。

「クラブとギャラリーが一緒くたになってんの。おもしろそうじゃない？」

「んー」

「行きたくないなら別にいいんだけど」

あっさり引つ込められた雑誌を麻生は俊敏に奪い取った。

「行かねえなんて言ってねえだろ」

「じゃ、行く？」

ページに目を通し　目がチカチカ、頭がクラクラ。

「……ちよつと考えさして」

「ちよつとだけね」

ぶつきらぼうに言う尋絵。とりあえず麻生はリンゴをかじった。

視線　窓際の老夫婦はすっかりナシを片付け、麻生を見つめながら硬く手を握り合った　ふん　またもや老人が勝ち誇る。

「何なんだあんたらは」

「失礼します」

前触れもなく声をかけられ、麻生と尋絵の肩が震えた。ベッドの前にぬつと現れた巨軀は、やはり細木だった。

「……あ」

尋絵の口が小さく動いて、あからさまに警戒する。睨み付ける彼女へ、細木は深々と頭を下げた。

「先日は手荒なまねをして、すみませんでした」

尋絵を拉致した事だと、すぐに思い至る。丁寧な謝罪を受けて尋絵は戸惑っている様子だったが。

「お詫びと言つてはおこがましいとは思いますが」

と言つて細木が差し出した紙袋は、彼が持つとやたら小さく見えた。恐る恐る尋絵が受け取ると、相対的に通常の大きさに戻ったそれには、そちらの面には疎い麻生でも知っているブランドマークがプリントされていた。警戒心を解かぬまま好奇心に煽られ中身を覗き、

「……しょうがない。今回だけですよ」

「ニヤけてるニヤけてる」

「えゝ？」

「口元を締めろ」

「麻生さん」

「俺にも手土産？」

「卑しいぞ、アソー」

「おめーに言われたかねえよ」

後生大事に紙袋を抱える尋絵を睨み付けた。

「お話があるのですが、いいですか？」

相変わらずの仏頂面ではあるが、何かしらの敵意のようなものは、細木からは一切感じられない。いきなりボコられるといった心配はなさそうだ。

「ああ、見ての通りヒマだし」

「ここでは、その……」

細き程の巨体が言いにくそうにキョドキョドする様は見物ではあったが、麻生から促す事にした。

「屋上でいいか？」

「助かります」

頭を下げる細木。この人物、外見だけが凄まじく先走っているがその実、中身は礼儀正しいらしい。

「それと」

「まだなんかあんの？」

「お連れの方は……」

「ここで待ってんだろ」

「うん、待ってる」

頬の筋肉という筋肉が弛み切った尋絵には、さすがの麻生も引いた。

第33話：「葉崎Guardianの意志」

病室に尋絵を残して屋上へと上がった麻生は、一昨日の事をぼんやり思い出しながら、物干し竿で風に揺れるシーツ郡を眺めた。

「傷の具合はどうよ？」

一昨日と同じ場所で、フェンス越しに街並みを眺望する。左胸に手を当てた細木は麻生と肩を並べて、

「まだ少し痛みます。しかし、心配はないようです。あの医師の処置は迅速でしたし、何より社長は　　本気で殺すつもりなどなかった」

「あんただって、殺すつもりなんてなかったんだろ？」

あれだけ血に塗れた地面はきれいなものだった。染みの1つや2つは残るだろうという浅生の予想は杞憂に終わった。誰が清掃したのか　まさか忍足ではないとは思うが　見事なお手並みである。「殺そうと、思ったのかもしれませんが」

仏頂面からはわずかに沈痛が垣間見えた。

「私は会長の人柄に惚れ込んでいた。会長の志に正真正銘、魅かれていた。だから、その逆にいる社長が許せなかったのは事実です」

「じゃあ、どうして傍にいたんだよ？」

「社長に気付いてほしかった。社長にも会長の血が流れているはずですから」

「孫の代で、その血も薄まっちゃったんだろ」

あの老人とあの男は、思想も思考もかけ離れすぎる。2人のそれが重なる事など、麻生からは想像に難かった。

「その事、なんですが」

「どの事？」

「社長は会長の孫じゃないんです」

麻生の顎が軽く落ちた。

「孫じゃない？」

「そうです」

孫でなければ何だと言うのか。それに、細木の発言と矛盾する。まさか彼自身、忘れたなんて言い出すわけがないだろうが。

「けど、タケさんの血が流れてんだろ？」

「会長の子供です」

「子供お！？」

突飛な言葉に麻生が仰け反る。

「会長は 逝った人の、こういった事を話すのは少しばかり心苦しいんですが その……」

驚愕で硬直中の麻生をそのままに、伏目がちに齒切れ悪く、それでも細木は言葉を選び出した。

「……こちらの方が、やや見境なかったり、盛んだりしまして巨体が躊躇いつつ小指を立てる姿は見るに滑稽だった。

「……そ、そうなの」

「で、社長ができてしまったという話です」
ふと思う。

「勅使河原 社長っていくつだっけか」

「今年で23です」

「タケさんは？」

「78です」

78 - 23 = 55

55！？

「……動くもんなんだな、腰」

「麻生さん、それは下世話です」

思考が先走ってしまうのだから仕方ない。

「社長の言葉、憶えてますか？」

と突然聞かれても、はてどの言葉かなんてわからない。

「どれ」

「麻生さんが会長の隠し子だという」

「……ああ、あれ」

腹を思い切り蹴られる直前、そんな事を言っていたような気がする。

「あれも本当です」

「まっさか」

笑い飛ばしてみたが、細木の瞳はそれを虚言とするには真剣過ぎた。

「……マジっすか」

「大マジです」

にわかには信じられなかった。

麻生には父親がいた。麻生が殺意を向けた父親がいた。麻生の前に、トラックに殺された父親が。

「身に覚えがねえよ」

「子種に覚えのある人間なんざいません」

正論。

「いやっ、でもよ……」

戸惑いうるたえ、混乱する麻生の頭は必死に反論を探したが、細木の方が早かった。

「私なりに調べさせてもらいました。葉崎に関する情報収集は、三雲が一番得意としているものなんです。量も多く、確実な情報を集められるんです」

「そりゃ、すげー」

混戦する頭で茫然と応えた。

「こんな事、社長には言えなかったんです。しかし、麻生さんが隠し子だというのは直感的に悟ったんでしょう。麻生さんの父親が母親と出会った時、すでに麻生さんは生まれていたんですよ」

そんな話、一度だつて聞いた事ねえしっ！

「あと、麻生さんと一緒にいた少年」

「幸輔？」

「やはり」

どこに合点を見付けたのかわからず麻生は眉をひそめた。

「彼もまた、そうです」

「っはあ!？」

「さらに言えば、井延もそうなんです」

「オフクロー! 今俺、とんでもねえ状況にいんぞお!」

「乱心するのわかります」

「フェンスをつかみ叫んだ麻生の肩に手を置く。

「だあ! メチャクチャだ!」

頭を掻き毟った彼にどこまでも冷静な口調で細木は続けた。

「社長を含めて、会長の過ちは5人います」

「5人の過ちとかゆーな」

「この5人、共通点があるんです」

試すように見つめられるまでもなく、すぐにわかった。

「全員、コースケだっつーんだろ?」

「そうです」

麻生浩介。

松原幸輔。

井延耕佑。

勅使河原 功祐。

「……あれ、もう1人いなくねえか?」

指折り数えてはつとする。麻生の頬が嫌悪感に痺れた。

麻生が潰された人物。笑顔。医者。ストーカー。

「林航助え?」

「彼は無関係です」

間髪入れずに否定され、どこか損をした感覚。

「もう1人のコースケなんですが 見付からないんです」

言う細木の表情は変化に乏しく、彼の心中は探れなかった。

「消息がぶつつり途切れてしまってるんです」

果たしてそれが彼の感情をどの程度揺さぶっているのか。見付からないという結果で満足しているのか、それともまだ探し続けるつ

もりなのか。

「消えたのか、消されたのか　とにかく、会長の子供は5人いたんです。そして、ロッカーのカギ。社長があんなに執着したのは、遺書なんですよ」

「遺書」

反芻してみる。

「今現在、社長が三雲を取り仕切る立場にあっても、それはまだ代理ではないんです。先代の社長　戸籍上の父親ですが　を殺してのし上がっても、正式な立場ではなかったんです」

ロッカーのカギ。固執。正式な社長。隠し子　話が見えた。

「その遺書に、跡継ぎが書かれてるってわけだ」

「そういう事です」

「タケさんに隠し子がいるって事、あいつは知ってたんだな」

「まさか4人もいるとは思ってなかったようですが」

「思い付かねーだろ」

勅使河原武行　麻生の知らなかったその一面。

老人は知っていたのだろうか。麻生が、幸輔が、自分の子供だという事を知っていた上で接していたのだろうか。

否　そんな風には思えなかった。

麻生にも、幸輔にも、トウゴにもコミュニティの人間にも、老人は等しく笑顔を振り撒いた。

老人の笑顔は等しかった。

「……結局のところ」

麻生は呟いた。

「根本は跡継ぎ問題じゃねえか」

とどのつまり、お家騒動。

「勝手に種蒔いといて、大いに巻き込みやがって」

今や人気のない裏口を見下ろす。一昨日の光景は鮮明に目に焼き付いていた。

「　ところで、麻生さん」

「あ？」

まだ胸を焼く思いを乱暴な物言いで隠した。視線を交わした細木が、わかりづらいほどの微妙さで笑ったように見えたから、涙を悟られてしまったのかもしれない。

「カギがどのロッカーなのか、わかったんですか？」

その質問に白を切る事もできた。せめてもの抵抗として、こんな状況を生産してくれた子憎らしい元凶をひっそり処分してやるうかとも考えていた。

「あー」

逡巡した麻生は、今こうして屋上から一望できる街を見渡して決断した。

「もう少し待ってくれるか？ そろそろ届く頃だから」

この街を守り続けようとした老人の意志とやらを、最期まで尊重する事を選んだ。

第34話：「Eliminated 男子」

麻生からその話を聞いた時、幸輔の頭は半信半疑どころか、一割信九割疑に傾いていた。

「ロッカーのカギをトウゴに渡してみてくれねえか。もしかするとロッカーまで行けるかもしれないねえから」

「トウゴが連れてってくれるって？」

「そういう事」

病室のベッドで頷く麻生は、どうやら信じ切っているようだった。「場所を示してくれんのがトウゴにしか思えねえんだよ」

「まさか」

幸輔は一笑したのだが、もしもそれが本当ならば少だけ素敵だと思えたのが一割。彼を実行に移させたのは、むしろ九割の『ありえない』であって、その証明のために行動を起こしたようなものだった。

幸輔はトウゴを気に入っていた。トウゴも幸輔にはよく懐いていた。ロッカーのカギはむしろついでの付加物に追いやって、純粹にトウゴと遊ぼうと思った のだが。

「……………」

呆然と佇む幸輔の足元で、尻尾を上機嫌に振るトウゴがいる。

「……………」

くわえたカギを地面に置いて、トウゴは吠えた。

「……………ま、ここはひとつ、整理してみよう」

平静を取り戻すため、つい先刻の事をわざわざ思い返してみる。トウゴに会いに行くためコミュニティへ向かって、幸輔を見付けるなり跳び込んだトウゴをひとしきり撫でた後にカギを見せ、匂いを嗅ぐや彼の手から奪って駆け出して、どうしたのかと追い駆けて

ガタタン！ ガタタン！ ガタタン！

頭上を電車が過ぎる。佐岩井公園から10分ほど走って辿り着いた高架下は人気がなく、蛍光灯は思い出したように灯り、使われなくなつて久しいと窺える寂れたコインロッカーが、陰湿な空気を致命的なまでに演出していた。

「……マジでか」

本当に、コインロッカーまで来てしまった。

「どうしてここを知つてんだ？」

聞いたところで、トウゴは幸輔の撫でる手に頭をこすり付けるだけ。

に、しても ロッカーと対峙する。酔つ払いがケンカか八つ当たりか、随所がボツコリとへこんでいる外観、中にはドアがひしゃげ、閉じる事も適わないものもある。ずいぶんと開放的になつてしまった戸を指先で押してみると、錆びた蝶番が軋んで鳴った。

一抹の不安。

「……まだ残つてんのか……？」

意見を求めたら、トウゴに首を傾げられた。

カギを拾い上げた幸輔の目の高さに、『015』と記されたロッカーを見付けた。恐々とカギを差し込む。錆付いているせいかわずかな抵抗もありはしたが

ガチツ。

カギは回り、施錠は解けた。

……あれ？

ふと手を止め、目の前にある『015』のプレートとトウゴを交互に見比べる。

「もしかして、そういう事？」

トウゴは幸輔をじつと見つめていた

「015（トウゴ）って事？」

「そういう事」

大東病院308号室。投げかけた問いを、麻生は顎を引いて受け止めた。

「015 15 トウゴ。頼んどいてアレだけど、まさかな〜とか思っただけ、アタリだったわけだ」

入院生活は退屈なようで、大口開けてあくびする麻生。

「これで全部、終わりだ」

ベッドいっぱい背伸びした。

「あれ、中身は何？」

「遺書だつてさ」

「へ〜 そんな大層なもん、コインロッカーに入れてたんかい」
ロッカーにぽつんと置かれていたのは1枚の茶封筒だった。さすがに、しっかりと閉じられた封を切る勇気も、ふてぶてしさも備えていなかった幸輔は一旦コミュニケーションに寄ってからトウゴを返し、ここまで足を運んだ次第。病室の前で、麻生と細木という奇妙な組み合わせと出くわし、麻生を介して茶封筒を受け取った細木は、
「迷惑かけました」

と深々と頭を下げ、帰って行った。

「中身、見なくて良かったの？」

「タケさんの遺書なんか、見たくねえよ」

ぶっきらぼうな麻生の語調は、どこか不安定さを隠し切れていない。そうだね 小さく、幸輔は応えた。

「そういえば。細木さんは元気そうだったけど、あの、勅使河原つてヤツは？」

「元氣みてえ」

今度は安定したぶっきらぼう。大して興味なしといった口調。赤く染まる左肩に手を当て苦痛に歪めた勅使河原の顔を、麻生は思い出していた。2人とも、撃とうと思えば続けて撃てたはずだ。いち早く動いた忍足を押しのければ、勅使河原は確実に細木を殺す事はできた。

しかし実際は 2丁の拳銃が同時に地面に落ちた。

殺すつもりなんてなかったんだろよ。

屋上に到着した看護士たちは有り様を目の当たりにするなり蒼褪めたが、忍足の機敏かつ的確な指示を前に処置を優先してくれた。担架に乗せた麻生を先頭にして、左足を引きずる忍足、左肩を押さえる勅使河原、左脇腹から血を流す細木　1列になって手術室に吸い込まれる様は、端から見ればさぞ珍奇に思えただろうに。

「ふふ、ふふふ」

「……………」

聞こえない振りをしていたが、先程からずっと尋絵の含み笑いが続いていた。

「あ、そうそう」

尋絵を、まるで不気味な何かのように見ていた幸輔が口を開く。

「受付の奥にさ、その日にいる医者の名前がひと目でわかるボードがあるんだよ。医者フルネームが書かれたプレートを差し込んで、簡単に入れ替えられるヤツ」

単なる無駄話。

「ヘーソー」

麻生があくびするのも構わず。幸輔の話は進む。

「忍足先生の下の名前、憶えてる？」

「忘れた」

「ヒロトっていうんだけど、どういう漢字だと思う？」

「知らん」

「系偏に広いの『紘』、透けるの『透』でヒロトなんだって。読み方かえるとコースケになるなあとか考えて、すっげー偶然！」

勝手に感動する幸輔、依然として含み笑う尋絵。

ひろと　紘透　こうすけ

過ちは5人　細木の言葉が蘇る。

消息を絶った、5人目のコースケ。

もし……

もしも性転換をしていたら　女になっていたら、どうなる？

コースケという男を探し続けても、女には辿り着かないのではないか。

忍足は時折、女とは思えない気迫を發揮した。元が男であったなら。

「……バカバカしい」

「何か言った？」

呟いた麻生の声は小さくて、幸輔の耳にまでは届かなかった。

「女って、ブランド物を与えたらこうなるもんなのか？」

「あんたにはわかんねえだけだ」

指差した先で尋絵に睨まれた。

「ブランド物ってキレイだし、女としては持ち歩きたいものなんじゃないの？」

「幸輔ってばいい男！ どうして恋人いないのか不思議！ どうしていないの？」

「俺に聞かれてもわからないっす」

「何でいないの？」

「わからないっす」

「ほしくないの？」

「ほしいっす」

「どうして作んないの？」

「できないんっす」

何とも取り留めのない一問一答を始めた2人をよそに、

まさかな。

麻生は思考をシャットダウンした。

最終話：「T e s s y s a i d . . .」

1ヵ月後、勅使河原が死んだ。

「……………」

食料を詰め込んだビニール袋を下げて、マンションの前で、彼を待っていた細木から聞いた。

「いつ」

「昨日、亡くなりました」

いつでも仏頂面だった目が、心なしか腫れていた。

「どうして」

「街をぶらついていたんです。新入りに街を案内するって言い出しました」

「あいっらしくねえ」

「私もそう思います。それで、隣町の組のヤツと出くわして……………」

「やられたのか」

「はい。新入りをかばって、撃たれました」

ガタン！ ガタン！

高台の線路で電車が騒ぎ立てる。

勅使河原が、新人をかばって死んだ。

あの勅使河原が。

ガタン！

あつという間に電車は過ぎた。

「……………会長の遺書を目にしてから、社長は少し変わったんです」

遺書。そこに何があったのか、麻生は知らない。細木は 慇懃

な彼の事だ、きっと目の前にあっても読みはしないだろう。

「むやみやたらに血を流さなくなりました」

「大きな変化じゃねえか」

「はい」

細木はくすりと笑わなかった。

「じゃ、三雲興会はどうなるんだ？」

社長である勅使河原が死んだ今、組織はそれでも存続するのだろうか。

「私が、社長になります」

やはり仏頂面に変化はない。麻生は頷いた。

「そつか。なんつーか……ま、がんばれ」

我ながら、もっと気の利いた、場の空気を汲んだセリフはないのかと呆れる。それでも細木は、

「ありがとうございます」

と礼をした。

顔を上げた細木が1度だけ瞬いた。

「それと、社長の今際の際に言った言葉なんですが」

2人の脇を乗用車が走り去った。エンジン音に紛れて、細木の声が鼓膜を震わせる。もしも彼の声が太いものでなければ、きっと聞こえなかったように思う。

「麻生さんは、どう思いますか？」

返答を求めた細木の瞳は、少しだけ潤み始めている。いくら心のどこかで許せなかった相手だったとしても、細木にとっては社長であり続けていたのだと実感した。

「そんな事ねえよ。あんだだってそう思うだろ？」

「はい」

確固たる信念を感じさせる首肯だった。

「それでは 失礼します」

一礼して踵を返した細木を、麻生は慌てて呼び止めた。

「どうしました？」

「あんだ、社長だろ？ 迎えの車とか、ねえの？」

見回した範囲には、それらしき車は見られない。社長という身分上、1人ノコノコ歩いていいものでもないはずだ。

「正式に社長となるのは明日からなんです。だから、まだ社長は社

「長のままなんです」

「まぎらわしいって」

「ここまで、歩いて来たんですよ」

「電車とか使えよ」

「葉崎を歩きたかったもので。よく、社長と歩いていたんですよ。」

では、失礼します」

それ以上、話す事はなかった。細木は勅使河原の死を伝えに来ただけだろうし、麻生はこれから食事の準備をしようと思っていたところだった。

「じゃあな！」

別れの挨拶が一泊遅れてしまったのは、不意を衝かれたから。

よく、社長と歩いていたんですよ。そうだった細木は微笑^{わら}っていた。普段能面のような彼らしい、ぎこちなく照れもある笑顔だった。

「さて、と」

ガサガサとビニール袋を鳴らしマンションに足に向けた麻生の頭の中で、勅使河原が言う。

あー。

かっこわりいな、俺。

「そんな事ねえよ、てっしー」

もう一度呟いて、麻生はエレベーターのボタンを押した。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3722c/>

葉崎Guardian

2010年10月8日14時17分発行